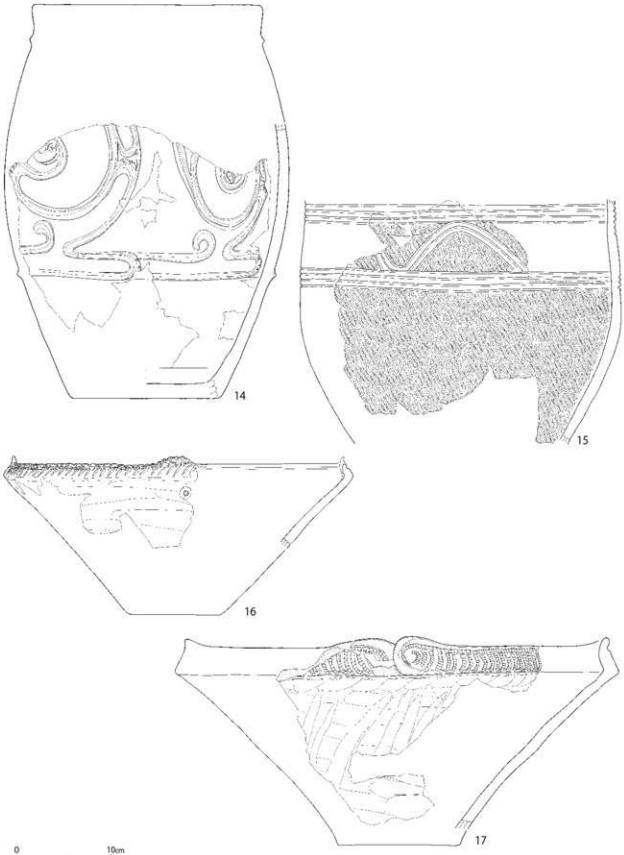
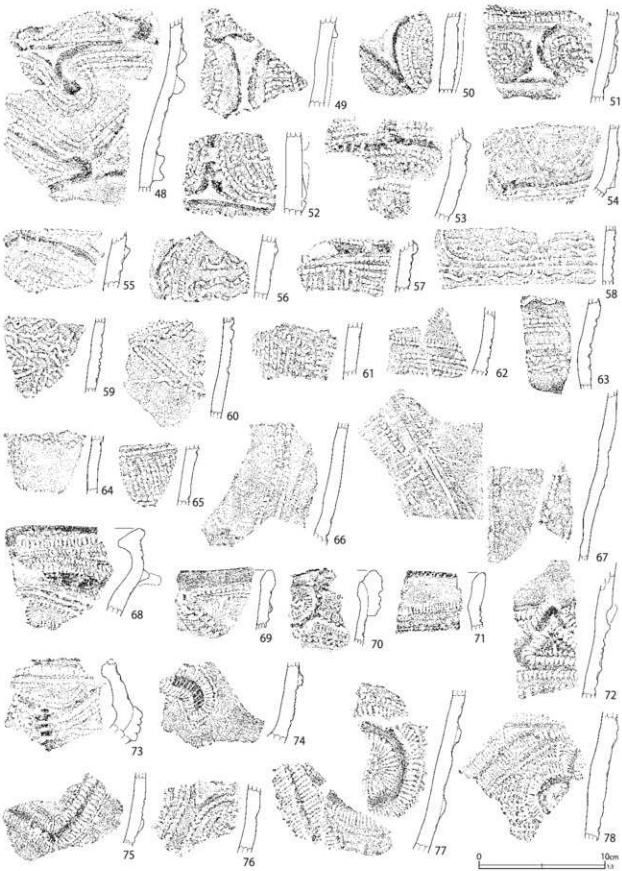
第498図　第63号住居跡出土遺物（2）

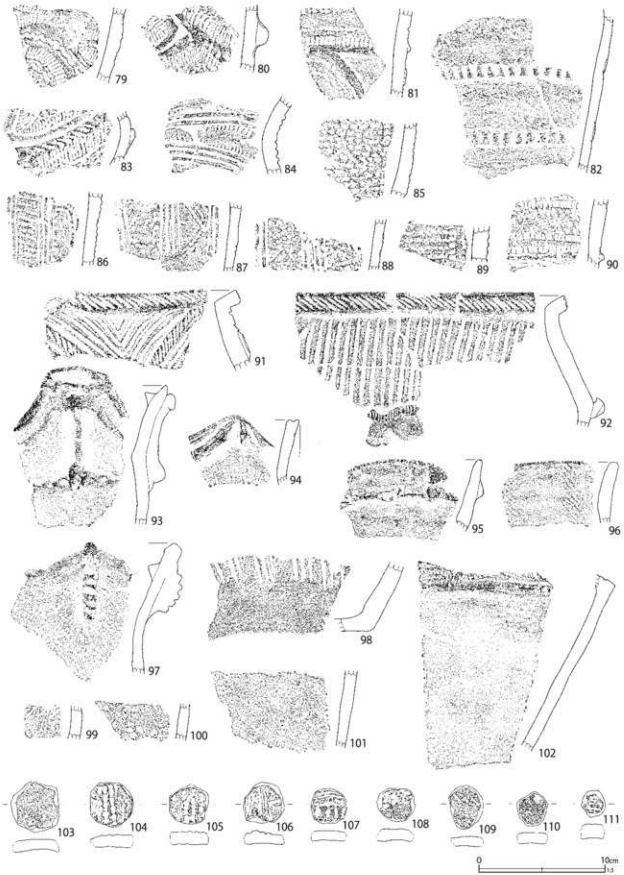


第499図　第63号住居跡出土遺物（3）

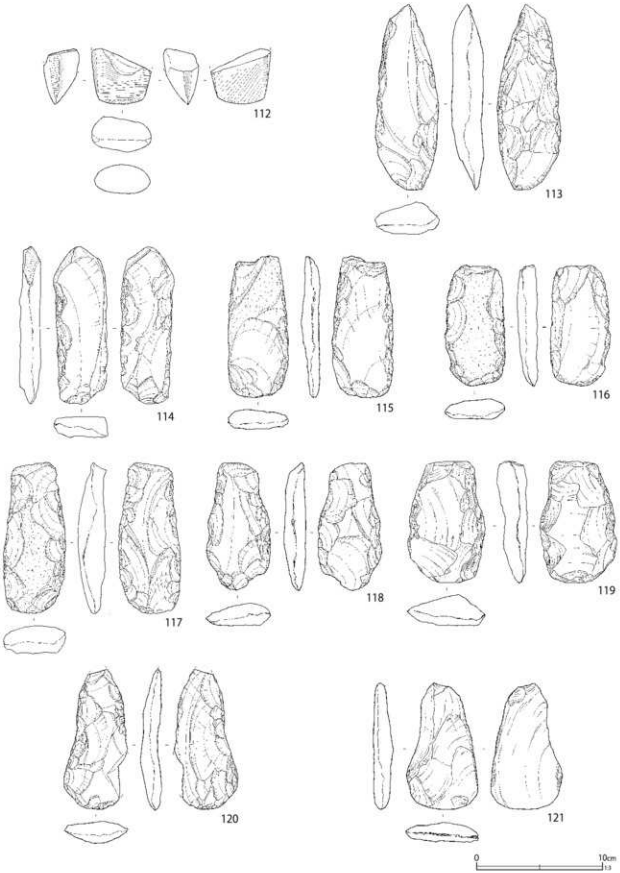
第500図　第63号住居跡出土遺物（4）



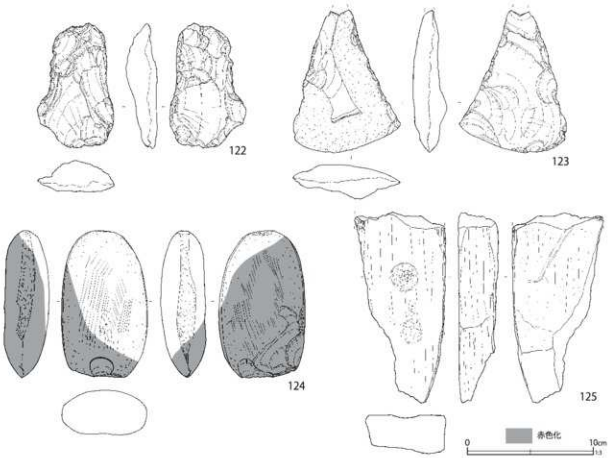
第501図　第63号住居跡出土遺物（5）



第502図　第63号住居跡出土遺物（6）



第503図　第63号住居跡出土遺物（7）



第504図　第63号住居跡出土遺物（８）

第198表　第63号住居跡出土石器観察表（第503・504図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
503 - 112	磨製石斧	Ⅱ②イ	砂岩	[4.4]	[4.7]	[2.8]	58.8	
113	打製石斧	Ⅰ①イ	黒色頁岩	14.7	5.1	2.6	198.2	
114	打製石斧	Ⅱ2①イ	ホルンフェルス	12.4	4.3	1.7	122.9	
115	打製石斧	Ⅱ2①イ	緑泥片岩	11.2	4.8	1.5	117.2	
116	打製石斧	Ⅱ2①イ	砂岩	9.6	4.8	1.6	99.6	
117	打製石斧	Ⅱ2①イ	砂岩	12.0	4.9	2.2	145.9	
118	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	10.2	5.1	1.8	105.2	
119	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	9.6	6.1	2.4	154.3	
120	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[11.1]	[5.0]	1.7	86.8	
121	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	10.0	5.7	1.6	93.4	
504 - 122	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	9.9	6.1	2.5	123.7	
123	打製石斧	Ⅲ2②イ	砂岩	[11.3]	8.5	2.7	188.7	
124	磨石	Ⅱ1-3①ア	砂岩	11.7	6.9	3.6	464.0	表裏面一部赤色化
125	凹石	Ⅳ1-3②イ	緑泥片岩	[15.1]	[7.2]	3.2	497.1	

行沈線で幅狭に区画し、区画縁辺に刻みを施している。胴部も縦位の並行沈線を垂下し、沈線に沿って刻みを施す。

７、８は口縁部に縦位隆帯で扇状区画を施すもので、７は頸部で括れ口縁部が外反し、胴部が膨れる器形を呈する。口縁部区画や縦位隆帯に沿って半截竹管状工具による平行結節沈線を施文している。８は扇状区画内に単列および複列の角押文を施文するもので、幅広の口唇部上には３列を施文する。

９は無文の平口縁深鉢で、口唇部に部分的な刻みを施文している。

10は径の大きな円筒形土器で、無文幅広の口縁部を段状に作出し、眼鏡状把手を付けている。胴部を上部の胴部文様帯と下部の底部文様帯の２帯に分帯している。胴部文様帯は上下対向の羊角状渦巻文４単位を、入組渦巻文状に横位連結するモチーフを描いている。隆帯渦巻文の連結部では、隆帯の先端が口を開けた蛇頭状を呈している。余白には三叉文を中心としたモチーフを施文するが、眼鏡状把手の下部とその反対側である裏側の三叉文には、配置が異なるもののそれぞれ７個の円形刺突文を施している。三叉文と隆帯を挟んで対峙する変形三叉文は、三叉文３本を組み合わせた構成で、人体文のような表現にも見える。モチーフを描く隆帯には刻みを施しており、隆帯脇に平行沈線を施文し、爪形文を沿わせている。底部文様帯には、鋸歯状隆帯で８単位の三角形区画文を施文するものと思われる。欠損部があり単位数を推定せざるを得ないが、10単位構成の可能性も残される。隆帯脇にはキャタピラ文状の角押文と、細い角押文２列を施文し、区画内には細い角押文と同種の角押文で垂下する鋸歯状文を施文している。この土器の隆帯脇の処理に、平行沈線文＋爪形文と太角押文＋細角押文の２種類を併施文している点が注目される。

11、12は無文となる底部である。

13はＰ５の覆土内より出土した土器である。底部のみ現存し、地文条線上に垂下隆帯を施文している。

14は樽形の胴部を有し、口縁部は現存しないが有孔鐸付土器と思われる。断面三角形の隆起線２本対で渦巻文を描き、２本隆帯のうち１本が派生して胴部の区画文帯を構成する。渦巻文の先端はゾウの鼻状を呈する。２本隆帯は連結部や区画の要所に捻じりを加えている。地文は無文である。

15はやや器高の低い深鉢と思われ、半截竹管状工具の重ね施文による平行沈線４本で胴部を区画し、区画内に３本沈線の波状文を施文する。区画内には部分的に三叉状印刻を施文する。地文は、全面に単節ＲＬの横位施文を行う。東北系の要素が窺われる。

16、17は口縁部が短く内折する浅鉢である。16は口唇部に円形刺突文を施す小さな山形突起を付け、幅狭な口縁部に短い斜沈線を施文する。口唇部には突起と同様な円形刺突文と刻みを施している。胴部に補修孔がある。

17はやや器高の高い浅鉢で、口縁部は隆帯の楕円区画文が合わさった非対称の双頭状突起を呈し、楕円区画内に区画末端の渦巻文を取り囲む弧線文を全て角押文で施文している。

18～34は口縁部が内湾するキャリパー形深鉢の口縁部破片である。口縁部の区画は隆起線状の隆帯で行い、隆帯及び区画内に単列及び複列の角押文を施文する土器群である。

18、19、21、22は口縁部から刻みを施す隆帯を垂下して区画し、細めの角押文を複列で施文する。狢沢式系の土器と思われる。35は内湾の緩い口縁部で、単列の角押文で横位線と鋸歯状文を交互に施文する構成をとる。

23～25、29は区画隆帯脇に単列の角押文を施文するもので、阿玉台Ｉｂ式に相当しよう。20、26～28、30、31、33、34は複列の角押文を施文するもので、20は区画隆帯脇に単独の角押文を２列施文している。26、28、30、31、33、34は半截竹管状工具の押引文による平行角押文を施文するものである。阿玉台Ⅱ式に比定されようか。単列の角押文から平行角押文（押引結節刺突文）への変化が看取されるが、必ずしも型式変化に対応しているかは判断しきれない部分がある。

27は口縁部の扇状把手の一部で、小継ぎの結節沈線と、波状沈線を施文する。阿玉台Ｉｂ式であろうか。

36、37は隆帯の楕円区画内に、縦位の爪形文

列を施文するものである。40は爪形文を施文しないものであろう。37は口縁部と楕円区画隆帯脇に、角押文というよりも平行押引結節刺突文を施文している。阿玉台Ⅱ式であろう。

38、39は鉢形土器もしくは浅鉢の口縁部と思われ、幅広の口唇部に２本の角押文を巡らせ、外側の１本を部分的に区切ってモチーフとしている。

18、24、25、27 ～ 30、36、37は胎土に雲母を含んでいる。

41 ～ 47は断面三角形の隆帯で区画やモチーフを描き、２列角押文の弧線文、平行沈線の小波状文、大きな爪形文を描く阿玉台式系土器の胴部破片である。いずれも胎土に雲母を含んでいる。

48 ～ 57は隆帯脇に平行角押文を施文するもので、部分的に複列の集合角押文を施文するものもある。58 ～ 67は角押文のみ施文されている土器群で、単列の角押文や平行角押文でモチーフを施文するものである。貉沢式、阿玉台Ⅰｂ式、Ⅱ式の破片が含まれているものと思われるが、各要素が折衷的に融合している。54、58、63は胎土に雲母を含む。

68 ～ 81、83はキャタピラ文や爪形文とともに、三角押文を施文する土器群である。

68 ～ 73は口縁部破片で、区画隆帯脇にキャタピラ文や爪形文を施文し、三角押文を沿わせている。楕円区画文内では、横位の鋸歯状文を細かな三角押文で施文している。区画の余白や、区画交点などに三角印刻を施文するものもある。

68は口縁部の区画に角押文と三角押文を施文し、胴部区画に半截竹管状工具の平行沈線を使用しており、２種類の区画要素を併施文する。また、平行沈線のパネル状区画の縁辺には細かい刻みを施している。

69は隆帯脇に２列の三角押文を施して区画するが、区画内にはその内の１本を利用して三叉文を構成し、短い脚部分に削り取り状の三角印刻を施している。パネル状区画文と同様に区画縁辺に刻みを入れている。

70は三角形状の突出する突起から隆帯を垂下して口縁部の楕円区画を行い、区画内にキャタピラ文と鋸歯状の三角押文を施文する。口縁部の突起は、口唇上で三角印刻状の窪みを呈している。

74はモチーフの隆帯脇に爪形文を施文するが、三角押文ではなく折れ線状の鋸歯状文を施文している。79も同様に折れ線状に施文するが、方向を変えての施文であり、刺突文に準じる手の動きで描いている。

84、86 ～ 88は平行沈線によるパネル状区画文と思われ、84、86、87は区画縁辺に刻みを施している。また、86 ～ 88は区画内に集合角押文を施文する箇所もある。85、89、90は集合三角押文を施文する。

82は文様帯区画文のような胴部の襞状整形痕を残す阿玉台式系土器である。

91、92は口縁部が内屈する器形の深鉢で、同一個体と思われる。口縁部には楕円文を区画し、区画内に半截竹管状工具の平行沈線を縦位に施文する。口縁部の下端区画は刻みを施した波状隆帯で行っている。外折する口唇部には斜位の刻みを施している。

93は阿玉台式系の山形波状口縁土器で、口縁部の区画に押圧隆帯を使用する他、装飾的な部分はない。

95は幅狭の扇状把手であり、口縁部区画まで扇の縁の捻りを加えた隆帯を垂下する。他に装飾はない。

96、99 ～ 101は口縁部から間隔を空けた帯縄文が垂下する構成の深鉢で、１の炉体土器と同じ構成になるものと思われる。縄文は全て単節ＬＲの縦位施文である。

97は波状口縁の波頂部から刻みを施した短い隆帯を垂下し、地文に単節ＲＬの横位施文を施す。把手状垂下隆帯の裏面には、三角印刻を施している。

98は底部であり、半截竹管状工具の平行沈線を

垂下し、単節ＲＬ縄文を垂下施文する部分がある。全体に地文を施文しているかは不明である。

102は浅鉢で口縁部に角押文のモチーフを施文する。

94は加曽利Ｅ式系の波状口縁土器で、頸部で括れ、外反する口縁部の波状に合わせて隆帯を貼付するものである。地文には撚糸文Ｌを施文する。

土製品では、103～111の土器片を利用した土製円盤が出土した。104、105など勝坂式期の土器片の使用が明らかである。

石器は112～125が出土した。

112は乳棒状磨製石斧の刃部片である。

113～123は打製石斧である。113～117は短冊形を呈し、全て刃部が両刃である。118～123は撥形を呈する。短冊形と同様、刃部はいずれも両刃である。

124は磨石で、周縁に敲打痕を有する。

125は凹石で、裏面に凹痕を有する。

第64・65号住居跡（第505図～第523図）

第64号住居跡は、Ｉ・Ｊ－19区に位置する。北側で第65号住居跡と重複するが、本住居跡の方が新しい。また、床面で検出された第124土壙は、本住居跡よりも古い。

住居跡の平面形は北西方向に細長い楕円形で、規模は長径5.2m、短径4.7m、深さ0.5mと比較的深い住居跡である。

壁溝は検出されなかった。壁は床面から皿状に緩く立ち上がる。

柱穴は第65号住居跡と合わせて、25基が検出された。覆土、重複状況、深さ及び配置から１回の建て替えが行われ、２軒の住居跡が重複したものと想定される。

新しい住居跡の主柱穴と思われるものは、Ｐ12、１、２、４、６の５基で、５本主柱の住居跡が、古い住居跡の主柱穴はＰ11、13、３、７の４基で、４本主柱の住居跡と想定される。なお、Ｐ７の底面近くから、時期は判然としないが浅鉢の底部が、ピットを塞ぐかのように幅いっぱいに出土している。

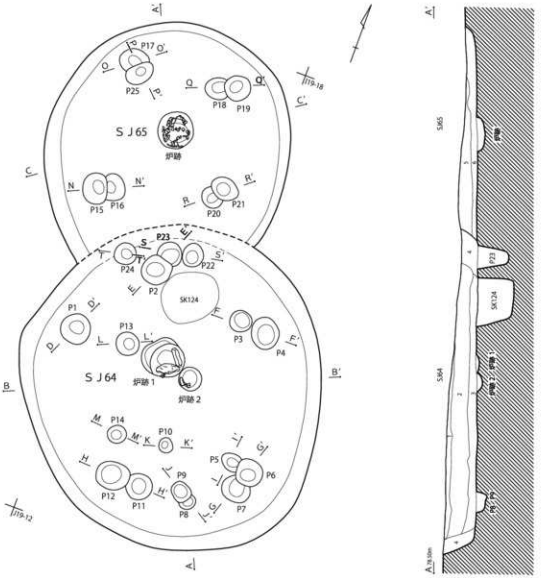
主柱穴の深さは、Ｐ１＝70cm、Ｐ２＝60cm、Ｐ３＝50cm、Ｐ４＝55cm、Ｐ６＝62cm、Ｐ７＝45cm、Ｐ11＝62cm、Ｐ12＝62cm、Ｐ13＝60cmである。

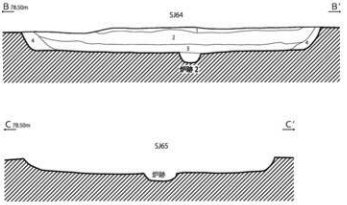
炉跡は中央付近から２基検出された。炉跡１は、長尺の礫を２個残しており、石囲炉であったと思われる。規模は南北方向にやや長い楕円形で、長径70cm、短径62cm、深さ17cmを測る。入り口部に面すると思われる炉の南側に大きい方の礫が残されており、石囲炉の炉石が抜き取られたとしても、この時期に特徴的な炉の残存形態として、入り口部に面した細長い炉石が残されていたとすれば、添え石炉的な様相も色濃く有していると言えよう。また、下部の掘り込みも深く、掘り込みの側面には被熱による焼土化が見られることから、土器が埋設されていた可能性が高い。

炉跡２は、径35cm、深さ12cm程の円形状の掘り込みの中に土器片が立て掛けられた状態で出土しており、大半が抜き取られたものと思われるが、埋甕炉であったと判断される。なお、両者の新旧関係は明瞭ではないが、柱穴群との配置を考慮すれば、炉跡１が新段階、炉跡２が古段階の柱穴に対応すると思われ、少なくとも1回の建て替えが行われ、２軒の住居跡が重複していたことが理解される。

埋甕は検出されなかった。しかし、偶然の可能性もあるが、新段階の住居跡の入り口部に想定されるＰ12とＰ６の中間の壁に寄った位置で、完形の浅鉢が正位で出土した。床面からは少し浮いた覆土の中層付近であるが、口縁を水平にして設置されたような状態で出土している。吹上パターン状態で出土した土器群との関係については、把握できなかった。しかし、偶然ではなく、意図的な行為の結果であるものと考えておきたい。

住居跡覆土からは、炉跡１の直上あたりを中心

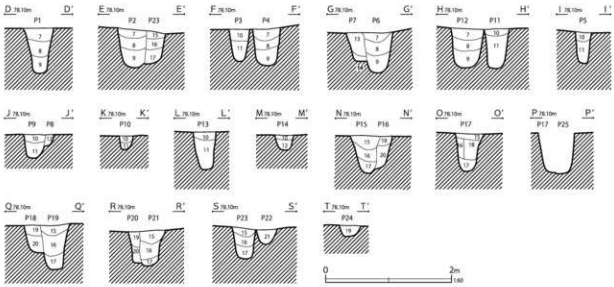




S J 64・65
1　暗褐色土　ローム粒子・炭化物微量
2　暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量　焼土粒子微量
　　ソフトロームをブロック状に少量
3　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　焼土粒子微量
　　ソフトロームをブロック状に多量
　　ローム小ブロック少量
4　褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量
　　しまり非常に良い
5　暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量
　　ソフトロームをブロック状に少量
6　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物・ローム小ブロック少量

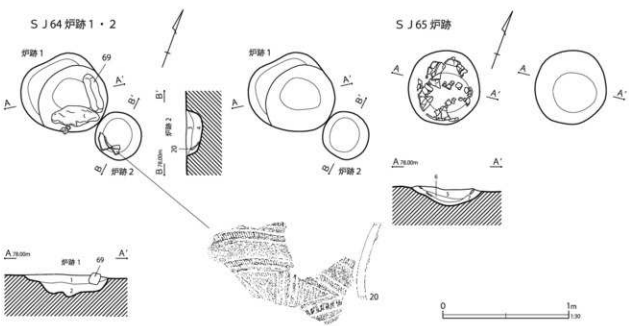
0　2m
1:40

第505図　第64・65号住居跡（1）



ＳＪ64・65 ピット

7　暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量　焼土粒子微量
8　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量
9　暗褐色土　ローム粒子多量　ソフトローム混入　粘性強い
10　暗褐色土　ローム粒子多量　ソフトローム・炭化物少量
　　ローム小ブロック微量
11　褐色土　ソフトローム・ローム粒子多量　炭化物少量
12　褐色土　ローム粒子多量　炭化物・ローム小ブロック・ソフトローム少量
13　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物微量　ローム小ブロック少量
14　純黄褐色土　ソフトローム主体
15　暗褐色土　ローム粒子少量　炭化物・ローム小ブロック微量
16　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物・ローム小ブロック少量
　　ソフトローム少量　粘性あり
17　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ソフトローム多量
18　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量
19　純黄褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック少量
　　ソフトローム多量
20　純黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック多量
　　ソフトローム多量
21　純黄褐色土　ローム小ブロック・ソフトローム多量
　　埋め戻されたと考えられる



ＳＪ64 炉跡１

1　暗褐色土　焼土粒子・焼土ブロック（径１～3cm）・
　　炭化物少量
2　暗褐色土　焼土粒子多量
　　焼土ブロック（径 1cm）・炭化物少量
　　ローム小ブロック微量

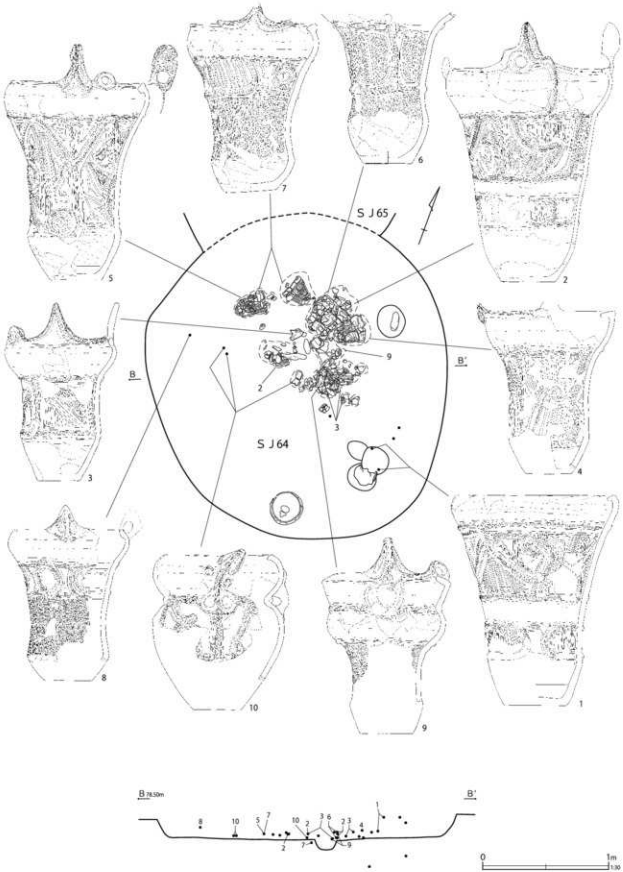
ＳＪ64 炉跡２

3　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量
　　炭化物・ローム小ブロック微量
4　暗褐色土　ローム粒子多量　焼土粒子微量
　　炭化物少量　ローム小ブロック微量

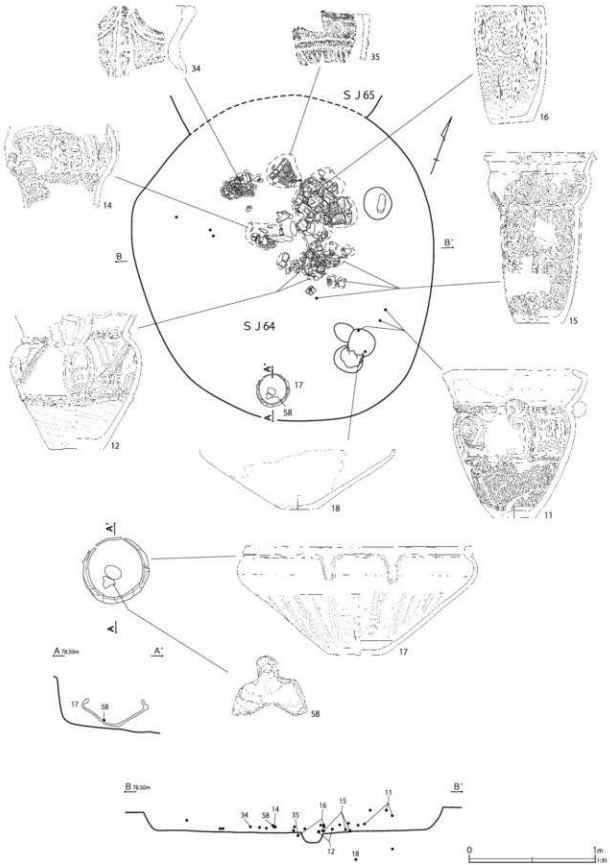
ＳＪ65 炉跡

5　暗褐色土　ローム粒子少量　炭化物微量
　　焼土粒子少量
6　褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量
　　ローム小ブロック少量
7　暗褐色土　ローム粒子多量
　　ローム小ブロック・炭化物・焼土粒子少量

第506図　第64・65号住居跡（２）

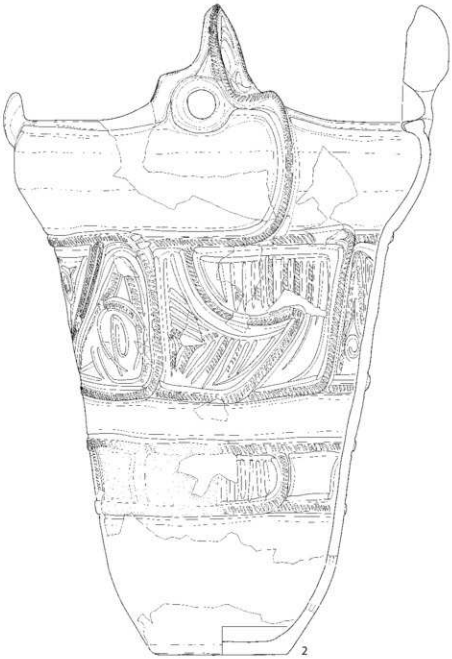


第507図　第64・65号住居跡遺物出土状況（1）

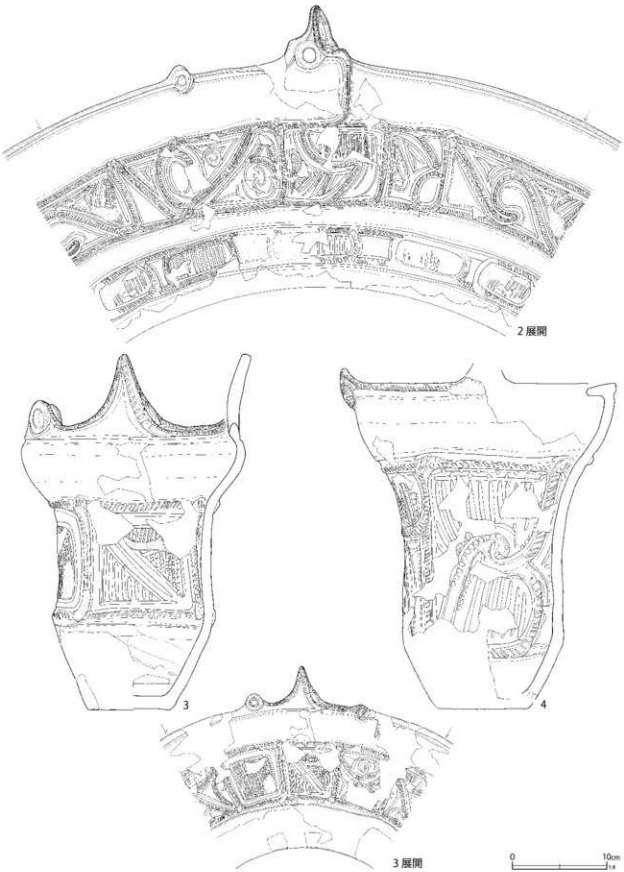


第508図　第64・65号住居跡遺物出土状況（2）

第509図　第64号住居跡出土遺物（1）

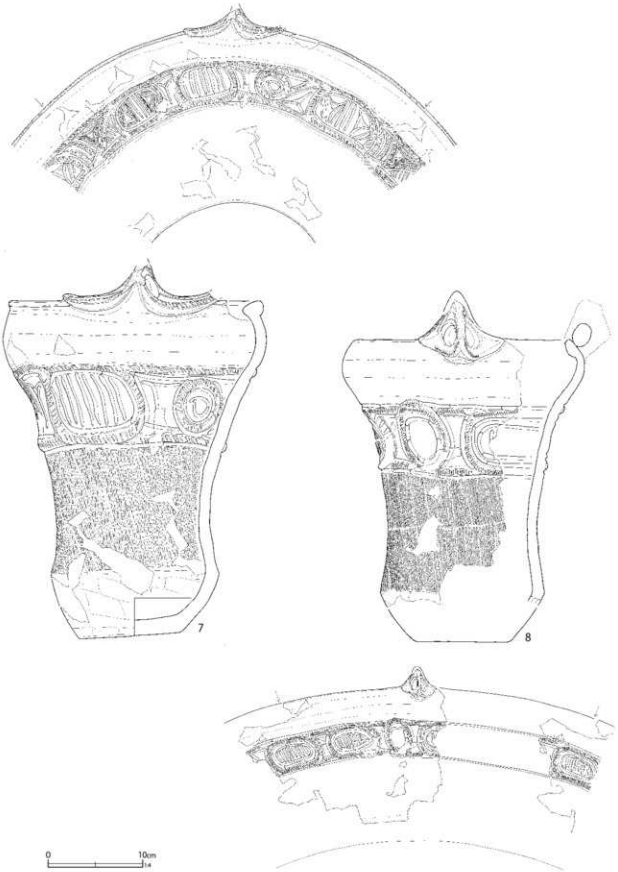


第510図　第64号住居跡出土遺物（2）

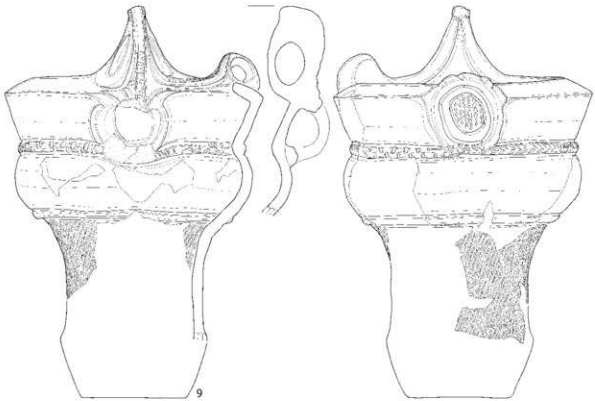


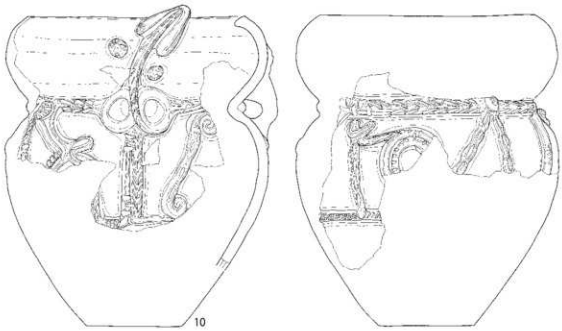
第511図　第64号住居跡出土遺物（3）

第512図　第64号住居跡出土遺物（4）

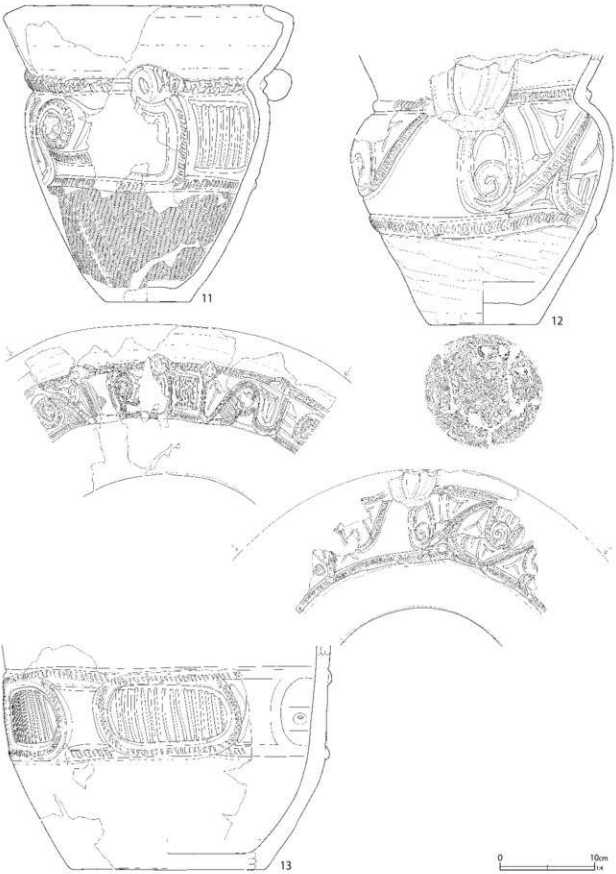


第513図　第64号住居跡出土遺物（5）

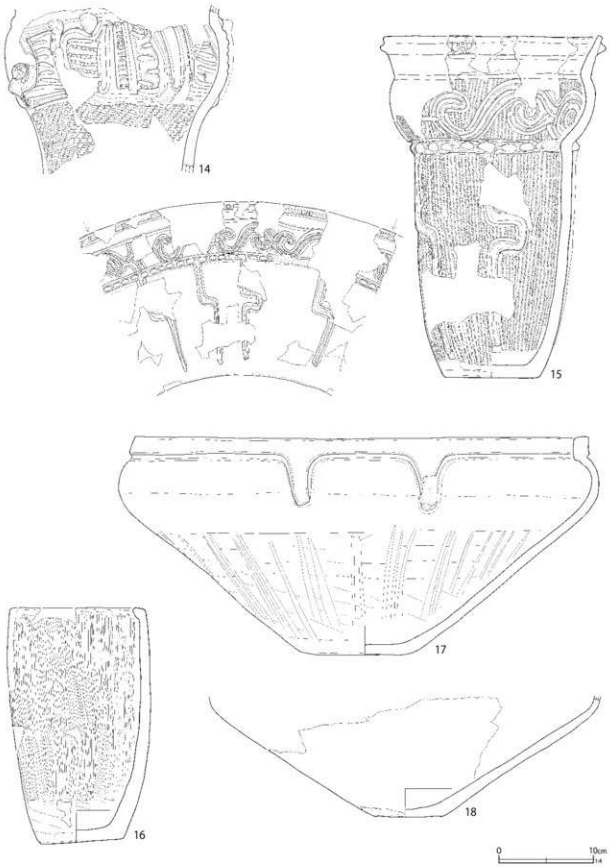




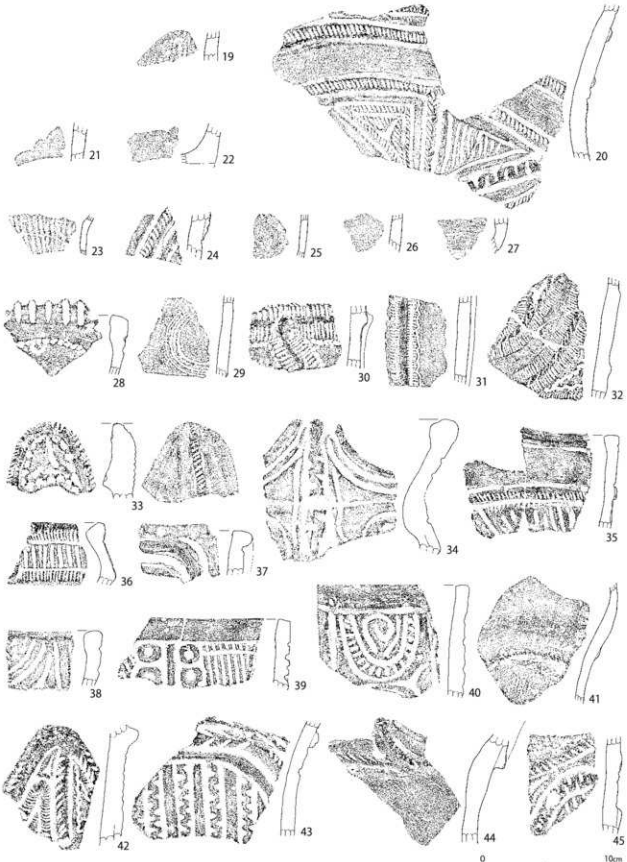
第514図　第64号住居跡出土遺物（6）



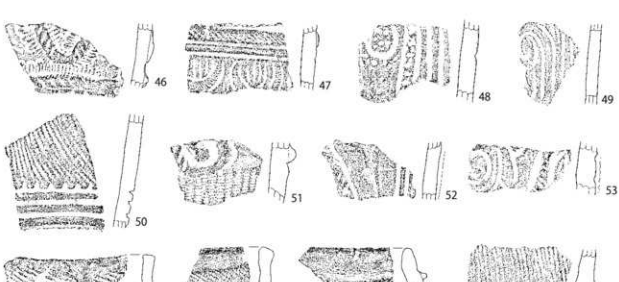
第515図　第64号住居跡出土遺物（7）



第516図　第64号住居跡出土遺物（8）



第517図　第64号住居跡出土遺物（9）



第518図　第64号住居跡出土遺物（10）

第199表　第64・65号住居跡柱穴計測表（第505・506図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	48.0	70.0	P 2	45.0	60.0	P 3	35.0	50.0	P 4	50.0	55.0	P 5	(30.0)	48.0
P 6	45.0	62.0	P 7	46.0	45.0	P 8	27.0	15.0	P 9	32.0	37.0	P 10	25.0	21.0
P 11	42.0	62.0	P 12	53.0	62.0	P 13	37.0	60.0	P 14	30.0	22.0	P 15	47.0	58.0
P 16	42.0	50.0	P 17	43.0	58.0	P 18	(35.0)	42.0	P 19	40.0	70.0	P 20	35.0	48.0
P 21	46.0	53.0	P 22	38.0	22.0	P 23	40.0	52.0	P 24	35.0	15.0	P 25	47.0	62.0

第200表　第64号住居跡出土復元土器観察表（第509～516図）

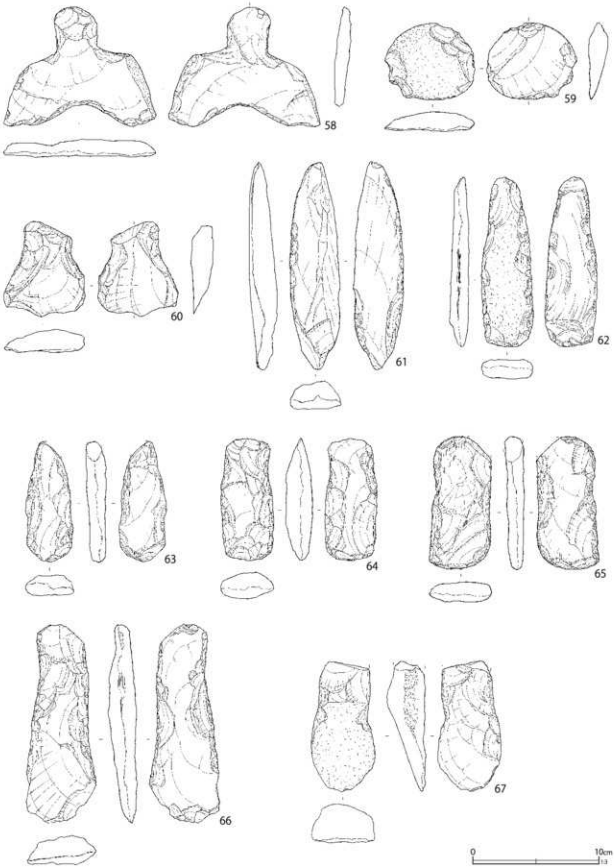
番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
509-1	55.5	41.8	－	(16.2)	70%
510-511-2	68.6	42.2	－	14.0	80%
511-3	[34.2]	(21.8)	－	－	70%
4	(34.2)	(27.8)	－	－	60%
512-5	49.8	27.8	－	10.8	90%
6	[31.7]	－	(28.4)	10.2	70%
513-7	39.7	26.6	－	10.6	90%
8	[28.6]	－	(27.8)	11.6	70%
514-9	[35.4]	21.4	－	－	60%
514-10	[28.0]	(22.8)	－	－	60%
515-11	31.3	(23.4)	(29.0)	－	70%
12	[28.6]	－	(27.8)	11.6	70%
13	[23.7]	(34.8)	－	－	20%
516-14	[17.2]	－	(24.9)	－	40%
15	36.2	(23.2)	－	9.8	60%
16	25.1	(14.4)	－	8.6	60%
17	22.8	48.2	－	10.9	完形
18	[12.7]	－	(41.5)	－	50%

として多量の器形を復元できる土器が、2～3層の境界付近から吹上パターン状態で出土した。

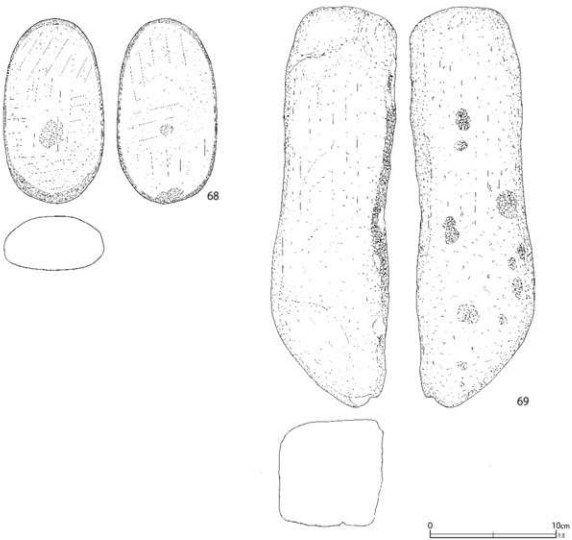
住居跡の時期は、炉2の炉体土器や、覆土出土土器から勝坂式新段階の所産と思われる。

第65号住居跡はⅠ－19区に位置する。南側の壁の一部を第64号住居跡によって壊されており、本住居跡の方が古い。住居跡の全体が樹根による撹乱を大きく受けおり、明瞭ではないが、平面形は南北に細長い楕円形で、規模は短軸方向で3.9m、深さ0.3mを測る。

壁溝は検出されなかった。壁も第64号住居跡と同様に床面から緩く立ち上がる。



第519図　第64号住居跡出土遺物（11）



第520図　第64号住居跡出土遺物（12）

第201表　第64号住居跡出土石器観察表（第519・520図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
519 － 58	大形粗製石匙	Ⅰ1①イ	砂岩	9.5	12.1	1.5	121.8	
59	大形粗製石匙	Ⅱ1①イ	頁岩	6.1	7.1	1.5	69.2	
60	スクレイパー	Ⅰ2①イ	ホルンフェルス	7.6	6.4	1.9	79.0	
61	打製石斧	Ⅰ2①イ	緑色岩	16.5	4.0	2.2	160.9	
62	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	13.5	4.1	1.5	116.5	
63	打製石斧	Ⅰ②イ	ホルンフェルス	[9.6]	3.8	1.6	74.4	
64	打製石斧	Ⅱ1①イ	ホルンフェルス	9.7	4.2	2.1	108.1	
65	打製石斧	Ⅱ2②イ	ホルンフェルス	[10.5]	50.0	1.6	114.2	
66	打製石斧	Ⅲ2①イ	緑色岩	15.7	5.6	2.3	190.1	
67	打製石斧	Ⅲ2②イ	砂岩	[10.3]	5.0	3.1	161.8	
520 － 68	磨石	Ⅱ1-3①イ	閃緑岩	14.7	8.0	4.3	815.8	
69	台石	①ア	砂岩	31.7	9.9	8.9	4219.2	

柱穴は第64号住居跡と合わせて25基検出されたが、覆土、重複状況、深さ及びそれぞれの柱穴が２基ずつ重複することから、主柱穴に２段階の組み合わせが想定される。

新しい段階の主柱穴はＰ15、17、19、21、23の５基が想定されるが、Ｐ23が第64号住居跡内にあるため、確定的ではない。第64号住居跡の古い段階の主柱が４本であるとすれば、第65号住の主柱も４本である蓋然性が高く、新段階の主柱穴はＰ15、17、19、21の４基の可能性が高い。

同様に、古い段階の主柱穴は、Ｐ16、25、18、20の４基と思われる。

したがって、第65号住居跡は４本主柱の住居跡が1回建て替えを行って、２軒の住居跡が重複していたと想定することができる。

主柱穴の深さは、Ｐ15＝58㎝、Ｐ16＝50㎝、Ｐ17＝58㎝、Ｐ18＝42㎝、Ｐ19＝70㎝、Ｐ20＝48㎝、Ｐ21＝53㎝、Ｐ23＝52㎝、Ｐ25＝62㎝である。

炉跡は、中央北寄りに浅鉢を埋設した埋甕炉が検出された。平面形は南北に若干長い楕円形で、規模は長径60㎝、短径56㎝、深さ13㎝である。樹根による撹乱が著しく、土器は脆く、取り上げられる状態ではなかった。炉床面の被熱の痕跡も顕著ではなかった。

埋甕は検出されなかった。

住居跡の時期は、炉体土器からの判断は難しく、覆土の出土遺物から、勝坂式中～新段階の可能性が高いと思われる。

以上、第64号住居跡、第65号住居跡はそれぞれ１回の建て替えが認められ、２軒ずつの住居跡が重複していたものと推測され、勝坂式中段階から新段階の藤内式期から井戸尻式期にかけての所産と判断される。

第64号住居跡出土遺物（第509図１～第520図69）

土器は１～57である。１～12は内湾する無文の口縁部が開き胴部で括れるキャリパー形深鉢土器で、口縁部に文様を持たない土器群である。

１は非常に大形の深鉢形土器で、口唇部が内削状に内折して突出する。胴部は上半部の胴部文様帯と、下半部の底部文様帯を刻み隆帯で区画し、胴部文様帯には区画隆帯から派生して垂下する蛇体文の入組状渦巻文を波状隆帯で繋ぐモチーフを施文する。モチーフの余白には、爪形文を伴わない三叉文や、集合沈線の充填文を施文するが、部分的に隆帯に爪形文を沿わせ、さらに鋸歯状沈線で縁取らせるモチーフを施文する。大きくは３単位構成と思われる。底部文様帯には４単位の楕円区画文を配する構成をとる。

２も同様に大きな深鉢形土器であるが、口唇部に大きな非対称の山形把手を付け、左隣に小さな耳状把手を１箇所にのみ付けている。山形把手の右側から垂下する蛇体状の隆帯を胴部区画まで垂下させ、文様帯を区画する。胴部は上半部に胴部文様帯、下半部に底部文様帯を区画し、胴部文様帯には縦位区画と渦巻文を組み合わせたモチーフを構成しており、大きな区画２単位と小さな区画２単位の４単位で構成している。把手下の区画は小区画文を２単位に施文しており、大区画のモチーフを小区画の２区画に分けた構成となっていることから、この２つを合体させると、大区画３単位の構成となる。数では対称的であっても、内容に対称性を崩す構成を内在している。底部文様帯には、１同様に4単位の楕円区画文を配している。

３は口唇部に大きな山形把手を有し、把手から両脇に垂下する隆帯で、左側の環状把手と繋がり、右側では渦巻文を構成する。胴部文様帯は幅広の１帯構成であり、縦位隆帯を垂下して４分割している。区画内はそれぞれ異なるモチーフを施文しており、充填文のみ１単位、襷掛け状区画２単位、上下対弧状文区画１単位で構成し、集合結節沈線、集合沈線、渦巻文、三叉文等の異なる充填文を施文している。

４も３と同様に、山形把手とそれに連なる渦巻

文を口唇部に施文しており、胴部に縦長１帯の文様帯を構成する。胴部は刻み隆帯で縦位区画を行い、区画隆帯の起点から斜めに垂下する上下入組渦巻文を襷掛け状に施文する。区画内は集合沈線を充填している。

５は口唇部に大きな山形把手と、右側に続く環状把手を配し、胴部に縦長の１帯構成の文様帯を設けている。胴部には、単位性を把握するのが非常に難しい区画を施し、渦巻文や波状文の連携するモチーフを構成している。胴部は縦位隆帯で広狭合わせて５単位に区画しており、把手下を中心とした胴部上半に蛇行隆帯の三角形モチーフを構成し、その両側に逆「R」や裏「R」字状文を施文する幅狭区画を設け、３対２の対応関係を設定している。実際にはモチーフが混在していて把握し難いが、対称性を崩す構造は堅持されているものと思われる。

６は口縁部を欠損するが、胴部に縦長１帯の文様帯を構成し、５本の刻み隆帯の縦位施文で５単位の長方形区画を行う。区画内にはそれぞれ並行沈線を垂下するのみの文様を施文し、地文に単節ＲＬ縄文の縦位施文を行う。また、底部から上の胴部には単節ＲＬ縄文を横位施文している。

７は口唇部に山形把手を付け、把手から両脇に隆帯を派生する。頸部に幅狭な楕円区画文帯を設けて、胴部地文に撚糸文Ｌを施文する。頸部文様帯には楕円区画文と円形文化した渦巻文、区画を繋ぐ斜行隆帯文を交互に配しており、左から「斜行隆帯文」＋「楕円文」＋「楕円文」＋「渦巻文」＋「楕円文」となるが、斜行隆帯文を渦巻文の変形と見做すか、繋ぎ要素と見做すかで、単位構成が異なってくる。楕円区画文の充填要素では、集合沈線文を１区画に、対向の三叉文を２区画に施文しており、対向三叉文では爪形文を伴うものと、伴わないものといった違いを生じさせている。

８は口唇部に山形眼鏡状把手を１単位に付けているものと思われ、頸部に楕円区画文帯を設けている。楕円区画は５単位に配し、現存部分からは、小さな円形文区画１単位、横長の楕円文区画４単位の構成になるものと思われる。地文は細かな撚糸文Ｒである。

９は無文の口縁部が２段に括れる器形で、内折する幅広の口唇部に山形眼鏡状把手を付け、右側に垂下する隆帯で耳状把手と連携する。把手から垂下する隆帯は、外反する口縁部で眼鏡状把手を構成する。眼鏡状把手の反対側には円形区画を施し、結節沈線文を充填施文する。胴部には、０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する。

10は頸部で強く括れ、胴部の張る器形で、頸部に眼鏡状把手を付ける。口唇部上から頸部を上に向けた蛇体が、眼鏡状把手を巻き込みながら胴部へ垂下するモチーフを描いている。頸部の区画は「ハ」字状刻みを施した隆帯で行い、垂下及びモチーフを描く隆帯には連鎖状隆帯を使用する。また、渦巻文の変化した円形モチーフは、縁辺に刻みを施す隆帯で施文する。蛇頭の下には刻みを施した瘤状貼付文を２箇所に付けており、目を表現しているのであろうか。

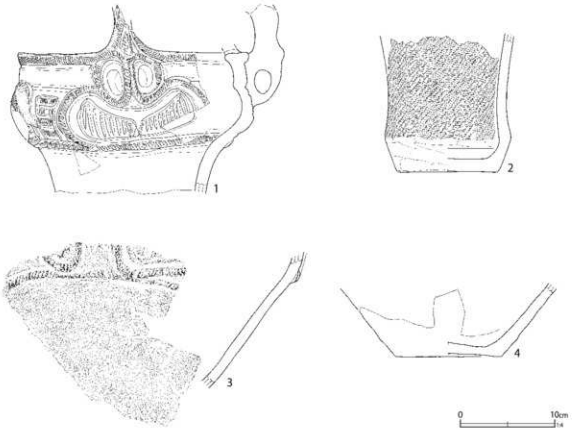
11、12も頸部が強く括れる器形で、胴部上半に文様帯を有するものである。11は方形の区画と渦巻き及び蛇行隆帯文の組み合わせで構成され、区画内及び余白には集合沈線文、三叉文等を施文し、渦巻隆帯には縁辺に刻みを施している。

21は頸部に橋状もしくは眼鏡状の把手が付くものと思われ、胴部には渦巻文を連携する不規則なモチーフを施文する。余白には三叉文を充填施文している。

13は底部文様帯に楕円区画文を配するものである。破片の裏側に、種子圧痕が見られる。

14は口縁部が膨らむキャリパー形深鉢で、口縁部に交互刺突を施す隆帯や、渦巻き隆帯を垂下して縦位区画を施す。区画内には横位を基調として集合沈線や結節沈線を充填施文する。

15は口縁部が丸く膨らみ、口唇部が外反する器



第521図　第65号住居跡出土遺物（1）

形で、口縁部に２本隆帯の横「Ｓ」字状渦巻文を連結するモチーフを構成する。頸部の区画は、連鎖状隆帯で行っている。口縁部の「Ｓ」字状文は入り組まず、接するかもしくは接続文で連携されている。胴部はクランク状に垂下する隆帯文を、４単位に施文している。地文は口縁部から底部にかけて、撚糸文Ｌを施文する。

16は口縁部がやや内湾気味に立つ円筒形土器で、口唇部が内折して、突出する。地文に細かな条線文を施文する。

17、18は浅鉢で、17は覆土中に正位で出土し、18はＰ７からの出土である。

17は内湾する口縁部が開く器形の浅鉢で、完形である。胴部には口縁部から続く低平隆帯を短く垂下し、「コ」字状の区画文を施している。

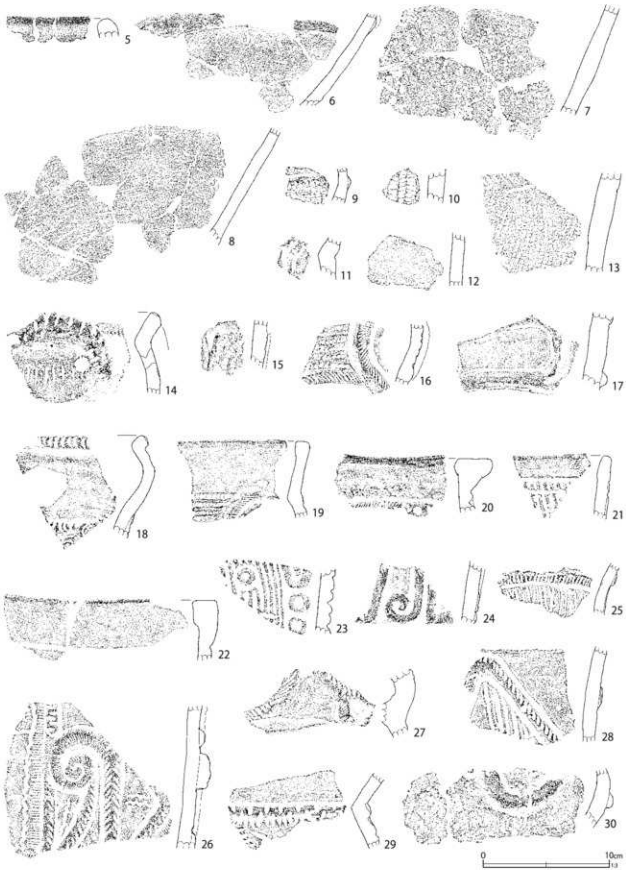
18は胴部下半から底部にかけて現存する。

破片では、20は炉跡２の炉体土器の一部である。頸部無文帯を有し、「ハ」字状刻み隆帯で胴部を縦位区画し、さらに斜位の交互刺突を施す隆帯で細区画を施しており、爪形文を伴う三叉文や集合沈線文を充填施文する。

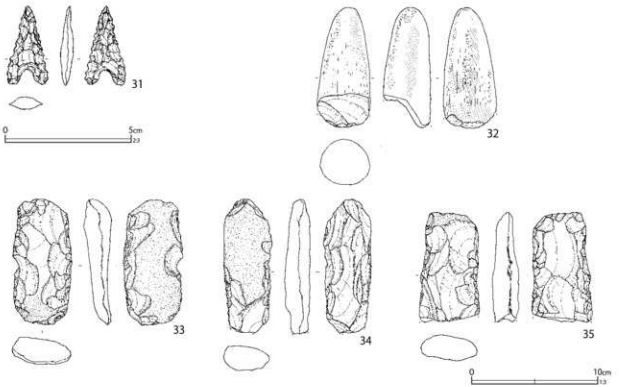
28、29は阿玉台式系土器で、28は山形把手で単列の刺突文でモチーフを描く。阿玉台Ⅰｂ式かⅡ式であろう。29は平行沈線文を施文するもので、Ⅱ式になろうか。

30、32、42は隆帯脇にキャタピラ文と三角押文を施文する新道式である。31は爪形文に沿って折れ線状の波状文を施文することから、藤内式となる可能性が高い。

33～41、43～53は勝坂式の新段階を中心とした土器群である。33、36、48は単列の刺突文や細かな爪形文及び蓮華状文を施文することから、勝坂式中段階から新段階にかけての時期に比定されようか。また、39の半隆起線で施文する円形



第522図　第65号住居跡出土遺物（2）



第523図　第65号住居跡出土遺物（3）

第202表　第65号住居跡出土復元土器観察表（第521図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
521-1	[19.9]	－	－	－	40%
2	[14.4]	－	[14.2]	10.6	40%

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
521-3	[7.2]	(22.8)	－	－	30%
4	[14.4]	－	－	－	20%

第203表　第65号住居跡出土石器観察表（第523図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
523 － 31	石鏃	Ⅰ2①	チャート	3.1	1.6	0.5	1.6	
32	磨製石斧	Ⅰ②イ	安山岩	[9.6]	4.2	3.8	177.0	
33	打製石斧	Ⅱ2①イ	ホルンフェルス	10.1	4.8	2.2	120.1	
34	打製石斧	Ⅱ2②イ	ホルンフェルス	[10.6]	3.8	2.0	101.1	
35	打製石斧	Ⅲ2②イ	頁岩	[8.7]	4.8	2.1	105.4	

文や縦位沈線文、50の区画縁辺に施す刻目なども、同時期であろう。

他は、沈線モチーフを基調とし、刻みを施した隆帯でモチーフを施文するものや、沈線区画文を施文するものなどがあり、勝坂式新段階に比定されよう。

54、55は勝坂式の地文のみ施文する深鉢で、54は０段多条ＲＬ縄文の横位施文、55は単節ＲＬの横位施文である。

56は加曽利Ｅ式の口縁部破片で、横位の撚糸文Ｌ地文上に隆帯のモチーフを描いている。ＥⅠ式となろうか。

57は勝坂式新段階の深鉢の底部破片である。０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する。

石器は58～69が出土した。

58、59は刃部が横に付く大形粗製石匙である。刃部が大きく内湾している。

60は粗粒の石材を用いたスクレイパーである。

61～67は打製石斧である。61～65は短冊形を呈する。刃部はいずれも両刃で、特に63には擦痕が認められる。66、67が撥形を呈し、刃部は66が両刃、67が片刃である。

68は磨石で、周縁に整形が施されている。

69は台石で、炉跡１より出土した

第65号住居跡出土遺物（第521図１～第523図25）

土器は１～30が出土した。９、10はＰ16、２、３、13はＰ17、11はＰ18、12はＰ19からの出土である。

５～８は炉体土器である。樹根等の撹乱を受けており、形のまま取り上げることはできなかった。口唇部の形状や、頸部に隆帯状の貼付が見られることから、口縁部が屈曲する浅鉢と思われる。

１は口縁部に２段の括れを有し、口縁の無文部が立つ器形を呈する。口唇部に山形眼鏡状把手を付け、把手下に楕円区画文を設け、左右の対称形に分けて集合沈線を充填施文する。区画間には蛇行爪形文を施文する。

２、３、13はＰ17からの出土で、２は底部の張り出しまで単節ＲＬ縄文を縦位施文する底部破片で、３は文様帯を有する鉢もしくは浅鉢であろう。13は深鉢の胴部破片で、単節ＲＬ縄文を横位から斜位に施文する。

４は浅鉢の底部であろう。

26は隆帯脇にキャタピラ文と三角押文の鋸歯状文を施文する勝坂式古段階の深鉢である。細かな刻みや交互刺突、「ハ」字状刻みを有する隆帯で区画や渦巻文等のモチーフを描く。新道式に比定されよう。

14は阿玉台式系土器で、口縁部の楕円区画文内に爪形文列を施文している。15は隆帯の楕円区画に沿って２列の角押文を施文する。阿玉台Ⅱ式であろうか。

16、19は同一個体である。無文の口縁部が開く器形で、細かな刻みを施す隆帯でモチーフを描き、三角押文状の結節刺突文を沿わせ、余白に集合結節刺突文を充填施文する。

17は隆帯の楕円区画に沿って、１列の沈線を施文している。

18は口唇端部と頸部の区画隆帯に爪形文を施している。20、22は円筒形土器と思われ、口唇部が肥厚して幅広となっている。21は23と同様に、半截竹管状工具の半隆起線で円形文や区画文を描くものである。24も半隆起線で垂下する渦巻文を施文している。

25、27～29は刻み隆帯で区画やモチーフを描くもので、隆帯脇には沈線を施文するものが多い。

30は浅鉢の胴部で、低平隆帯でモチーフを描いている。

石器は31～35が出土した。

31は両側縁が鋸歯状の石鏃である。

32は乳棒状の磨製石斧で、刃部の正面側が欠けている。

33～35は短冊形を呈する打製石斧である。33のみ刃部が残存しており、片刃で擦痕が認められる。

第66号住居跡（第524図～第525図）

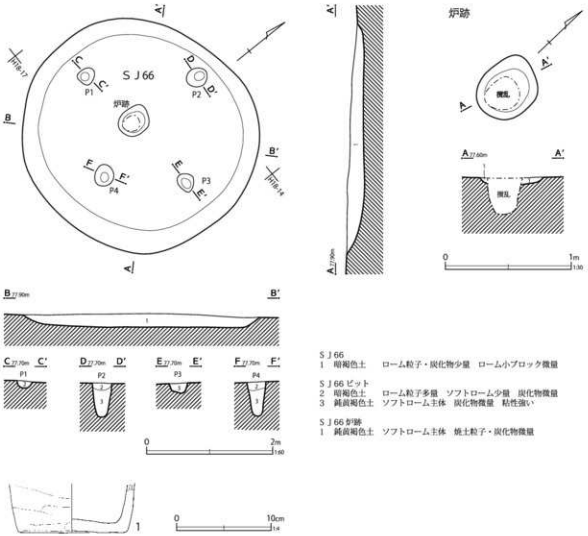
Ｈ－18区に位置する。平面形は若干北西方向に長い不整円形を呈し、規模は径約3.70m、深さ0.25mである。小形の住居跡で、壁は床面から緩く立ち上がる。

壁溝は検出されなかった。

柱穴は全部で４基検出された。うち２基は深いものであるが、他の２基は柱穴となるか疑問も残る。主柱穴はＰ３、４、１、２が想定される。柱穴の深さは、Ｐ１＝10cm、Ｐ２＝52cm、Ｐ３＝15cm、Ｐ４＝53cmである。

炉跡は地床炉で、住居跡のほぼ中央部に位置していた。中央に撹乱を受けているが、埋設土器の抜き取り痕のようにも見える。平面形は南北方向にやや細長い楕円形で、規模は長径52cm、短径45cmを測る。炉床もあまり焼土化しておらず、短期間の使用が想定される。

埋甕は検出されなかった。



第524図　第66号住居跡・出土遺物（1）

住居跡は出土土器や小形の形状、長期の使用ではないこと等を考慮すると、勝坂式中段階の所産である可能性が高い。

遺物は第524図１～第525図28の土器類、石器類が出土した。

土器は１～24である。１は無文の底部で、体部は直に立ち上がる器形である。

２、３、13は阿玉台式系土器で、２は複列の角押文、３は平行沈線の弧線文、13は連続の刺突文で区画文やモチーフを描いている。いずれも胎土に雲母を多く含み、阿玉台Ⅰｂ式～Ⅱ式にかけての時期に比定されよう。

４、５、７はキャタピラ文と三角押文を施文する土器で、勝坂式の中段階の土器群である。４、５は屈曲する口縁部区画にキャタピラ文を施文し、三角押文の鋸歯状文を沿えている。７は集合三角押文を施文している。新道式段階に比定されよう。

６、８～10、12、14は隆帯脇に爪形文を施文し、波状沈線を沿わせるものである。17、18は半截竹管状工具の平行沈線で区画するパネル文を施文するものである。以上は勝坂式中段階の藤内式段階に比定されるものと思われる。

11、15、16、19～24は勝坂式新段階の土器群である。11は波状口縁の波頂部から眼鏡状把手ま

第525図　第66号住居跡出土遺物（2）

第204表　第66号住居跡柱穴計測表（第524図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	26.0	10.0	P 2	35.0	52.0	P 3	30.0	15.0	P 4	35.0	53.0			

第205表　第66号住居跡出土復元土器観察表（第524図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
524-1	[5.2]	(13.3)	－	11.4	10%

第206表　第66号住居跡出土石器観察表（第525図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
525 － 25	打製石斧	Ⅱ2②イ	砂岩	[10.9]	5.3	3.7	238.9	
26	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[9.7]	[4.5]	[1.8]	92.5	
27	打製石斧	Ⅱ2①イ	頁岩	10.4	6.2	2.3	148.7	
28	敲石	Ⅲ3①イ	砂岩	8.3	2.4	1.2	36.1	

で刻み隆帯を垂下するものと思われ、口唇部に刻みを施す。16は区画隆帯脇に沈線を施文し、集合沈線文を充填施文する。19は「ハ」字状刻みを施した隆帯で文様帯を区画し、胴部に0段多条RL縄文を縦位施文する。20は平行沈線で区画及び充填文を施文する。21、23は刻み隆帯でモチーフを描き、22は隆帯を縦位に施文する。24は口縁部が内湾する浅鉢類であろうか。

石器は25～28である。

25～27が打製石斧である。25、26は短冊形を呈する打製石斧の基部片である。27は撥形を呈し、刃部は片刃である。

28は敲石で、上下両端部に敲打痕が認められる。

第67号住居跡（第526図～第531図）

Ⅰ・Ｊ－17区に位置する。平面形は北西方向に細長い楕円形で、規模は長径（4.10）m、短径3.70m、深さ0.55mである。

壁溝は検出されなかった。壁は床面から皿状に緩く立ち上がる。床面は2軒の重複のため、2段の落ち込み状を呈する。

柱穴は13基検出された。主柱穴は外側の壁に伴うものと、内側の小形の住居跡に伴うものとの2種類が想定される。

外側の住居跡の主柱穴は、Ｐ2、3、4、6の4基と思われ、4本主柱の住居跡が想定される。

内側の住居跡の主柱は、Ｐ1、9、5、7の4基と思われ、同じく4本主柱の住居跡が想定される。

主柱穴の深さは、Ｐ1＝63cm、Ｐ2＝63cm、Ｐ3＝62cm、Ｐ4＝45cm、Ｐ5＝48cm、Ｐ6＝48cm、Ｐ7＝62cm、Ｐ9＝49cmである。

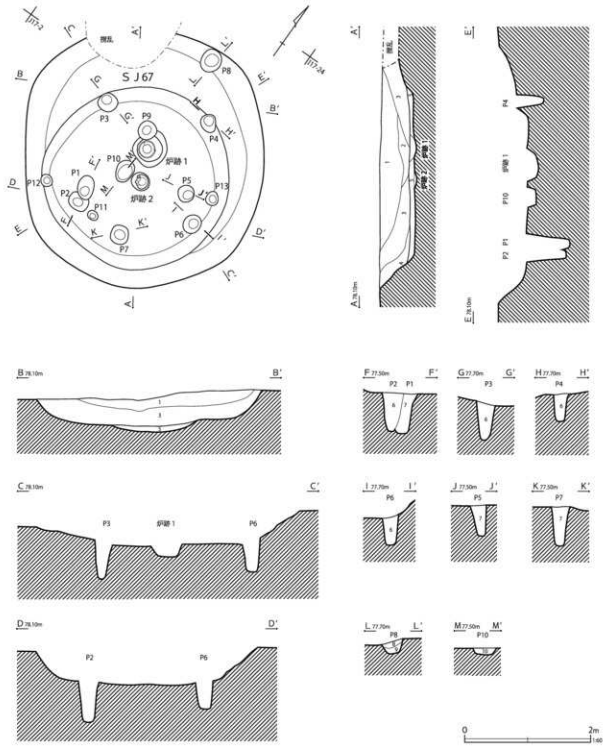
炉跡は外側の住居跡の輪郭のほぼ中央部と、内側の小形のプランのほぼ中央部の2箇所に、それぞれ埋甕炉が検出された。外側の埋甕炉を炉跡1、内側の埋甕炉を炉跡2と呼称した。炉跡2の埋甕炉を貼床で埋めて、炉跡1の埋甕炉が作られていたことから、炉跡1が新しく、炉跡2の方が古いことが明らかになった。炉跡の規模は、炉跡1が、径45cm、深さ27cmである。炉跡2は径28cmで、深さ26cmである。

埋甕は検出されなかった。

本住居跡は、当初小形で炉跡2に伴う4本主柱の深い住居であったが、建て替えにより、小さい住居のプランを埋めて貼床とし、やや大きな外側の炉跡1に伴う4本主柱の住居跡に建て替えられたものと判断される。炉体土器に大きな時期差がないことから、同一居住者による建て替えの可能性が高いと考えられる。

住居跡の時期は、炉体土器から勝坂式中段階である藤内式の所産と思われるが、あるいは新道式新段階の可能性もあると判断される。

遺物は第528図1～第531図70の土器類、石器



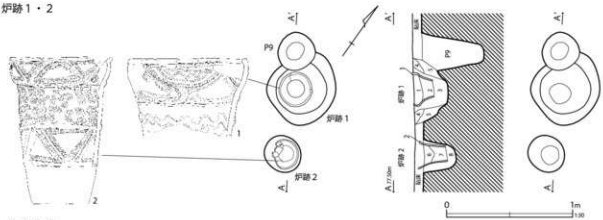
SJ67

1　黒褐色土　　ローム粒子・炭化物粒を少量　土器を多く出土
2　黒褐色土　　1層に近似するが、しまり良い　焼土粒子少量
3　暗褐色土　　ローム粒子をやや多量　しまり良い　土器・石器・石を多く含む
4　暗褐色土　　ローム粒子をやや多量　しまり悪い　粘性強い
5　暗黄褐色土　ロームブロック・ローム粒子多量　しまり非常に良い（貼床）

SJ67ピット

6　暗褐色土　　ローム粒子少量　きめ細やか
7　暗黄褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック少量　しまり良い
8　暗褐色土　　ローム粒子少量　粘性強い
9　暗黄褐色土　ロームブロック少量　粘性強い
10　暗褐色土　　ロームブロック少量　しまり非常に良い

第526図　第67号住居跡（1）



ＳＪ67 炉跡１
1　褐褐色土　ローム粒子・炭化物粒子少量　しまり良い
2　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子多量
3　暗褐色土　キメ細かくローム粒子・焼土小ブロックを含む　しまり良い
4　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子多量　しまり非常に良い
5　暗黄褐色土　4層に近似するが、ローム小ブロック・焼土小ブロックを混入　しまり非常に良い

ＳＪ67 炉跡２
6　暗褐色土　ロームブロック微量　しまり良い
7　暗褐色土　ローム粒子少量　しまり良い
8　暗褐色土　ローム粒子少量　キメ細かくしまり良い

第527図　第67号住居跡（２）

第207表　第67号住居跡柱穴計測表（第526図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P１	37.0	63.0	P２	32.0	63.0	P３	29.0	62.0	P４	28.0	45.0	P５	26.0	48.0
P６	30.0	48.0	P７	31.0	62.0	P８	37.0	28.0	P９	30.0	49.0	P10	35.0	12.0
P11	17.0	9.0	P12	20.0	7.0	P13	22.0	9.0						

第208表　第67号住居跡出土復元土器観察表（第528図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
528-1	[16.4]	(25.0)	－	－	30%
2	[23.2]	(21.6)	－	－	40%
3	[20.0]	－	(22.4)	－	30%
528-4	[14.6]	(12.8)	17.2	－	40%
5	[11.0]	14.4	－	－	30%
6	[8.0]	－	[11.2]	9.2	20%

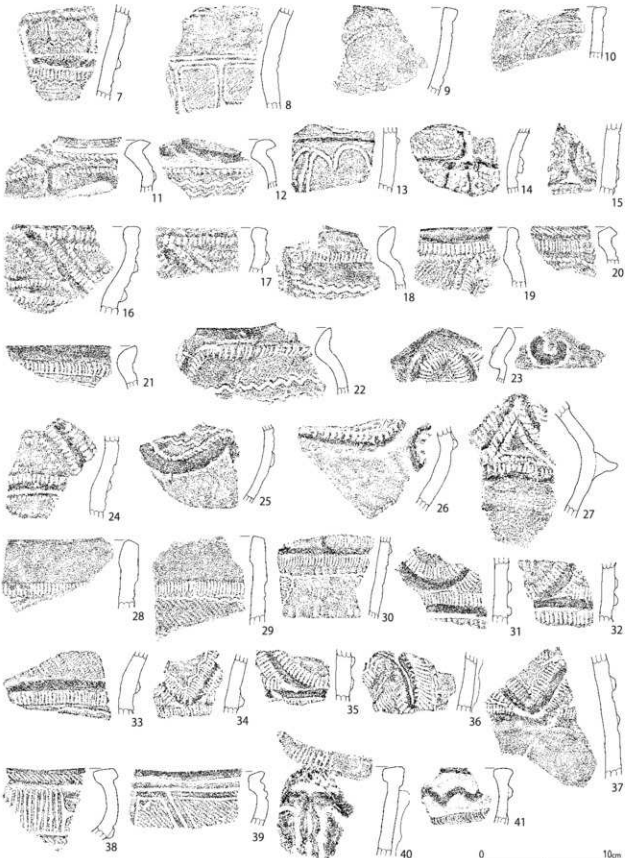
類が出土した。住居跡の覆土が厚く、多くの遺物が出土するものと想像されたが、土器類はほとんどが破片であった。

７は炉跡１、８はＰ７からの出土である。

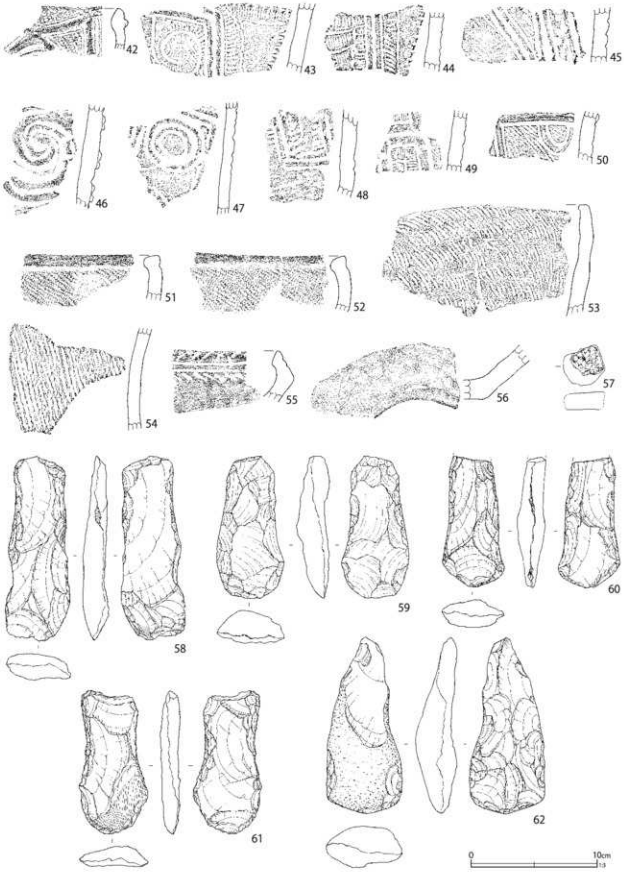
１は新しい炉である炉跡１の炉体土器である。胴下半部を欠き、口縁部も約半分を欠損する。内湾する口縁部が開くキャリパー形の深鉢で、口縁部文様帯に半月状区画と三角形状区画のやや変形した区画を構成する。区画を行う隆帯脇に爪形文状のキャタピラ文とそれに沿う形で押引文を施文し、区画中央部に押引文の鋸歯状文を施文する。胴部には低平隆帯の小波状文を施文している。この隆帯加飾の由来は不明であるが、あるいは阿玉台式土器の胴部の襞状整形痕との関連があるものかもしれない。阿玉台系土器では低隆帯を施文して、爪形文状の刻みを施し、襞状整形痕を模倣する手法があることから、それらとの関連からも一考を要する。

２は古い炉である炉跡２の炉体土器である。口縁部文様帯幅がやや狭く、胴部が寸胴形となっており、底部を欠いている。口縁部には三角形状に近くなった半月状区画と三角形状区画を交互に配しており、区画隆帯脇にはキャタピラ文状の角押文を巡らせ、小繋状の鋸歯状沈線を沿わせている。区画に充填文は施文していない。胴部には無節Ｌを縦走縄文風に細かく縦位施文している。底部文様帯は鋸歯状隆帯による重三角形区画文を施しており、隆帯脇には角押文を施文し、三角押文を沿わせて施文する。区画内には充填文を施文せず、シンプルな構成である。

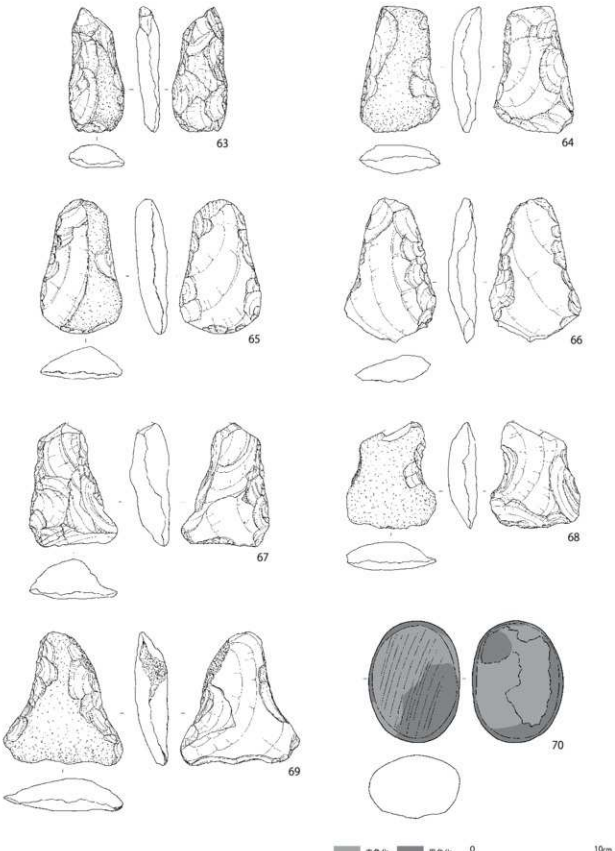
第528図　第67号住居跡出土遺物（1）



第529図　第67号住居跡出土遺物（2）



第530図　第67号住居跡出土遺物（3）



第531図　第67号住居跡出土遺物（4）

第209表　第67号住居跡出土石器観察表（第530・531図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
530 － 58	打製石斧	Ⅱ2①イ	砂岩	14.6	5.1	2.1	159.0	
59	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	11.3	5.3	2.6	157.1	
60	打製石斧	Ⅲ2②イ	砂岩	[10.4]	4.9	2.2	112.1	
61	打製石斧	Ⅳ①イ	頁岩	11.4	5.4	1.6	111.6	
62	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	14.1	6.1	3.3	251.2	
531 － 63	打製石斧	Ⅲ2①イ	砂岩	10.0	[4.4]	1.8	90.1	
64	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	10.1	6.3	2.3	163.4	
65	打製石斧	Ⅲ2①ア	砂岩	10.7	6.5	2.6	180.2	
66	打製石斧	Ⅲ2②ア	砂岩	[11.5]	7.3	2.2	165.2	
67	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	9.9	7.0	3.1	179.6	
68	打製石斧	Ⅲ1②イ	砂岩	[8.5]	7.2	2.3	145.6	
69	打製石斧	Ⅲ2①イ	砂岩	10.7	9.5	2.6	235.4	
70	磨石	Ⅱ1②ア	砂岩	9.7	7.2	5.1	510.9	表裏面一部赤色・黒色化

3は胴部破片からの復元で、胴部文様帯に隆帯の渦巻文を繋げるモチーフを描くものと思われる。隆帯脇には爪形文を施文し、波状沈線で縁取っている。

4は樽形の深鉢で、口縁部に楕円区画文、胴部に半截竹管状工具による平行沈線で渦巻文を繋ぐ波状文を描いている。平行沈線文の間には、なぞるように三角押文を施文している。

5は頸部がやや括れ、胴部が張る器形であり、口縁部をキャタピラ文と波状沈線で区画し、胴部に無節Lを縦位施文している。

6は同様の無節L縄文を縦位施文する底部で、5の底部の可能性もある。

破片では、9、10は同一個体の口縁部破片で、複列の角押文を施文するものである。半截竹管状工具の平行角押文と見られたが、間隔が異なる部分や、結節部分のずれが認められるため、同一工具によるものではないと判断された。14、15も2列の角押文を施文するものである。13は単列の押引状の角押文で弧線文を描いている。阿玉台Ⅱ式の並行期あたりであろうか。

11、12は同一個体と思われ、口縁部区画を三角押文で行い、12は波状沈線2列を施文する。

16、17、24は区画隆帯脇に角押文と三角押文を沿わせて施文する。

18～23は口縁部区画にキャタピラ文や爪形文を施文し、19は三角押文を沿わせた上に、波状沈線も施文している。さらに、区画内の地文に単節LR縄文を横位施文する。18、21、22は同一個体である。22の楕円区画内には、2本の波状沈線を施文している。23は波状口縁の波頂部の円形モチーフに沿って、爪形文を巡らせている。

25～27の口縁部付近の破片も、角押文や三角押文、結節沈線文などを施文している。以上は、新道式の新しい段階辺りであろうか。

28～37は非常に細かなキャタピラ文と波状沈線を施文する土器群で、29、30の胴部には単節RL縄文を横位施文する。藤内式の古段階に比定されよう。

38、39、42～50は半截竹管状工具の平行沈線文で区画やモチーフを施文するもので、43の口縁部区画には蓮華状文が見られる。大半は藤内式の新しい段階に比定されると思われるが、40の連鎖状隆帯や46の背割状隆帯を施文する土器群は、勝坂式の新段階であろう。

51～54は地文のみの土器群で、51、52は単節RLの横位施文、53は無節R縄文の横位施文、54は撚糸文Lを施文する。

55は口縁部が短く内折する浅鉢で、口縁部に平行沈線を巡らし、異方向の短沈線状の刻みを施文

する。

56は浅鉢の底部である。

土製品としては、57の土器片を利用した土製円盤が出土した。

石器は58～70が出土した。

58～69はいずれも撥形を呈する打製石斧である。このうち、66のみが刃部を欠いている。刃部の残存する資料のうち、61、64、69が片刃で、その他は両刃である。61には擦痕が認められる。

70は磨石である。

第68号住居跡（第532図～第546図）

J・K－20・21区に位置する。平面形は隅丸方形で、規模は長径5.2m、短径5.0m、深さ約0.5mである。

壁溝は1本検出され、壁直下を全周する。壁は比較的直に立ち上がっている。

柱穴は16基が検出された。覆土や深さ及び配置から主柱穴と思われるものは2種類が認められる。

最も新しい住居跡と思われるものがP1、2、3、4の4基で、4本主柱の住居跡と思われる。入り口部方向が開いた台形状を呈した配置になるものと思われる。

その他に、古い住居跡と思われるものとして、P9、11、13、12があるが、いずれも覆土は埋め戻されたような様相を呈している。P12は浅い上に、位置関係も整っていないため、主柱穴になるのは難しいと判断される。したがって、古段階の住居跡の主柱穴を組み合わせるのは難しく、新段階の住居跡と柱穴を兼ねたとしても、主柱穴の配置を決めかねる部分がある。恐らく、主軸方向を変えて立て直した可能性が高いものと思われる。

なお、壁溝内に小ピットが3本検出されたが、いずれも規則性が見られず、新旧いずれの住居跡に伴うかは不明である。

主柱穴の深さは、P1＝52cm、P2＝58cm、P3＝65cm、P4＝57cm、P9＝53cm、P11＝50cm、P12＝25cm、P13＝46cmである。

炉は石囲炉で、中央部北寄りに検出された。炉の中央部が掘り窪められ、礫がその縁に沿って並べられていることや、その内面に被熱のための焼土化が著しいことなどから、土器が埋設されていた可能性が高い。また、南側に古い掘り込みが検出されたことから、少なくとも2時期の使用が想定される。炉の平面形は南北に細長い楕円形で、規模は長径82cm、短径61cm、深さ27cmである。

埋甕は検出されなかった。

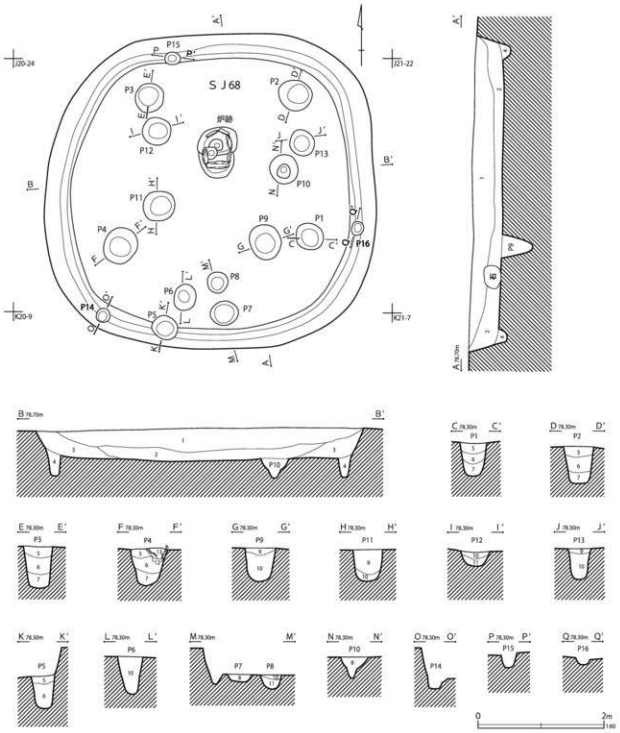
住居跡の時期は、覆土から吹上パターン状に出土した一括土器から、加曽利EⅠ式後半期の所産と判断される。

遺物は第536図1～第546図66の土器類、石器類が出土した。

土器は1～52である。29はP2、30はP5、31はP11からの出土である。

また、6はP4の床面開口部付近からの出土で、P4がほぼ埋まった状態で土器が廃棄されたものと思われる。さらに、23もP11の床面開口部の肩部から出土しており、床直の出土となる。P4は新しい段階の住居跡の柱穴と思われることから、住居跡の主柱が抜かれて柱穴が埋まった後に、土器が入り込んだと考えざるを得ない。住居の廃絶とともに柱が抜かれ、上屋が撤去されていたことを物語っていよう。

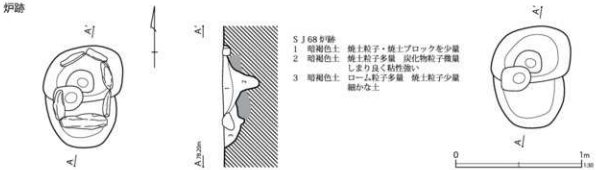
さらに、炉の直上では薄い間層を挟んで、多量の土器が廃棄されて横たわった状態で出土したが、それらの土器の上に伏せたような状態で27の浅鉢が出土した。また、隣接して9の深鉢が同じく逆位に伏せて、立ったままの状態で出土した。本遺跡では、同様な事例が何例かあり、通常の遺棄では土器が立ったままの状態で出土することはほとんどないものと思われることから、吹上パターンでの土器廃棄時に、何らかの意図的行為が行われていた可能性の高いことが指摘されよう。



S J 68
1　暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量
2　暗褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック少量
　　ソフトローム混入
3　鈍黄褐色土　ソフトローム主体　ローム小ブロック多量
4　鈍黄褐色土　ソフトローム多量　粘性強い（壁溝）

S J 68 ピット
5　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ローム小ブロック多量
6　暗褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック微量　ソフトローム混入
7　褐色土　ローム粒子多量　炭化物微量　粘性強い
8　褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ソフトローム多量　炭化物微量
9　褐色土　ローム粒子・ロームブロック多量　炭化物微量
　　埋め戻され、床面として使用されていたと思われる
10　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物微量　しまり非常に良い
11　暗褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック少量　ソフトローム多量
12　暗褐色土　ローム粒子多量
13　暗褐色土　ローム粒子・炭化物・ソフトローム少量

第532図　第68号住居跡（1）



第533図　第68号住居跡（２）

第210表　第68号住居跡柱穴計測表（第532図）

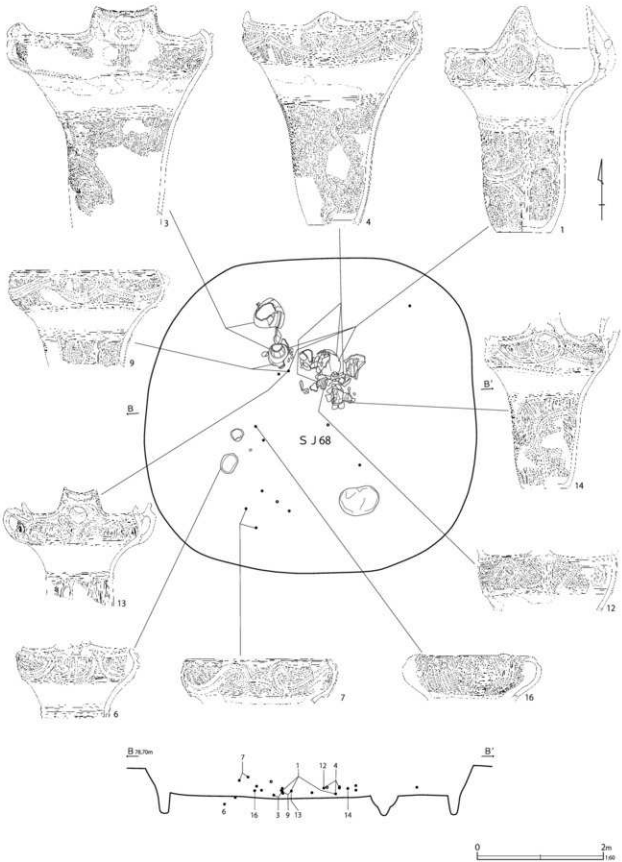
ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P１	45.0	52.0	P２	50.0	58.0	P３	45.0	65.0	P４	58.0	57.0	P５	40.0	50.0
P６	40.0	58.0	P７	43.0	12.0	P８	32.0	23.0	P９	55.0	53.0	P10	45.0	32.0
P11	50.0	50.0	P12	45.0	25.0	P13	40.0	46.0	P14	23.0	12.0	P15	24.0	20.0
P16	22.0	10.0												

１～14は内湾する口縁部が開き、頸部で括れる加曽利Ｅ式のキャリパー形深鉢形土器である。

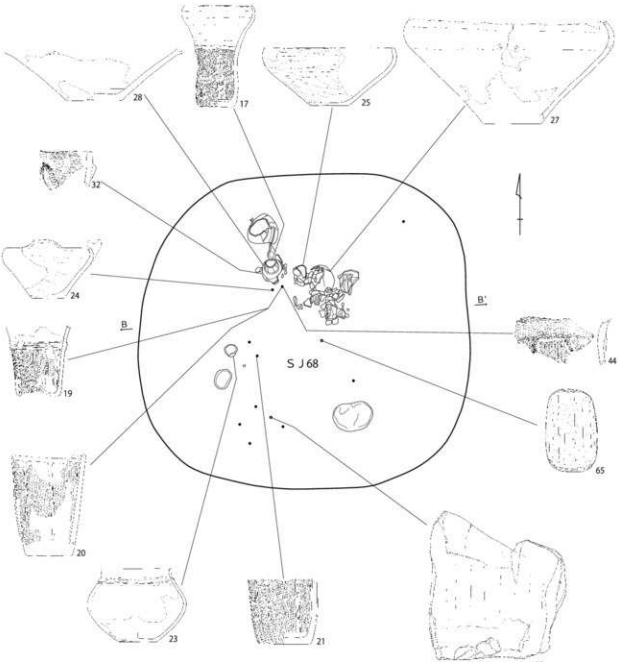
１は口唇部に大小対の把手を有し、口縁部に２本隆帯の渦巻文を横位連携するモチーフを描いている。口唇部の大把手は山形状の橋状把手で、波頂部から捻りを加えた把手を口縁部へと垂下し、隆帯の渦巻文へと繋げるモチーフを構成する。小把手は把手の縁に捻じりを加えた小さな箱状を呈し、下部に円形区画文を配する。口縁部モチーフの全体構成は不明であるが、先端で渦を巻く２本隆帯を襷状に連携するものと思われ、モチーフ間に多くの三角形状区画文を構成している。頸部は無文帯となり、胴部文様帯に２本対の隆帯を６単位に垂下して、胴部を広狭の６単位に分割している。垂下隆帯はさらに幅狭区画を２本対の隆帯で「H」状に横位連結しており、幅広区画には巻き上がる渦巻文と対向する下向きの弧線文を２隆帯で施文する。幅狭「H」状区画と幅広渦巻文区画を交互に配すると、幅狭３、幅広２単位で一周するはずであるが、幅狭区画が４単位あることから1区画の余りが出ている。これも、偶然ではなく、加曽利Ｅ式に見られる意識的に対称性を崩す事例となろう。地文は口縁部と底部に撚糸文Ｌを縦位施文する。

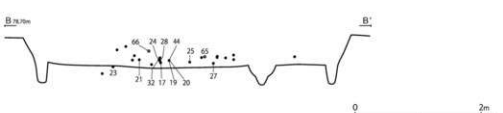
２は口唇部に巻き上がる隆帯の渦巻文を有する環状把手が４単位に付く波状口縁を呈し、頸部に無文帯を構成する。口縁部は下端区画の隆帯が波底部で跳ね上がって口縁部に接し、間に三角形区画を構成する。この三角形区画文は不明な場所があるが、１箇所のみ楕円形区画文となり、変化を見せているようである。胴部は撚糸文Ｌのみ縦位施文する。

３は内湾する口縁部が大きく開き、細い底部へと移行する器形を呈する。口唇部には四角い大きな箱状把手を付け、反対側にも把手が付くものと思われるが欠損する。その中間の口唇部には渦巻文状の小突起を付け、突起下に橋状把手を構成する。箱状把手の両サイドにも橋状把手が付くものと思われるが欠損している。口縁部文様帯は正面右側では欠損しているが小突起下と思われる場所に、左右反対向きの剣先渦巻文を施文しており、左側では箱状突起と突起間に楕円区画文を２単位に配するものと思われ、突起の反対側にも対峙する位置に渦巻文を有する楕円区画文を２単位に配している。頸部は無文帯を構成している。胴部は２本隆帯で区画しており、モチーフ全て２本



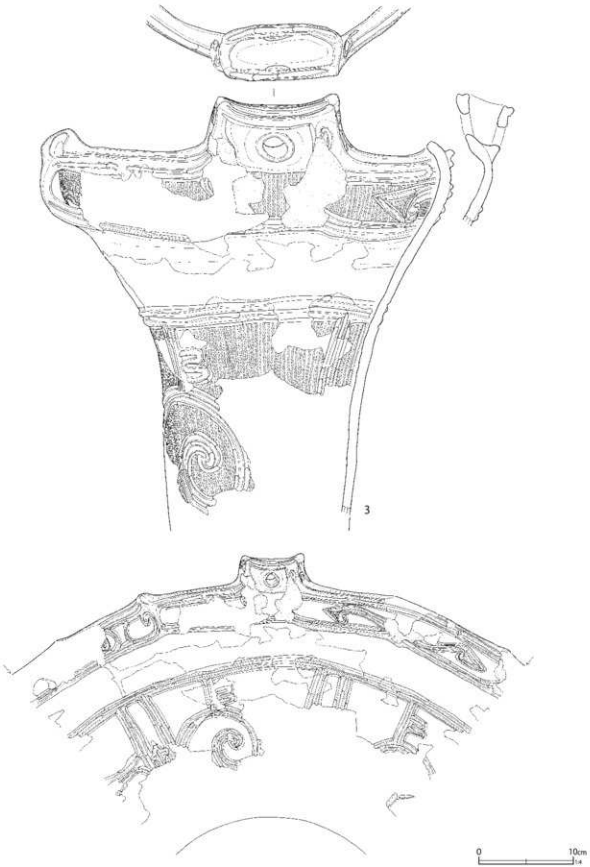
第534図　第68号住居跡遺物出土状況（1）



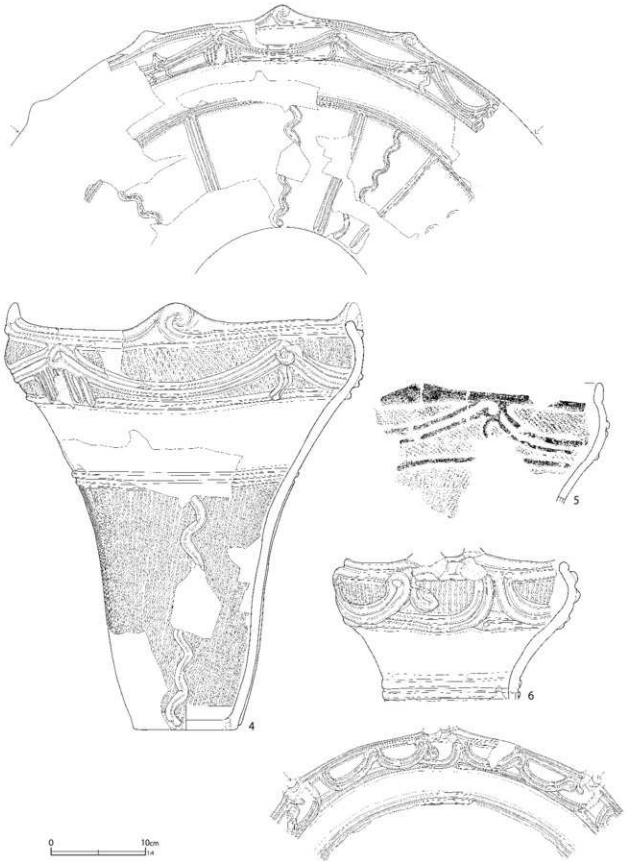


第535図　第68号住居跡遺物出土状況（2）

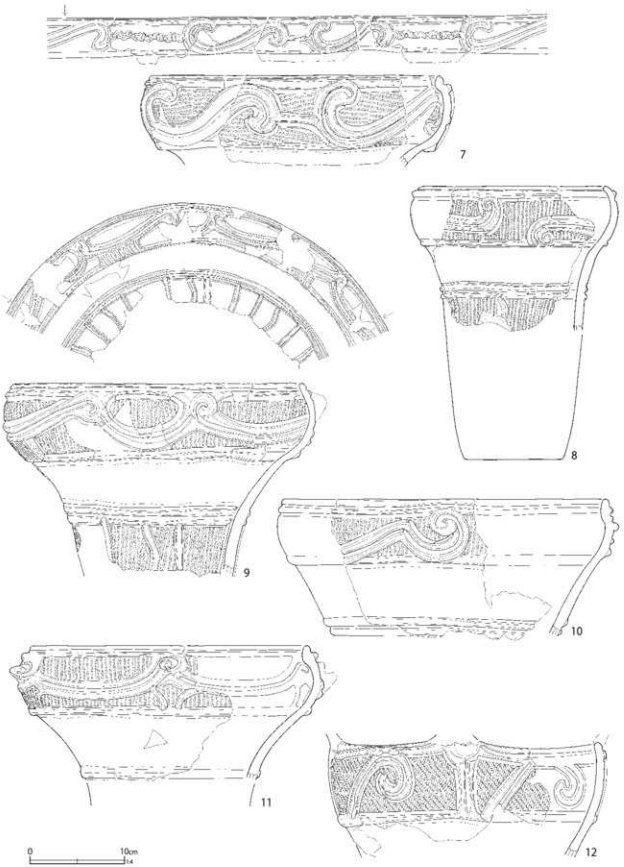
第536図　第68号住居跡出土遺物（1）



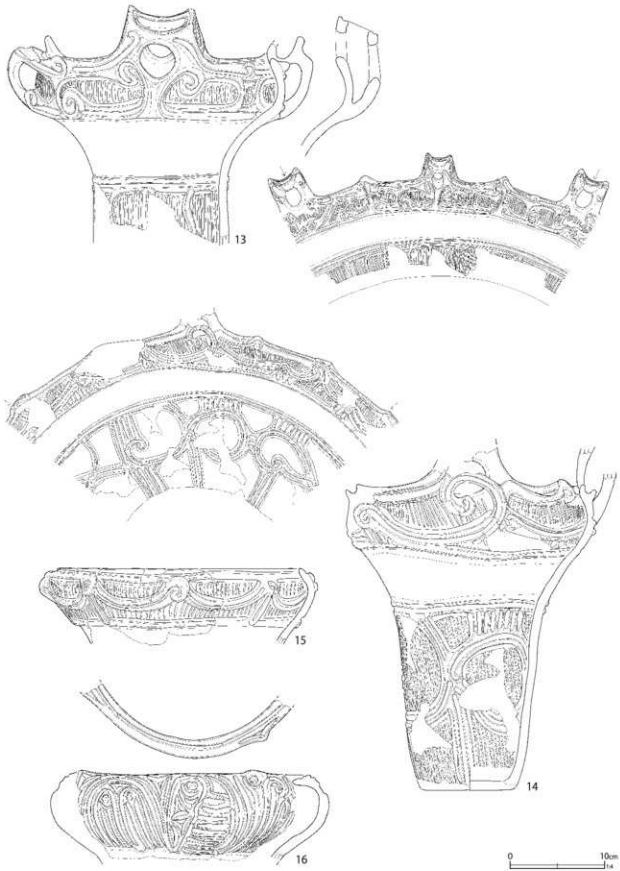
第537図　第68号住居跡出土遺物（2）



第538図　第68号住居跡出土遺物（3）

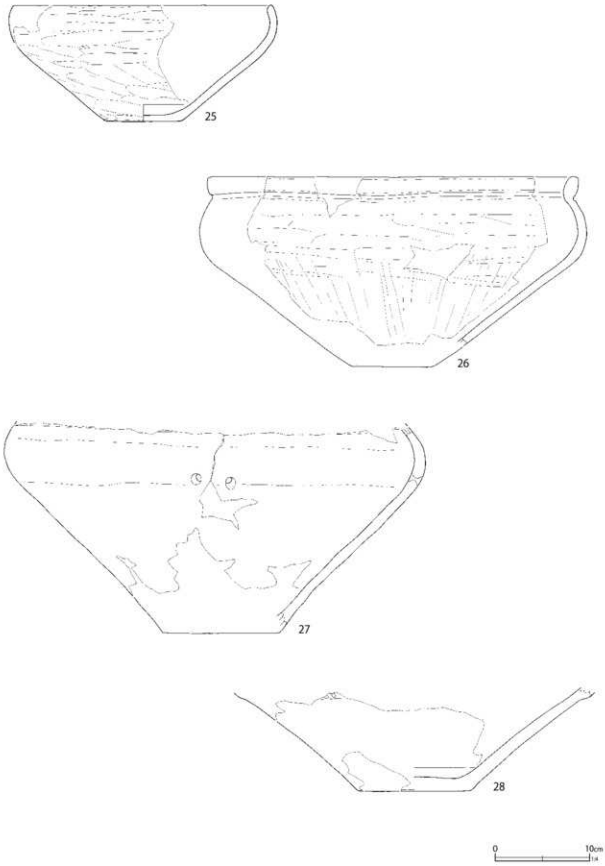


第539図　第68号住居跡出土遺物（4）

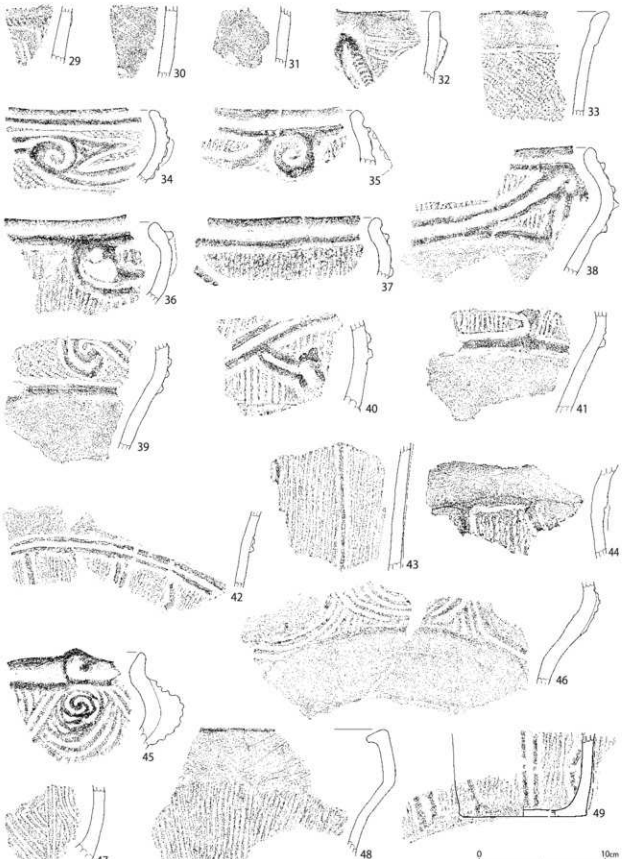


第540図　第68号住居跡出土遺物（5）

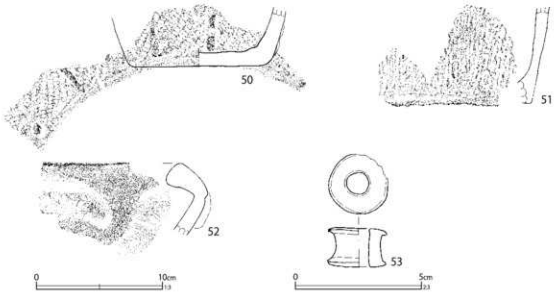
第541図　第68号住居跡出土遺物（6）



第542図　第68号住居跡出土遺物（7）



第543図　第68号住居跡出土遺物（8）



第544図　第68号住居跡出土遺物（9）

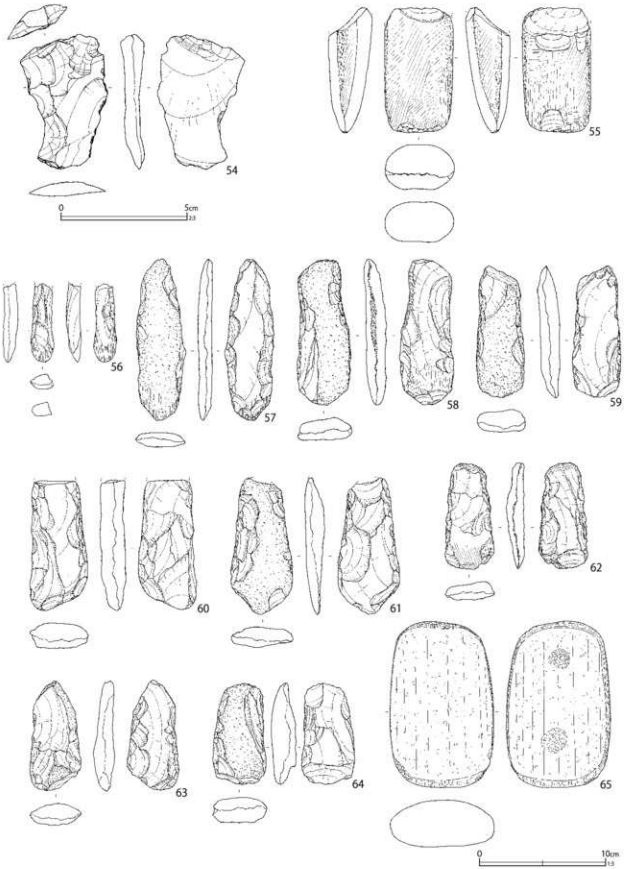
第211表　第68号住居跡出土復元土器観察表（第536 ～ 542図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
536-1	47.9	30.8	-	11.4	50%
2	31.4	23.2	-	8.8	10%
537-3	[44.3]	(38.7)	(41.3)	-	70%
538-4	45.2	36.2	-	(10.8)	70%
5	[12.7]	-	-	-	30%
6	[15.8]	23.2	-	-	50%
539-7	[9.6]	(30.6)	-	-	40%
8	[15.3]	(19.6)	(22.0)	-	40%
9	[20.5]	30.2	32.9	-	50%
10	[14.9]	(34.4)	-	-	30%
11	[14.3]	(29.2)	-	-	30%
12	[12.2]	(28.4)	-	-	20%
540-13	[25.2]	23.6	-	-	70%
14	[25.9]	(24.2)	-	(9.6)	50%
540-15	[8.1]	(25.8)	-	-	30%
16	[9.4]	(25.4)	(29.6)	-	30%
541-17	21.6	(14.2)	(15.4)	7.3	80%
18	[14.9]	-	14.2	9.7	50%
19	[14.6]	-	(13.7)	8.9	60%
20	[19.3]	-	15.6	-	40%
21	[13.8]	-	14.4	10.6	50%
22	[10.1]	-	9.2	6.4	50%
23	[13.9]	(14.4)	-	8.0	40%
24	12.5	(17.8)	-	6.8	50%
542-25	[12.3]	(27.4)	-	8.2	50%
26	[17.8]	(39.4)	-	-	50%
27	[22.2]	44.6	-	-	70%
28	[10.4]	-	(38.4)	11.8	30%

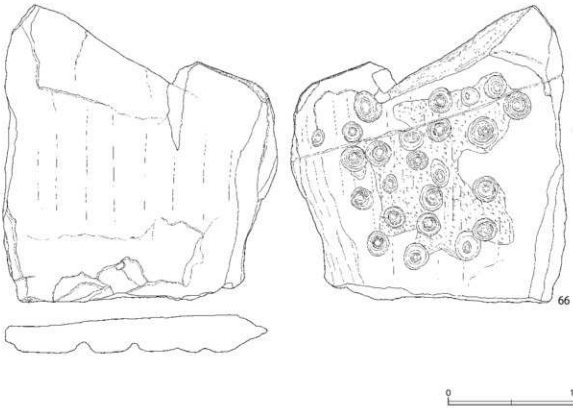
隆帯で描いている。胴部の区画隆帯から２本対の隆帯２組を垂下して、胴部を大きく２単位に分割している。右側の隆帯から隆帯の渦巻文を派生させ、胴部の区画隆帯から垂下する２本対の短隆帯で渦巻文を吊り下げるような構成をとる。垂下する短隆帯には鉤状の蛇行隆帯が付いている。口縁部、胴部に撚糸文Ｌを縦位施文する。

４は３と同様な器形で、口縁部が大きく開き、細い胴部へと移行する。口唇部から巻き上がる小さな渦巻文を把手とする緩い４単位の波状口縁を呈し、口縁部の波底部間を弧状に連結する２本隆帯の渦巻文を施文する。連結部の渦巻文からは口縁部下端区画まで、各種の隆帯文を垂下している。胴部には蛇行隆帯３本、２本対の隆帯２組、１本隆帯１本の６単位の懸垂文が、口縁部区画とは連動せずに垂下する。口縁部４単位、胴部６単位で、しかも３単位、２単位、１単位という組み合わせが、対称性を崩しているのであろうか。地文は口縁部、胴部ともに撚糸文Ｌを縦位施文する。

５は４と類似した文様構成で、口縁部の地文に単節ＲＬ縄文の横位施文、胴部に単節ＲＬ縄文の縦位施文を行う。口縁部の破片のみが現存する。



第545図　第68号住居跡出土遺物（10）



第546図　第68号住居跡出土遺物（11）

第212表　第68号住居跡出土石器観察表（第545・546図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備　考
545 － 54	剥片	Ⅰ①	チャート	5.3	3.5	0.9	12.8	
55	磨製石斧	Ⅰ②イ	砂岩	[9.9]	[5.5]	[3.5]	298.9	
56	磨製石斧	Ⅲ2イ	砂岩	[6.2]	1.8	1.2	18.8	
57	打製石斧	Ⅰ①イ	緑色岩	12.8	3.9	1.2	81.7	
58	打製石斧	Ⅲ2①イ	砂岩	11.5	4.3	1.8	103.0	
59	打製石斧	Ⅱ2①イ	ホルンフェルス	10.4	3.8	1.8	96.7	
60	打製石斧	Ⅱ2②イ	ホルンフェルス	[10.3]	4.6	2.0	133.5	
61	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[10.8]	4.9	1.6	85.4	
62	打製石斧	Ⅱ2①イ	ホルンフェルス	8.4	3.9	1.5	54.7	
63	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	8.7	4.0	1.7	61.7	
64	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	8.0	4.2	2.0	82.6	
65	磨石	Ⅱ1-3①イ	閃緑岩	13.2	8.2	3.7	688.9	
546 － 66	石皿	Ⅲ2②ア	緑泥片岩	[23.5]	21.9	3.6	2603.9	

6は口縁部の内湾と頸部への括れがやや強い器形で、頸部無文帯を幅広く設定している。口唇部には2箇所に橋状把手を付け、把手下に橋状把手へと巻き上がる隆帯渦巻文を2箇所に配している。口縁部文様帯はこの渦巻文を中心として、「W」字状に先端が渦を巻く2本隆帯の弧状文を連結するモチーフを描く。口縁部の地文は撚糸文Lである。胴部以下を欠損する。

7は口縁部文様帯に横「S」字状渦巻文を3単位に配し、交互刺突を施した蛇行隆帯で連結する構成をとるものと思われる。横位連結文2本は蛇行隆帯で長く、1本は短い直線状隆帯である。口縁部の地文は撚糸文Lの横位施文である。口縁部の半分程が現存する。

８は口縁部文様帯の上下区画を１本隆帯で行い、胴部区画を２本隆帯で行っている。口縁部文様帯には先端が渦を巻く２本隆帯でクランク状のモチーフを描き、頸部は無文帯となる。胴部文様帯には１本の蛇行隆帯と２本対の隆帯を垂下している。地文は、口縁部も胴部も撚糸文Ｌを施文する。胴部下半を欠損する。

９は石囲炉のほぼ直上で、逆位の立った状態で出土した土器である。口縁部文様帯は楕円文や円形文、長楕円文などの渦巻文が単位文化したと思われる区画文３単位を、２本隆帯の横「Ｓ」字状渦巻文３単位で連携するモチーフを描いている。渦巻文は２本隆帯の先端部が小さく上向きに渦を巻くもので、口唇部直下に配している。細長い横「Ｓ」字状文は、縦位の短隆帯数本で口縁部の下端区画と連結している。頸部は無文帯である。胴部には直線と蛇行する隆帯を、交互に12本垂下している。地文は、口縁部、胴部とも撚糸文Ｌを縦位施文する。

10は口縁部の大形破片で、口縁部文様帯に２本隆帯で渦巻文を描くものである。渦巻文は上向きの「？」状を呈する。頸部は無文帯となり、２本隆帯で胴部を区画する。口縁部の地文は撚糸文Ｌである。

11は小さな上向きの渦巻文を２本の隆帯で連結する繋弧文状のモチーフを施文する。渦巻文下には対弧状の隆帯を施文して、枠状の区画文を構成する。頸部を無文帯として、胴部を1本隆帯で区画するようである。口縁部の地文は撚糸文Ｌである。

12は４単位の突起を有する波状口縁で、把手下に２本隆帯を垂下して枠状区画文を構成する。枠状区画文内には巻き上がる２本隆帯の渦巻文を施文し、上端区画との接合部に瘤状貼付文２個を施文する。口縁部には、単節ＲＬ縄文を横位施文する。頸部は無文帯にしている。

13～15は口縁部文様帯、頸部無文帯、胴部文様帯で構成されるキャリパー形深鉢であるが、口縁部の地文に沈線文を施文する一群である。

13は口唇部に２単位の大きな箱状把手を付け、間に突起を付けて、それぞれの下部に橋状把手を付けている。橋状把手で４単位に区画した口縁部文様帯は、それぞれをさらに２分割し、渦巻文と区画文を一体化させたモチーフを施文している、モチーフ内には集合の沈線文を充填施文している。頸部は無文帯としているが、２本隆帯で胴部を区画し、２本隆帯の懸垂文３単位と、１本蛇行隆帯３単位の６単位を交互に垂下施文している。胴部の地文にも沈線を施文している。

14は口唇部に大きな山形の橋状把手が１個、小突起が４箇所に付き、５単位構成になるものと思われる。大把手には大きな渦巻文が巻き上がって橋状把手を構成し、他の突起下には２本隆帯の先端が渦を巻く小さな渦巻文を施文し、弧状に連結するモチーフを構成する。頸部は無文帯とし、胴部には大きな渦巻文３単位と区画文の４単位を横位に連結するモチーフを描き、縦位の区画線は３単位に垂下する。口縁部や胴部とも、モチーフ構成や単位構成に乱れが見られる土器で、胴部地文に撚糸文Ｌを施文する。

15は破片からの復元であるが、口縁部に繋弧文状の渦巻文を施文するもので、おそらく１個おきに渦巻文から隆帯を垂下して枠状区画を施すものと思われる。口縁部の区画内には沈線文を施文している。頸部は無文帯である。

16は中部高地系の褶曲文系土器である。口縁部が大きく内湾し、頸部で括れる器形と思われる。口唇部上には４単位の三叉状印刻を施しているものと思われ、褶曲モチーフの中にそれぞれ異なる文様を施文している。

17は口縁部と頸部を無文とする深鉢で、先端が渦を巻く２本隆帯を４本垂下して、胴部を４分割するが、胴部区画線から垂下する長い隆帯と、途中から垂下する短い隆帯を交互に配し、さらに横

位に連結して、「H」状の区画文を構成する。胴部の地文は、単節ＲＬの縦位施文である。

18～22は深鉢の底部である。いずれも隆帯と蛇行隆帯を垂下するもので、地文に撚糸文Ｌを施文する。18は縦位隆帯を３本、蛇行隆帯を４本交互に垂下するが、蛇行隆帯２本を施文する部分があり、単位がずれている。21は隆帯と蛇行隆帯をそれぞれ６本交互に垂下施文する。おそらく、口縁部文様帯とは対応していないであろう。

23は有孔鍔付土器で、短い口縁部が立ち、胴部が膨れる壺形と思われる。

24は片口状の把手が付いた無文の鉢で、把手上面には浅い窪みを有する。

25～28は無文の浅鉢で、25は口縁部が内湾する、26は口縁部が外反する器形である。27も口縁部が外反するものと思われ、28は底部である。

34～42はキャリパー形深鉢の口縁部破片である。34は２本隆帯の渦巻文の先端に剣先文を有する。口縁部の地文は単節ＲＬ縄文の横位施文である。

35は１本隆帯の渦巻文が上端部区画隆帯に接し、36、38は２本隆帯の渦巻文が接する。

39～41は口縁部から頸部の破片で、39は２本隆帯で渦を巻き、地文に単節ＲＬ縄文を横位施文する。40も２本隆帯で渦巻文を繋ぐモチーフを施文し、地文に撚糸文Ｌを施文する。41は１本隆帯で区画文を施し、地文に撚糸文Ｌを施文する。

42～44は胴部破片である。いずれも撚糸文Ｌ地文上に、隆帯と蛇行隆帯を交互に垂下施文する。

45～47は沈線でモチーフを描く曽利式系の土器で、45、46は重弧文系のモチーフを施文する。47は胴部地文に曲線の沈線文を施文する。

48は無文の口縁部が開き、口唇部が内折して突出する。胴部に撚糸文Ｌのみ施文する。

49～51は底部破片である。49は撚糸文Ｌ地文上に、２本対の隆帯と１本の蛇行隆帯を交互に垂下している。50は縄文地文上に隆帯懸垂文を施文するもので、地文は単節ＲＬ縄文の縦位施文である。51は撚糸文Ｌを施文するのみの破片である。

52は低平隆帯で胴部にモチーフを描く浅鉢である。

土製品では、53の土製耳飾りが出土した。53は鼓形の耳飾りで、一部縁が欠損するが、ほぼ完形品である。

石器は54～66が出土した。

54は二次加工剥片である。

56は乳棒状磨製石斧の刃部片で、刃こぼれが認められる。55も磨製石斧の刃部であるが、研磨が粗い。

57～64は打製石斧である。57～60が短冊形を、61～64は撥形を呈する。刃部は61を除いて全て両刃である。また、57、58には擦痕が認められる。

65は磨石で、周縁に敲打痕を有する。

66は石皿の破片で、裏面には凹痕が密集している。

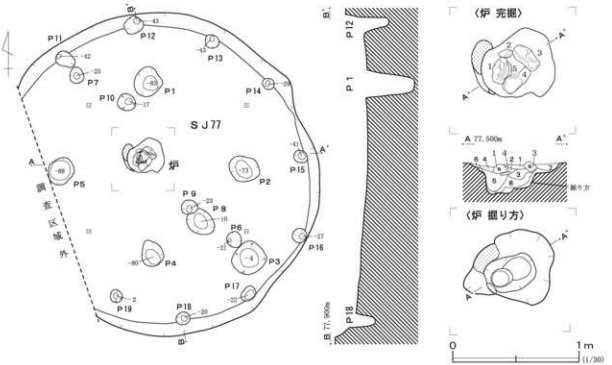
d）Ⅳ区

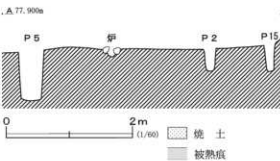
第77～80号住居跡（４次調査分）は、調査に至る経緯で報告したとおり調査期間が限られており、詳細な調査は実施できていない。住居跡の覆土及びピット等の土層観察も行えなかったため、炉以外の覆土等については、担当者の調査時メモから転載した。

第77号住居跡（第547図～第557図）

Ｍ－12・13区に位置する。西側1/5は、未調査である。調査範囲での規模は、長径5.2m、短径5.0mで、平面形は北西－南東に主軸をもつ楕円形である。壁高は最も深い部分で35cmである。主軸はＮ－36°－Ｗを指す。

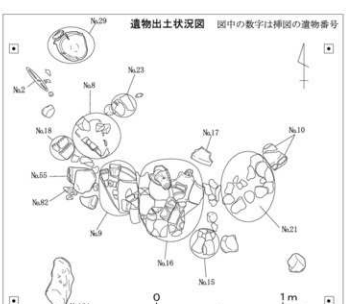
床面は、中央部が外周部より約５cm低い凹地形状を示す。周溝は無く、壁直下に小さい壁柱穴（Ｐ11～19）が９基、ほぼ等間隔の約120cmおきに巡っている。主柱穴はＰ１、２、４、５の４基と考えられる。いずれも床面から70cm以上の掘り込みを有する。Ｐ３は浅い掘り込みであり入り



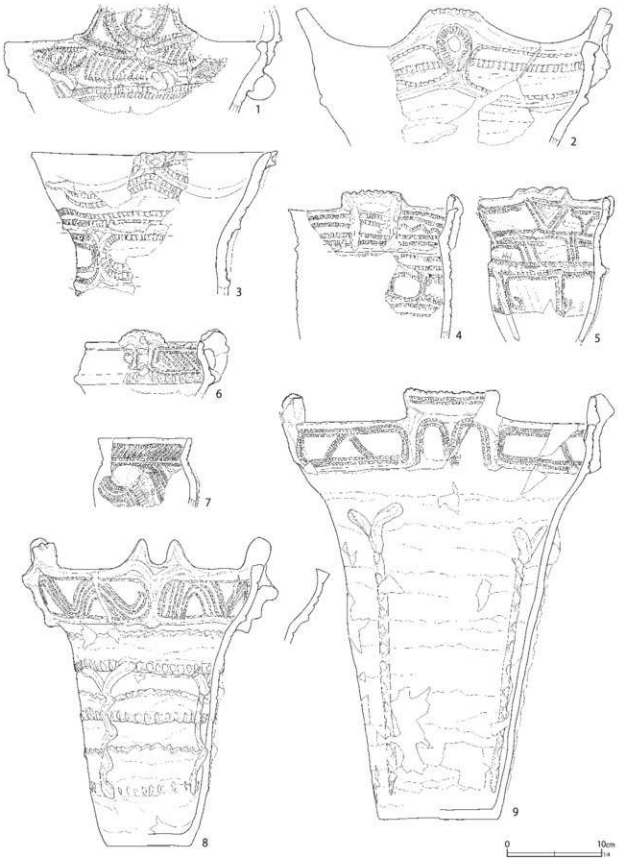


A'〈炉土層〉

1	暗褐色土	やや明調 R粒やや多い F ブロックやや多い ややブロック状
2	明黒褐色土	黒味強い 均質土 R粒少量
3	暗褐色土	茶褐色土多い R粒・Rブロックやや多い ブロック状で R 土硬化
4	暗褐色土	こげ黒味あり Rブロック少量 Fブロック少量 ブロック状
5	暗褐色土	暗褐色味強い R粒やや多い 黒味あり C・F粒少量含む
6	暗褐色土	褐色味強い やや明調 Rブロック多い
7	暗褐色土	褐色土と暗褐色土の混土 やや明調 R粒・Rブロック多い
8	褐色土	黄褐色味強い・Rブロック(中)多い 黒褐色土粒入る しまりやや軟

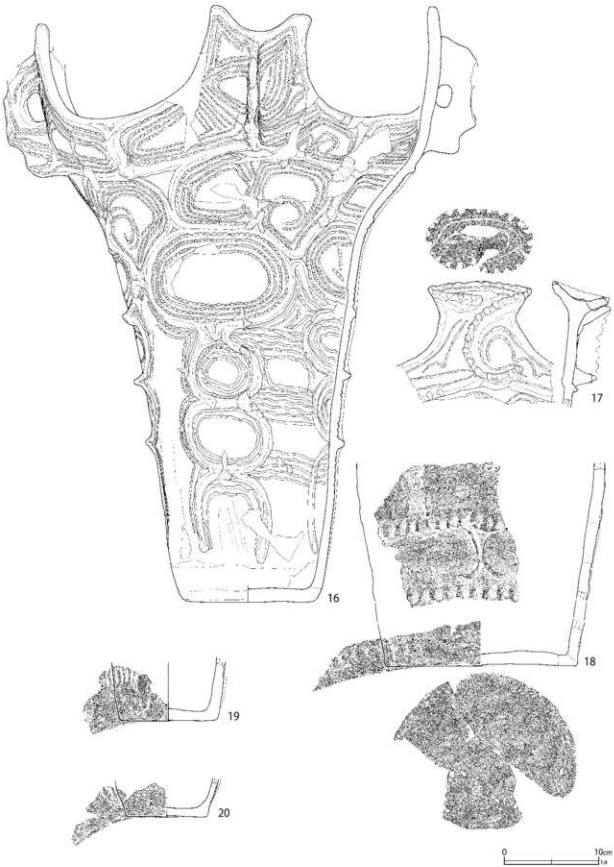


第547図 第77号住居跡



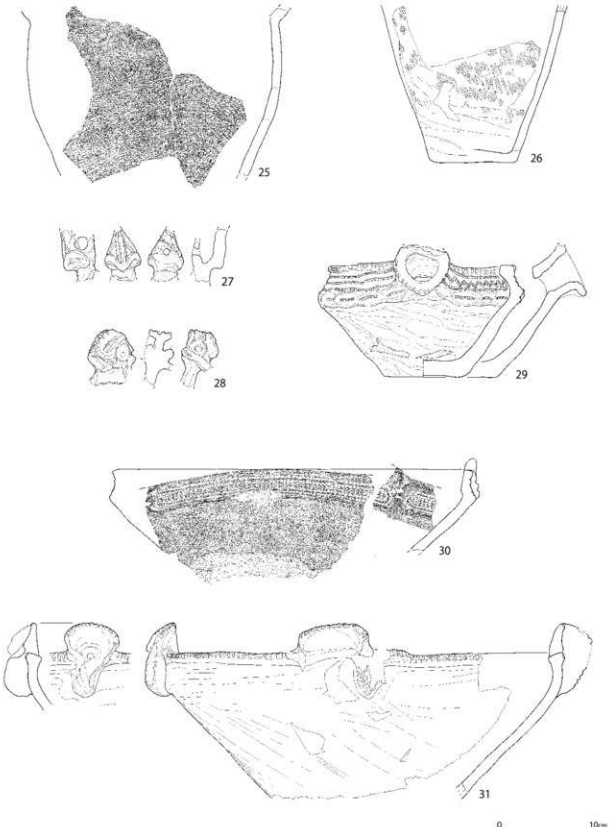
第548図　第77号住居跡出土遺物（1）

第549図　第77号住居跡出土遺物（2）

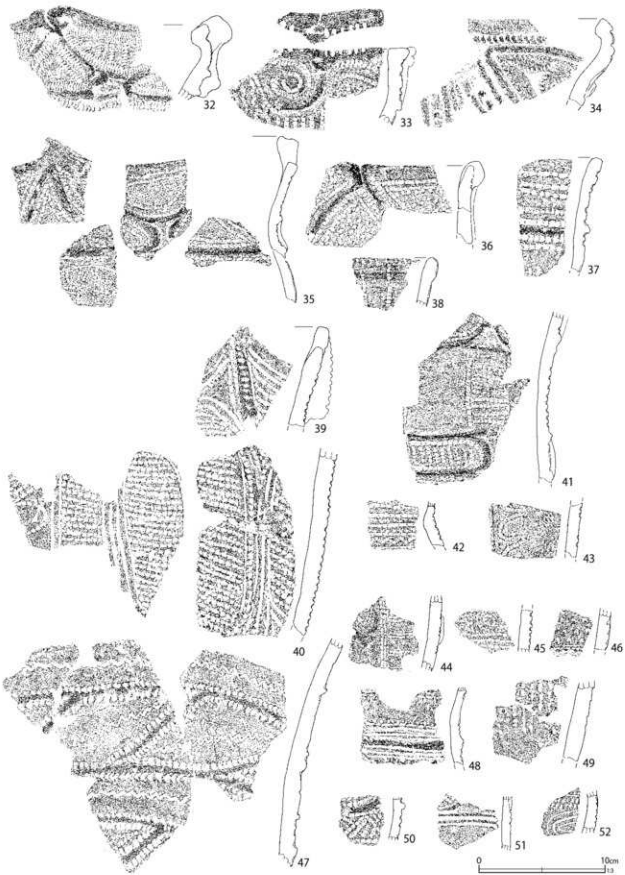


第550図　第77号住居跡出土遺物（3）

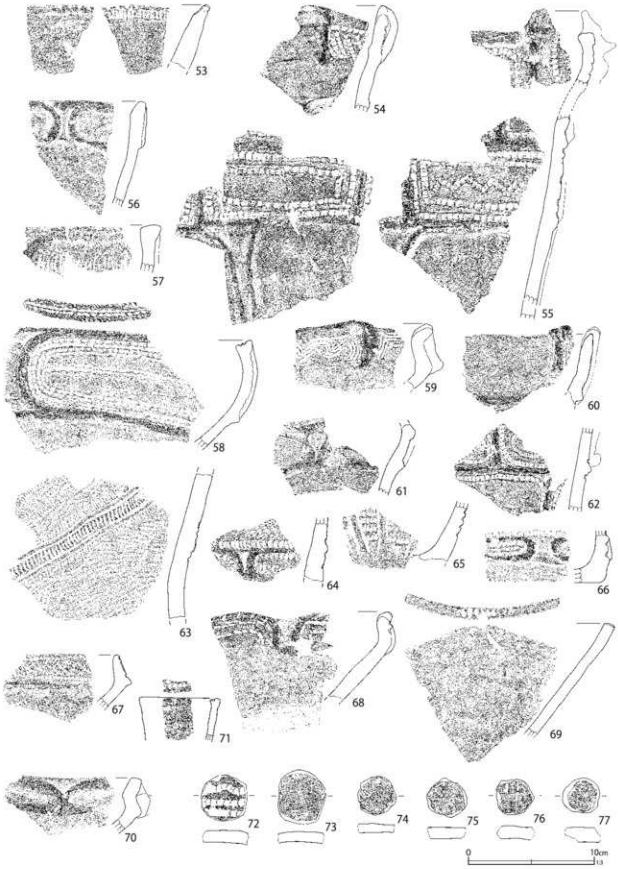
第551図　第77号住居跡出土遺物（4）



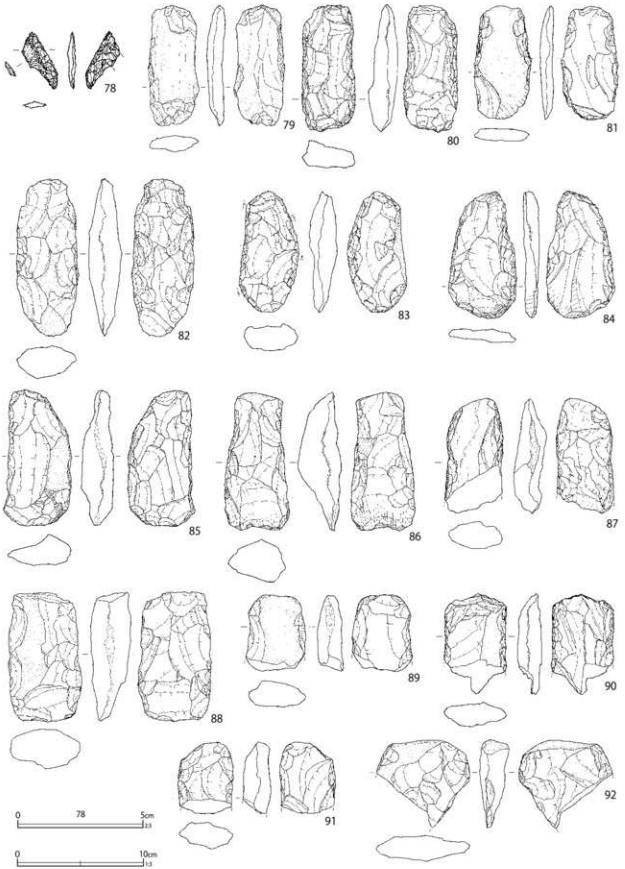
第552図　第77号住居跡出土遺物（5）



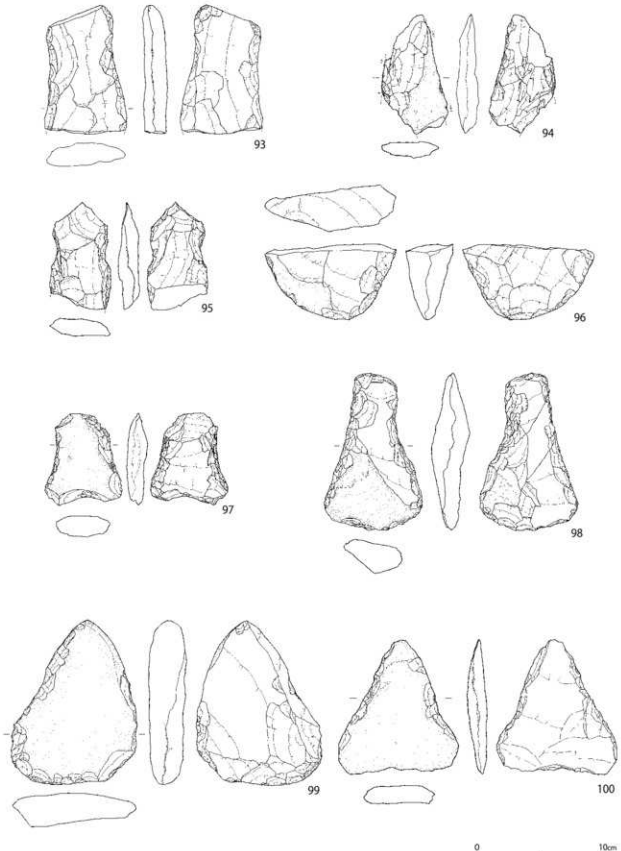
第553図　第77号住居跡出土遺物（6）



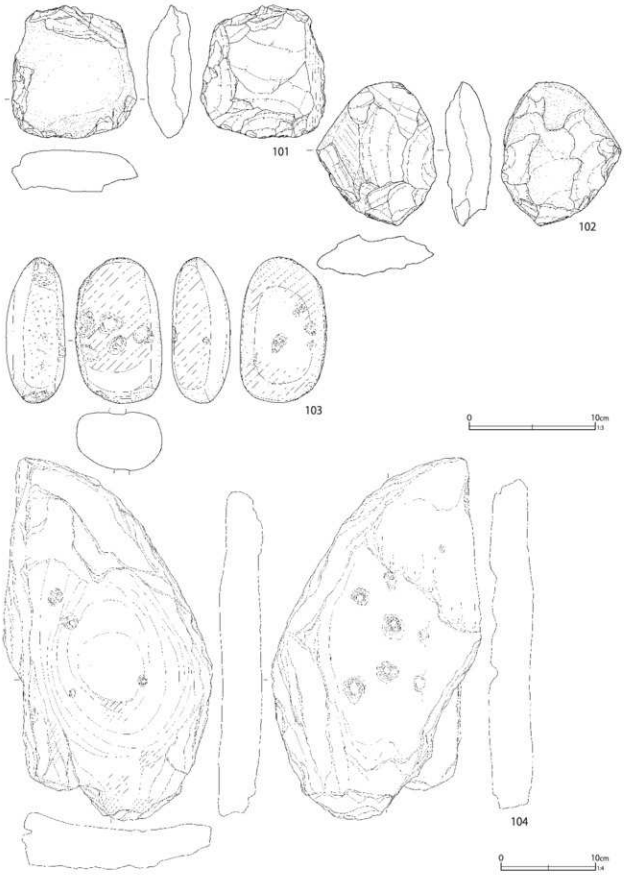
第554図　第77号住居跡出土遺物（7）



第555図　第77号住居跡出土遺物（8）



第556図　第77号住居跡出土遺物（9）



第557図　第77号住居跡出土遺物（10）

第213表　第77号住居跡柱穴計測表（第547図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	46.3	83.0	P 2	44.8	73.0	P 3	51.6	4.0	P 4	42.4	80.0	P 5	45.7	88.0
P 6	23.3	31.0	P 7	26.5	25.0	P 8	(47.7)	10.0	P 9	26.5	23.0	P 10	29.3	17.0
P 11	32.1	42.0	P 12	28.8	43.0	P 13	21.2	43.0	P 14	17.4	29.0	P 15	22.7	41.0
P 16	22.0	27.0	P 17	25.5	22.0	P 18	22.1	20.0	P 19	21.2	2.0			

第214表　第77号住居跡出土復元土器観察表（第548～552図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	分類
548-1	[9.8]	(28.0)	-	-	
2	[15.0]	(31.0)	-	-	
3	[15.2]	(25.0)	-	-	
4	[15.2]	(8.0)	-	-	
5	[16.5]	14.0	-	-	
6	[5.8]	(12.0)	-	-	
7	[7.5]	(10.0)	-	-	
8	32.8	24.0	-	8.3	
9	45.5	31.8	-	12.6	
549-10	37.0	26.5	-	9.4	
11	[6.8]	-	-	-	
12	[15.4]	(29.3)	-	-	
13	[22.2]	(39.0)	-	-	
14	[22.5]	(20.5)	-	-	
15	[27.5]	(20.7)	-	10.0	
550-16	63.0	41.5	-	14.0	
550-17	[12.8]	-	-	-	
18	[18.8]	(26.2)	-	(20.0)	
19	[6.1]	(12.0)	-	-	
20	[3.7]	(10.9)	-	-	
551-21	65.0	(54.0)	-	(18.5)	
22	[23.3]	18.0	-	-	
23	17.2	(12.5)	-	6.5	
24	[19.0]	(20.0)	-	-	
552-25	[18.7]	(27.0)	-	-	
26	[16.5]	(19.7)	-	(9.0)	
27	[5.5]	-	-	-	
28	[5.7]	-	-	-	
29	[14.1]	19.2	-	8.6	
30	[10.5]	(38.0)	-	-	
31	[18.5]	(42.0)	-	-	

第215表　第77号住居跡出土石器観察表（第555～557図）

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
555 - 78	石鏃	Ⅰ2②	黒曜石	3.0	1.2	4.0	0.6	
79	打製石斧	Ⅱ2①イ	結晶片岩	9.5	4.0	1.5	66.0	
80	打製石斧	Ⅱ2①イ	頁岩	10.0	4.3	2.3	111.0	
81	打製石斧	Ⅰ①イ	シルト岩	8.9	4.6	1.1	59.0	
82	打製石斧	Ⅰ①イ	ホルンフェルス	12.4	4.9	2.7	169.0	
83	打製石斧	Ⅰ①イ	ホルンフェルス	9.5	4.7	2.2	101.0	
84	打製石斧	Ⅰ①イ	頁岩	10.0	5.4	1.3	81.0	
85	打製石斧	Ⅰ①イ	砂岩	10.7	5.4	2.5	140.0	
86	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	10.8	5.2	3.5	176.0	
87	打製石斧	Ⅴ②イ	ホルンフェルス	9.1	4.6	2.5	110.0	
88	打製石斧	Ⅱ2①イ	砂岩	10.3	5.3	3.2	235.0	
89	打製石斧	Ⅴ②イ	砂岩	6.0	4.7	2.0	82.0	
90	打製石斧	Ⅴ②イ	頁岩	7.9	4.9	1.9	83.0	
91	打製石斧	Ⅴ②イ	ホルンフェルス	5.6	4.4	2.2	65.0	
92	打製石斧	Ⅴ②イ	泥岩	6.9	7.4	2.3	101.0	
556 - 93	打製石斧	Ⅲ2②イ	砂岩	10.2	6.5	1.9	156.0	
94	打製石斧	Ⅴ②イ	砂岩	9.4	5.3	1.7	80.0	
95	打製石斧	Ⅴ1②イ	頁岩	8.4	4.8	1.7	70.0	
96	礫器	①イ	ホルンフェルス	6.0	10.3	3.7	206.0	
97	打製石斧	Ⅲ1①イ	頁岩	7.2	6.1	1.6	84.0	
98	打製石斧	Ⅲ1①イ	シルト岩	12.4	7.8	3.1	190.0	
99	打製石斧	Ⅲ2①イ	砂岩	13.0	9.9	3.0	454.0	
100	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	10.6	9.5	1.5	143.0	
557 - 101	礫器	①イ	ホルンフェルス	10.5	9.9	3.5	493.0	
102	礫器	①イ	泥岩	11.3	9.5	3.6	377.0	
103	磨石	Ⅱ1-2-3①イ	閃緑岩	11.5	6.9	4.7	540.0	
104	石皿	Ⅱ2②イ	片岩	39.0	22.0	4.6	5470.0	

口部に関係するピットと考えた。

炉は石囲炉で、中央部やや北西寄りに検出された。25cm程の長楕円礫５個で10cm×15cm程の不整形に囲っており、礫の内側は熱を受け赤化が顕著であるが、炉の内部には焼土層と言える様な赤褐色土の土層は確認されず、炉北西側のプラン外に焼土の広がりが認められた。覆土の広がりや堀り方の形状などから、炉が作り替えられことによる従前の炉に伴う焼土と判断した。

住居跡の覆土は暗褐色土主体で、中層までは大きな土層の変化はなく、下層になると粒子が粗く変化した。また、床直上や壁直近では粗めのローム粒子を多く含む層が認められた。

本住居跡は、出土遺物から勝坂式期古段階の所産と思われる。

遺物は大半を覆土一括として取り上げている。覆土中層を掘り終えた辺りから、出土量が急激に増加し、吹上パターンの出土状況を呈していた。覆土中層下から特に住居跡中央部で床面の一枚上の層にかけて、吹上パターン状況で、集中的に土器が出土した。複数の土器がその場で潰れた様相で出土し、折り重なるように検出された個体も認められた。出土状況から一括性の高い土器群であると考えられる。

遺物は第548図１～第557図104の土器類、石器類が出土した。

土器類は第548図１～第554図70である。復元ができた土器は全部で27個体。この内、深鉢形土器が24個体、浅鉢形土器が２個体、注口土器が１個体である。復元個体の帰属時期は、阿玉台Ⅰb式15個体、阿玉台Ⅱ式５個体（10～15）、勝坂Ⅱ式（新道併行）７個体（１、７、22～26）と考えられ、阿玉台Ⅰb式からⅡ式の移行期に該当する時期であると考えられる。

１は口縁部片。胎土に黒雲母を含む。平縁の口縁に山形状の大きい把手が付く。把手部には下から巻き上がる刻み隆帯の渦巻文を配し、口縁部文様帯には把手から垂下する捻りの入った隆帯で三角区画文を基調とした区画文を構成する。区画内は斜行する集合三角押文を充填施文する。口縁部区画隆帯脇にはキャタピラ文と三角押文を沿わせている。

２は口縁部片。胎土に黒雲母多く含む。口縁は４単位の緩い山形波状を成し、波頂下部には刻みを持つ環状隆帯を施文し、波頂部には大きな刻みを施す。口縁部には断面三角隆帯で楕円区画を施し、区画内の隆帯脇には押し引きの角押文が沿い、中央にはヘラ状工具のキャタピラ文状の角押文が横走する。頸部は無文で、15とは胎土や調整が似ていることから同一個体の可能性もある。

３は平縁の深鉢で、口縁部に断面三角形状隆帯で半円状区画文が構成され、区画内に沿って１列の角押文が施文される。区画隆帯の下部では２列の角押文が隆帯に沿って巡り、波状を呈する。波状隆帯と口縁の接点には円形の隆帯が貼付される。頸部と胴部は隆帯によって区画され、隆帯の上端に沿って２列の押し引き文が巡る。胴部は断面三角形隆帯で楕円区画を構成し、区画隆帯に沿って単列もしくは２列のキャタピラ文が沿っている。

４は胎土に金雲母を多量に含む。平縁で扇状の把手１対が残るが４単位の可能性が高い。突起は端部に深い刻みが入り小波状になる。把手の両端から口縁部へ断面三角形の隆帯が垂下し逆U字状になる。口縁部は下端に同様の隆帯が巡り、区画される。口縁部は押し引き文が２列一対で横位に施され、一部鋸歯状を呈する押し引きが充填される。施文具は角押状のものと先端櫛歯状のギザギザしたものの２種類を使用している。胴部は上下２列の押し引き文が横走して文様帯を区分し、その中に横長の「O」字状押し引き文を描く。押し引き文だけのものと押し引き文の肩に太い刺突を加えたものが交互に描かれる。

５は頸部が外に開き口縁部は直立する深鉢。口

縁には突起が４単位貼付される。突起は２種類あり、同種のものが対向する位置に配される。図正面のねじった粘土紐を水平に貼り付け、山が４つ付く突起と側面は同様の粘土紐で山が２つの突起がつく。文様帯は、口縁部、頸部、胴部の三段に区分される。口縁部文様帯は、口縁直下及び頸部との境に剣先状工具による押し引き文が巡り、区画される。区画内は三角形や弧状の文様が押し引き文で描かれ、三角形の内側は抉られ、陰刻となる。頸部と胴部との境は隆帯によって区画され、隆帯に沿って上下端に剣先状工具による押し引き文が施文されている。また、胴部にはこの水平の隆帯から「T」字状に隆帯が垂下する。区画隆帯に沿った押し引き文から「J」字状の押し引き文が描かれるが、真ん中に隆帯を持つものと持たないものが交互に描かれる。胴部の輪積痕はナデ消されているが、雑なため輪積痕が見える部分が多い。

６は口縁部の1/4程が残る。頸部端がソロバン王状に張り出す器形で、張り出し部屈曲個所に隆帯が横走し、隆帯上に太い刻みが入る。口縁部には、上端にヒダを持つ突起が添付され、頸部を区画する隆帯と橋状把手でつながる。口縁部は２列の角押文で描かれた４単位の楕円区画となり、区画内は斜位の角押文で充填される。

７は小型の平縁の深鉢。胴下半を欠損。胴部が球状に膨らみ、口縁部は「く」字状に外反する。口縁直下と頸部に剣先状工具の押し引き文が巡る。口縁部区画内は斜位の押し引き文が充填される。胴部は台形状の幅広の隆帯を斜めに貼り、隆帯上と胴部に三叉文を抉り陰刻する。隆帯脇はキャタピラ文が沿い、その外側に剣先状工具での押し引き文が並ぶ。

８は略完形。胎土に少量の雲母。円筒形の胴部が頸部で外反し、口縁部はやや直立して立ち上がる。口縁は平縁で、２つの山を持つ突起が４単位つく。口縁部と頸部は隆帯によって区画され、突起からは「Y」字状の隆帯が垂下し口縁部文様帯を分ける。口縁部は隆帯で４単位に区分され、区画内は区画に押し引き文が沿い、内は同一の施文具で波状や鋸歯状の押し引き文で充填する。区画の接点部分は耳たぶ状にせり上がる。胴部は輪積痕を残す。水平にヒダを寄せ、その上に太い刺突列を重ねたものと、小波状の沈線を描くものが交互に施文される。最上段のヒダ寄せ部から「Y」字状の隆帯が垂下。垂下部は隆帯が蛇行する。

９は略完形。金雲母が多量に混入。胴部やや外反して立ち上がり、頸部は大きく外反、口縁部は直立する。口縁は平縁で４つの把手がつく。口縁部は枠状文４単位が２条並列の押し引き文で描かれる。把手の下部は２条の逆U字状の押し引き文が２つ描かれ、把手は扇状で端部に刻みが入る。胴部は先端「Y」字状で断面三角形の隆帯が垂下する。隆帯上は大きく押圧されヒダ状になる。胴部の輪積痕は完全にナデ消していないが、ヒダ寄せは見られない。

10は胎土に金雲母を多く含む平縁の深鉢。頸部で大きく外反し、口縁は直立気味に立ち上がる。口縁部は隆帯で楕円区画をつくり４単位に区分。区画の接点部は若干せり上がる。一つの区画内に２列の平行有節沈線で楕円区画を二つ描く。胴部は断面三角形の隆帯で楕円区画を描き、下端の区画隆帯から「ハ」字状の隆帯が垂下する。区画内は２条の有節沈線が隆帯に沿って施文される。頸部及び胴部は輪積痕を残し、太い縦位の爪形文が巡る。ヒダ寄せは見られない。

11は口縁部がくの字状に内側に屈曲し、口唇が外反する器形の扇状の突起部分。胎土に金雲母含む。蛇行する隆帯で加飾した橋状把手が扇状の突起部に続く。扇状の把手は４列の結節沈線が縦位に描かれる。把手内面は隆帯で楕円が描かれ、隆帯上は刻みが入る。口縁部の横位区画は２列の結節沈線で描く。

12は８と同様の２つの山を持つ把手が貼付された深鉢の口縁部。口縁部に楕円区画を８単位配

し、2単位ごとに区画接点を耳たぶ状にせり上げ、小突起とする。区画内は半截竹管による有節沈線が隆帯に沿う。口縁部直下には半截竹管による並行沈線が横走する。

13は胎土に多量の金雲母を含む。胴部はやや開き、頸部で弱く括れ、口縁部が開き気味に立ち上がる大型の深鉢。接合しないが同一個体の破片が多く出土している。口縁部に縦位の隆帯が貼りつき、そのまま把手を形成する。隆帯上には大きな刻みが入る。平縁から把手がせり上がる。口唇部は肥厚して外反。肥厚部に刻みが入る。口縁部から胴部は輪積痕をやや残し、間隔を置いて長さ2cm程の大きな連続爪形文が3段横走する。体部はナデ整形が見られる。

14は胎土に金雲母を多量に含む。胴部はやや開き気味に立ち上がる深鉢。口縁部は横位の隆帯で区画し、区画間を蛇行隆帯でつなぐ。区画内は有節沈線を施文。区画から逆U字状の隆帯が垂下し、隆帯上は深い刻みが加えられる。胴部は輪積痕がやや残るが、ヒダ状の押圧は見られず、口縁部と胴部中位に装飾した幅の広い連続爪形文が巡る。

15は胎土に金雲母が入る。胴部はやや外に広がり、頸部から外反する深鉢。器面のナデはやや粗く輪積痕を少し残す。頸部直下から3条の連続爪形文が巡る。爪形文は大きく疎らなものとなっている。

16は略完形。胎土に金雲母が多く入る。胴部は真直ぐ立ち上がり、頸部が外反し、口縁部は直立する深鉢。口縁は大きい波状で4単位の大型把手がつく。把手は先端二山の板状で、先端部から口縁部に橋状の突起がつく。波底部には耳たぶ状の小突起が付き、口縁部は把手と小突起の間を区画するように複列の押し引き文が施される。押し引き文は2列を基本とし、空隙が認められる場合は、更に付加され、一部は先端が渦巻文となる。胴部は断面三角形の隆帯により多段の楕円区画が描かれる。胴上半では横に連続する横長の楕円区画、中位以下では縦に連続する小さい楕円区画が描かれる。隆帯脇は4列の押し引き文を主として隆帯に沿わせる。胴中位以下は押し引き文の刺突が緩み、波状沈線に変化している。中位以下の楕円区画は一つおきに横位の波状沈線で区画同士をつなぐ。胴部の楕円区画は上下の接点部がせり上がり小突起となる。

17は胎土に金雲母を多量に含む。口縁部のS字状隆帯がせり上がり、大きい扇状把手を形成する。隆帯上は大きい刻みが入り、ヒダ状を呈する。隆帯は断面三角形。把手頂部と隆帯間には、ヘラ状工具で一単位が長い結節沈線が描かれる。

18は同一個体と思われる胴部から底部の破片。底部は、外周部に網代痕が残る。胴部は輪積痕を水平方向にヒダ寄せし、整形する。ヒダ状の帯が2列横走し、帯と帯の間は弧状の隆帯が背合せで接し、楕円区画のような表現となる。この隆帯は各々接点から逆方向に潰れたようになる。破片上部に「Y」字状隆帯の一部と思われる縦位の貼付が剥がれた跡が見られる。

19は底部片。雲母を含む。断面三角形の隆帯が垂下する。ヘラ状工具で縦長の爪形文が横位に施文される。20は底部片。縦位に隆帯が貼付され、隆帯に沿って2列ずつ半截竹管による押し引き文が施文される。

21は大形の深鉢。同一個体の破片が多数出土しているが、遺存状況が悪く接合できた破片はごく一部である。器壁は厚い。胴部中位で膨らむ器形。口縁は緩やかな波状を呈し、波頂部に「C」字状の隆帯が貼りつき、把手状にせり上がる。隆帯には大柄な押圧が加えられる。口唇部外側が肥厚し、帯状になる。体部は無文だが成形時の横方向のナデ痕が顕著。

22は口縁がやや開く小型の円筒形深鉢。口縁は帯状に肥厚し、縄文が施文され、中央に剣先状工具の連続刺突文で鋸歯状文を施す。胴部は地文にRLの縄文を縦方向に施文。施文は重なり合う。

縦位のパネル文を半截竹管で描くが、所々に鋸歯状の文様が加えられ、縦位区画を壊す。区画の交差部分では器面を三角形に抉り、陰刻する。区画文に沿って短沈線が連続する。

23は小型の平縁の深鉢。口縁部は「く」の字に外反する。太い刻みを持つ棒状の隆帯が縦位に４単位貼付される。胴部全体にＲＬの縄文が浅くまばらに施文される。器面には輪積痕が残る。

24は胴部が「ハ」字状に開く深鉢。胴部に縦と横と回転方向の異なるＲＬ縄文が浅くまばらに施文される。口縁には半截竹管による２列の並行沈線が巡り、一部に「Ｙ」字の隆帯が付く。器面には輪積痕を残す。25は胴部中位が張り、頸部がくの字に屈曲する深鉢形土器の胴部片。指で横方向にナデ整形を行い、端部に凸凹のある工具で横位にナデ整形を行う。その後、ＬＲ縄文を浅く横方向に回転させ、疎らに縄文が施文される。26は胴部が「ハ」字状に開く器形の深鉢、胴下半部。間隔をもってＬＲ縄文が施文される。施文は浅い。底部付近に横方向のナデ整形が見られる。27は口縁部の突起部分。横方向に丸い穴がつく。隆帯で立体的な文様を描く。蛇頭形の突起破片か。28は口縁部の突起部分。「つ」字状に粘土を重ね、突起の上面にドーナツ状の円環を並べた文様を描く。環状にならない。

29は浅鉢形の器形の口縁に大きな環状の注口が付く。底部から直線的に広がり、頸部で屈曲し、口縁は内反。口唇部は肥厚する。口縁上端部に隆帯を貼り、隆帯上は刺突文が入る。屈曲部は幅広に凸部を潰した鎮状の隆帯を貼り、その中央に連続刺突文を１列加える。口縁部は押し引き文で横位の区画を描き、内部に１列の押し引き文を加える。注口の右側の一部は鋸歯状の押し引き文が施される。

30は浅鉢形土器。口縁部は屈曲して直立する。口縁を４単位に区分し横位に長い楕円区画を隆帯で描く。２列の角押文を区画に沿わせ、区画内は縦位角押文を充填する。区画の接点部分は耳たぶ状にせり上がる。隆帯上には大きい刻みが入る。31は浅鉢形土器。口縁平縁。胎土に金雲母多い。２対４単位の把手が口縁につく。体部は無文だが横方向の調整痕が残る。口唇部が外側に肥厚し、その部分に太い刻みが入る。口唇がせり上がり把手をつくる。逆「Ｃ」字状と扇状の把手が２対につく。把手の端部は口唇同様の大きい刻みが入る。胴部は無文で、斜め方向に粗いナデを施す。

32 ～ 70は破片資料。32 ～ 39は口縁部。32 ～ 34は先端が加工された工具での細かい角押文が伴う一群。32は胎土に雲母含む。口縁に小波状の突起がつく。隆帯で区画文を施し、区画接点の隆帯がせり上がり、突起をつくる。隆帯脇を剣先状工具で連続の刻みが２条沿う。区画内も同様の施文が縦位に入る。33は口唇部に太い刻み。口縁から頸部に渦巻き様の隆帯が描かれ、隆帯の一部がせり上がり、小突起を呈する。隆帯に沿って連続押し引き文。区画内に半截竹管で縦位と波状の押し引き文。34は太い半截竹管で隆帯を描出し、区画を施す。隆帯の一部には連続押し引き文が加えられる。区画内は三叉文を陰刻する。三叉文の際には刻みが入る。

35 ～ 39は隆帯に押し引き文が沿い、区画内を刺突文や押し引き文が充填する一群。35は口縁部と頸部４片同一個体。口縁は平縁に小把手がつく。低い隆帯による区画文を描き、隆帯脇を「Ｕ」字状工具での押し引き文が２列沿う。区画内は竹管の円管部を連続刺突して充填する。頸部以下は押し引き文で沈線を施文する。36は隆帯がせり上がり耳状の突起がつく。隆帯脇はヘラ状工具での押し引き文。区画内は剣先状工具での連続刺突文で充填する。37は幅広の押し引き文が横位の隆帯脇に２列沿う。口縁下も同様の押し引き文が横走する。38は口唇部に刻み。口唇直下に縦位の連続押し引き文が間隔をおいて施文される。40は口縁部39を含む３片が同一個体である。口縁

部に刻みを有する棒状の突起がせり上がり波頂部を形成する。口縁や隆帯に沿って２本一組の沈線を施す。隆帯間は縦楕円の区画を沈線で描き、内側を斜位の角押文で充填する。

40 ～ 52は胴部破片。41 ～ 45ヘラ状工具による押し引き文で施文をする一群。35 ～ 47は阿玉台Ⅰb式期の所産と思われる。48 ～ 52は半截竹管を用いて施文する。勝坂式期の所産と思われる。41は三角形の隆帯で２段の楕円区画を描き、区画内側は隆帯に沿って角押文が入る。区画内は縦位の角押文で埋める。区画外は縦位の角押文の間を横位の角押文で梯子状に施文し埋める。42はヘラ状工具の細い横位押し引き文を描き、その間を円形の連続刺突文や波状の角押文を施す。43は角押文で縦位及び縦波状を施文する。44は幅広の低い隆帯を貼り、区画を施す。３本一組の櫛歯状工具で縦位の押し引き文を施し、それに直行する横位の押し引き文を施文する。45は幅の狭いヘラ状工具で、横位の押し引き文を複数列描き、上に渦巻きや波状の押し引き文を施す。46は竹管を斜めに刺突する。下部は横位の角押文がめぐる。47は幅広の隆帯を横位に２列巡らせ、その間に射位の隆帯を加え菱形の区画をつくる。隆帯の両脇は角押文が沿い、区画は斜位の波状沈線が入る。横帯の区画と区画の間にも同様の波状沈線が入る。49は縦位に粗い角押文を施す。50は隆帯で区画を描き、隆帯の両脇に角押文が沿い、下位に同様の角押文を複列で鋸歯状に施文。51は半截竹管で横位に隆帯を描出し、上部に隆帯で区画文を描き、内部を円形の刺突文で充填。52は沈線で楕円の区画を描き、上位に剣先状工具で2列の刺突列を施す。

53 ～ 60は口縁部破片。54、58は隆帯に複列の押し引き文が沿う。56、57は低い隆帯で口縁部に区画が施される。59 ～ 61は口縁部の区画に複列の沈線が施される。53は口唇部に縦と横からの交互刺突で口唇部を凹凸にし、口唇内面に幅広の角押文が口唇に沿う。54は口縁部の隆帯がせり上がって耳たぶ状になり、口縁部は小波状になる。横位に低い隆帯で区画を施し、内部を斜位の角押文で充填。55は３片が同一個体。黒雲母を含む。断面三角形の隆帯で横位の方形区画を施し、区画内は隆帯に沿って２列の角押文が巡る。区画内には鋸歯状の角押文。胴部には区画から垂下して先端「Y」字状の隆帯が施文される。口縁部から隆帯がせり上がり口縁に小把手がつく。56は雲母を含む。器面に輪積痕を残す。口縁部に低い隆帯で横位の楕円区画を施す。57は幅広の低い隆帯で横位の区画を描く。内部は横位に連続爪形文を施す。58は金雲母含む。山形の隆帯で楕円区画を描き、隆帯に沿って４列の角押文が巡る。区画内は２列の波状沈線が横走する。口唇部にも２列の角押文が施文される。59は口唇部が「く」の字状に外反する。口唇から垂下した隆帯が耳たぶ状にせり上がり、口縁部に区画をつくる。区画内は４本１組の櫛歯状工具で大きい波状文を描く。60は口縁部に弧状の区画を描いた隆帯が口唇部にせり上がり小突起をつくる。隆帯脇は細い４本の櫛歯で押し引き文を描き、区画内も同一工具で波状文を施す。61は山形の隆帯を貼りつけ、横位の区画を施す。隆帯に沿って60と同一様の工具で波状文を描く。53 ～ 61は阿玉台Ⅱ式の所産と思われる。

62 ～ 66は押し引き文が多用される一群で、勝坂式の所産と思われる。62は山形の隆帯で区画を描き、区画の接点に小突起をつける。隆帯脇は角押文を沿わせ、区画内も斜位に角押文を施文する。63は地文にＲＬ縄文を施文。斜位に太い半截竹管と細い半截竹管を組み合わせて隆帯を描く。太い隆帯上は連続爪形文を施文。細い隆帯の脇は、２種類の異なる幅の工具で連続爪形文を沿わす。64は細い隆帯で横位の楕円区画を描き、隆帯に沿って角押文を施す。区画外はＲＬ縄文を施文する。65は半截竹管で隆帯を縦位に描き縦区画を施す。区画内は剣先状工具で横位に角押文を施文。66

は底部片。隆帯で楕円区画を描き、隆帯に沿って連続押し引き文を描く。

67～70は浅鉢の口縁部。67は「ハ」字状に立ち上がった胴部が頸部で内に強く屈曲し口縁部を構成。頸部は外側にせり出しツバをつくる。口縁部は上下に横位の角押文を施し、その間を角押文により頂部を上下に交互となるように鋸歯状文を重ねて描く。68は口唇から垂下する隆帯が「Y」字状にせり上がる。口縁部に隆帯に沿って２列並行の有節文が施される。口唇部の隆帯上には刻みが入る。69は口縁が波状を呈する。波頂部の口唇には刻みが施される。70は胎土に雲母を含む。口唇部の隆帯がせり上がり小突起をつくる。

土製品では、71はミニチュア土器。円筒形の器形で口唇部に角押文が巡る。72～77は土製円盤。いずれも胴部破片を加工している。72は角押文が施文され、76は低い刻みが入る隆帯が貼られる。

飯能市内の調査で、本77号住居跡ほど阿玉台式土器がまとまって出土した例は無い。阿玉台式土器が主体を占め、勝坂式土器と共伴した出土資料としては良好な事例である。

最後に出土土器を概観しておきたい。

勝坂式期の新道式と思われる１は、角押文の脇に三角押文が施文される。７は三叉文の印刻が見られ、角押文に単沈線が施文される。22は縦位パネル文が阿玉台の影響か鋸歯状文で崩されてはいるが、三角文の印刻や単沈線が施文される。

阿玉台Ⅱ式期と思われる10～12は口縁の楕円区画内に緩んだ押し引き文が２列一組で施文される。13～15は胴部に輪積痕やナデ痕が少し残り、連続爪形文が施文される。Ⅱ式の中でも古い様相と思われる。

主体を占める阿玉台Ⅰb式と思われる２～６はあまり発達していない把手が付き、幅広の工具で連続押し引き文が施文される。口縁の区画内は６以外で空隙を持つ押し引き文が施文される。Ⅰb式でも古い様相が残る一群と考える。８、９、16、17は発達した把手が付き、17は「S」字状隆帯がせり上がり、環状になる。８、18は胴部にヒダ状文が付く。８、９は胴部に独立して先端「Y」字状の垂下隆帯が付く。いわゆるⅠb式の様相が認められる。17の発達した把手や16の胴部に多段構成された楕円区画、18の低い隆帯で描出した楕円区画などはⅠb式でも新しい様相が認められる。

石器は第555図78～第557図104が出土した。

78は石鏃。79～95、97～100は打製石斧。96、101、102は礫器、103は磨石・凹石、104は石皿・凹石である。

第78号住居跡（第558図～第560図）

Ｌ－12・13区に位置する。北東側半分に撹乱を受けており、残存状況は悪い。

本住居跡は、第79号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。残存する規模は南北5.8m、東西2.9m。推定平面形状は北西－南東に主軸をもつ楕円形である。壁高は最も深い部分で15cmである。主軸はN－41°－Wを指す。

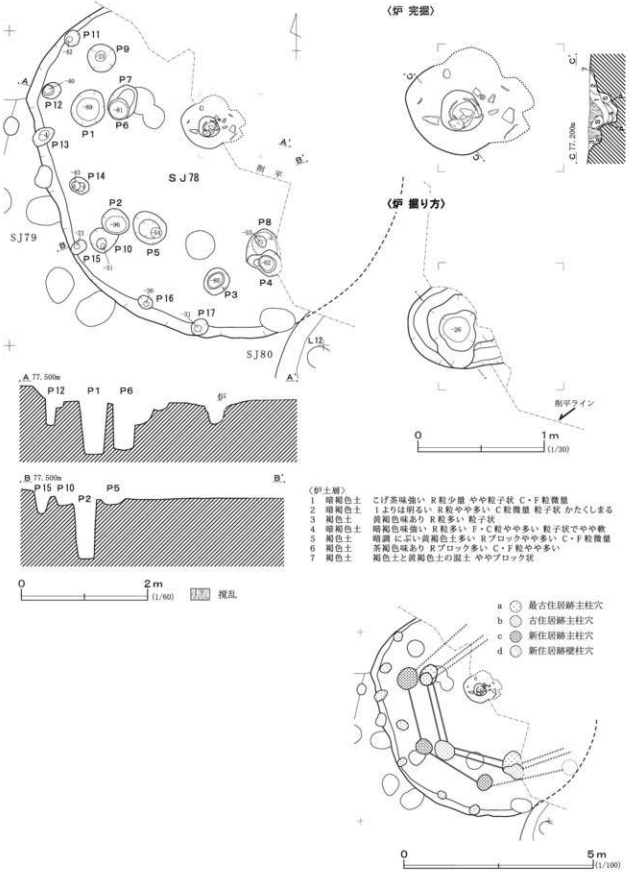
床面は平坦だが、南が高く北に向かって緩く傾斜する。比高差は約15cmを測る。周溝は無く、壁際に小さい壁柱穴（P11～17）が巡る。壁柱穴はほぼ90cm間隔で検出され、P15とP16の間だけ150cmと広くなっている。

主柱穴と思われる柱穴は数や配置から複数の組み合わせが想定された。上屋の建て替えや拡張が考えられ、上屋建て替え１回（最古・古段階）、拡張１回（新段階）が行われたと判断した。

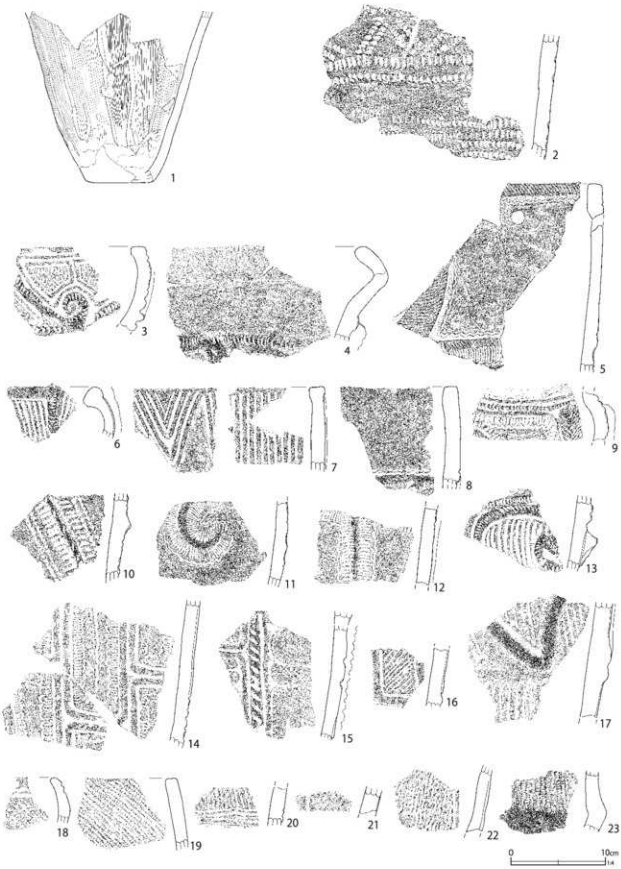
各時期の主柱穴は以下のとおりである。

最古段階　P７、５、８
古段階　　P６、５、４
新段階　　P１、２、３

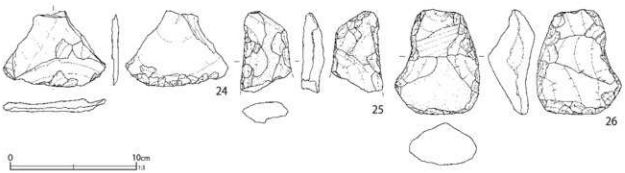
新段階の主柱穴P３は、古段階の主柱穴P４の拡幅後に位置付けられると思われ、その位置関係



第558図 第78号住居跡



第559図　第78号住居跡出土遺物（1）



第560図　第78号住居跡出土遺物（2）

第216表　第78号住居跡柱穴計測表（第558図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	60.0	89.0	P 2	42.5	96.0	P 3	42.7	80.0	P 4	[53.2]	62.0	P 5	57.0	54.0
P 6	39.0	81.0	P 7	(58.5)	—	P 8	[33.6]	53.0	P 9	43.4	21.0	P 10	40.0	31.0
P 11	25.9	42.0	P 12	29.7	40.0	P 13	37.3	4.0	P 14	32.7	43.0	P 15	27.6	21.0
P 16	24.3	36.0	P 17	28.8	31.0									

第217表　第78号住居跡出土復元土器観察表（第559図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	分類
559-1	[18.0]	(19.9)	－	－	

第218表　第78号住居跡出土石器観察表（第560図）

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
560 － 24	削器	Ⅰ①イ	チャート	6.0	8.2	1.0	22.0	
25	打製石斧	Ⅴ②イ	砂岩	6.4	4.0	1.8	50.0	
26	打製石斧	Ⅲ2①イ	砂岩	8.3	6.7	3.6	175.0	

から、新住居跡は南側へ広く拡張が行われたと推測し、南側へ主柱穴が１本追加されたと考えた。よって最古・古段階は６本、新段階は７本の主柱穴であったと推定される。しかし、北東側半分が失われているため、不明の部分も多い。

炉は、中央部北寄りに位置し、埋甕炉である。東側に攪乱を受けている。炉中心の掘り込み部の立ち上がりに沿って土器片が埋設されていた（第558図）。一個体の土器を埋設したというより、土器片を並べた印象である。また炉内部からは10cm前後の円礫が数点検出され、石囲炉の可能性も考えられる。柱穴の配置から拡張住居跡と判断したが、炉には作り替えの痕跡は認められなかった。位置関係からは、攪乱の影響を受けた部分に古い炉が所在していた可能性を考えておきたい。

住居跡の覆土は暗褐色土が主体で、締まりのある固い覆土であった。床直上や壁直近では粗めのローム粒子を多く含む層が見受けられた。遺構検出時に深鉢形土器（559図１）の下半部が正位に埋まって検出された。

遺物は第559図１～第560図26の土器類、石器類が出土した。

土器は１～23が出土した。１は正位に出土しており、当初埋甕として調査したが、掘り方は確認できず、底部は床面に接していた。覆土を掘り込んだ別遺構の可能性が考えられる。深鉢形土器の胴下半で、地文に櫛歯状工具で縦位の集合沈線を描く。また集合沈線を施文する前に一部に縄文を施している。その後、太い竹管で直線及び蛇行線を垂下させる。加曽利ＥⅢ式であろうか。

２は胎土に黒雲母を含む。角押文と幅広の押し引き文が対で横走し、横帯の区画内を２列１対の押し引き文が鋸歯状に施される。

３は口縁部に刻み隆帯の渦巻文とパネル状区画文が組み合わさったモチーフを構成する。パネル状区画には爪形文が沿う。

４は口縁部が「く」字状に内屈する。爪形文が施される隆帯で頸部区画を行っている。

５は口頸部に幅広低隆帯が巡り、細かいＲＬ縄文が隆帯上に施文される深鉢である。隆帯に沿って波状沈線が施され、器面が良く磨かれている。口縁部には補修孔を持つ。

６は内湾する口縁部破片で、隆帯区画内は半截竹管による縦位の集合沈線が充填される。

７は２片同一個体。半截竹管で隆帯を描出し、縦位や山形の文様を描く。

８は胎土に黒雲母が入る。無文の口縁部の下に隆帯で横位の区画を施す。隆帯には波状沈線が沿い、区画内には剣先状工具の連続刻み目文が沿う。

９は半截竹管で横位の隆帯を描き、横位区画を描く。横走する隆帯と区画を描く隆帯の間には、押し引き文が施文された隆帯が付加される。区画の接点は綾杉状の刻みを施した隆帯が垂下する。区画内の隆帯にはキャタピラ文が沿う。

10は斜位に短沈線が入る山形の隆帯が貼付され、隆帯脇は幅広の角押文、その脇は２条の剣先状工具による押し引き文が施される。

11、12は隆起線状の隆帯でモチーフを描き、細かな爪形文と波状沈線が沿う。同一個体と思われる。

13は刻み隆帯で横位の楕円区画と渦巻文を描くもので、区画内は集合沈線が施文される。

14～16はパネル文土器で、縦位長方形のパネル文区画に沿って蓮華状文や刻みを施す。15は区画内にＲＬ縄文を施文。16は区画内に棒状工具による斜沈線が充填される。

17は横位に低い隆帯を巡らせ文様帯を区分し、上部に隆帯を鋸歯状に貼る。区画内は縦位集合沈線が施される。

18は口唇直下に２条の沈線が横走し、口唇に円形の刺突文が並ぶ。地文はＲＬ縄文を施文。19は口唇直下まで地文のＲＬ縄文が密に施文される。

20は半截竹管による横位の沈線が施文され、Ｌの撚糸文が施される。21は縦位の沈線が施され、地文にＬＲ縄文が施文される。

22は半截竹管による縦位の隆帯が描かれ、Ｌの撚糸文が施文される。23は底部片。胴部にＬＲ縄文が施される。

石器は第560図24～26が出土した。24は削器、25、26は打製石斧である。

第79号住居跡（第561図～第562図）

Ｌ・Ｍ－12・13区に位置する。第78号住居跡と重複するが、本遺構の方が古い。東側半分は第78号住居跡により壊されていた。現存する規模は東西2.4m、南北4.0mで、平面形は南西－北東に主軸をもつ長楕円形である。壁高は最も深い部分で15cmである。主軸はＮ－49°－Ｗを指す。

床面は平坦であるが、南北の一部が開発による影響で削平されていた。残存部の床面に顕著な硬化範囲は認められない。

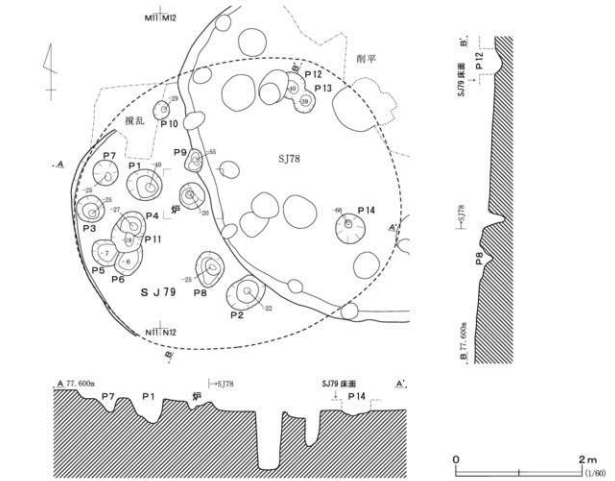
柱穴は全体で14基検出された。第79号住居跡の範囲に11基認められ、主柱穴と思われる柱穴の配置から、建て替えを想定した。それぞれの時期の柱穴は以下のとおりである。

古段階　Ｐ１、８、14、12、19

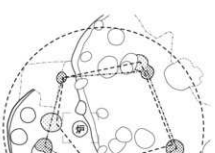
新段階　Ｐ11、２、14、13、10

両段階も５本柱穴で、新段階が若干西と南へ広がっている。

炉は、南西寄りに構築されている地床炉である。炉の中心部に一部小ピット状の落ち込みが認められ、この部分がカリカリに被熱し赤化していた。小ピット状部分の下層には、黒褐色土に焼土粒子を多く含む土層を検出している。



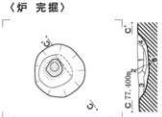
〈模式図〉



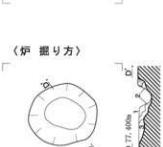
新住居　古住居

0　5m (1/100)

〈炉 完掘〉



〈炉 掘り方〉



撹乱　被熱赤化

0　1m (1/30)

〈炉〉

1	赤褐色土	赤味強い F ブロック発達 R 赤化・硬化する
2	黄褐色土	暗褐色土混入 R ブロック硬化 ブロック状
3	暗褐色土	やや明調 C 粒・F 粒微量 R 粒少量 粒子状
4	暗褐色土	やや暗調 若干黒味あり R 粒少量 F 粒やや多い
5	暗褐色土	暗調 R 粒多い 粒子状 シャリシャリ感あり

〈炉 掘り方〉

1	赤褐色土	F 土ブロック状に発達 空間に暗褐色土・ 黄褐色土若干落ち込む 粘性・しまり弱い F 土カリカリ 焼成面か
2	暗黄褐色土	黄色味強い　3 よりも R 土・R 粒多い R 土若干被熱し赤味あり R ブロック微量 F 粒あり 暗褐色土斑状に微量 粘性やや弱い しまり弱い 若干カリカリ感あり 掘り方被災し土か
3	暗黄褐色土	R 土・R 粒主体　R ブロック少量 暗褐色土斑状に少量 粘性ややあり しまり弱い

第561図　第79号住居跡

第562図　第79号住居跡出土遺物

第219表　第79号住居跡柱穴計測表（第561図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	54.7	40.0	P 2	64.8	22.0	P 3	43.9	25.0	P 4	44.8	27.0	P 5	42.0	7.0
P 6	55.8	6.0	P 7	40.8	25.0	P 8	55.6	25.0	P 9	35.8	55.0	P10	28.5	29.0
P11	49.3	19.0	P12	42.3	40.0	P13	36.0	39.0	P14	48.4	66.0			

住居跡覆土はわずかにロームのくすんだ褐色土が堆積していた。ほぼ床面が露出していたが、覆土のある部分は、暗褐色土の堆積が確認できた。

遺物は出土量が極くわずかで、掲載できる遺物も限られている。

遺物は第562図１～８が出土した。１は山形の突起部。左は口唇と隆起部に沿って連続の爪形文が施文される。中央に沈線が１列入る。２は胎土に雲母を含み、口唇に沈線が入る。口唇直下に押し引き沈線が巡る。沈線下は角押文を斜位に施文。３は鋸歯状の角押文が１条施文される。４は半截竹管による連続爪形文と刻みを持つ高い隆帯で区画を描き、各々の脇には沈線が沿う。５は刻みを有する隆帯が横走し、隆帯脇は沈線が沿う。６は幅広の刻みを持つ隆帯が垂下し、両脇は細い半截竹管による沈線が沿う。７、８はＬの撚糸文が縦位に施文される。

第80号住居跡（第563図～第565図）

Ｌ・Ｍ－12・13区に位置する。北東側1/4ほどが削平されている。また、北西端は第78号住居跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

住居跡の残存規模は東西4.4m、南北3.6mで、推定平面形状は南西－北東に主軸をもつ楕円形と推測する。壁高は最も深い部分で14cmである。主軸はＮ－49°－Ｗを指す。

床面は、平坦でほぼ水平を呈する。内側に周溝が一巡し、その外側にも一部周溝が残存する。確認面では、住居跡南側が高く東に向かって低くなっており、南側で約14cmの壁高が認められたが、東側や北側では、掘り込みが残り状況であった。

周溝や主柱穴は複数認められ、上屋の建て替えや拡張が想定される。整理すると次のようになる。最古－拡張－古－拡張－新－建て替え－最新。

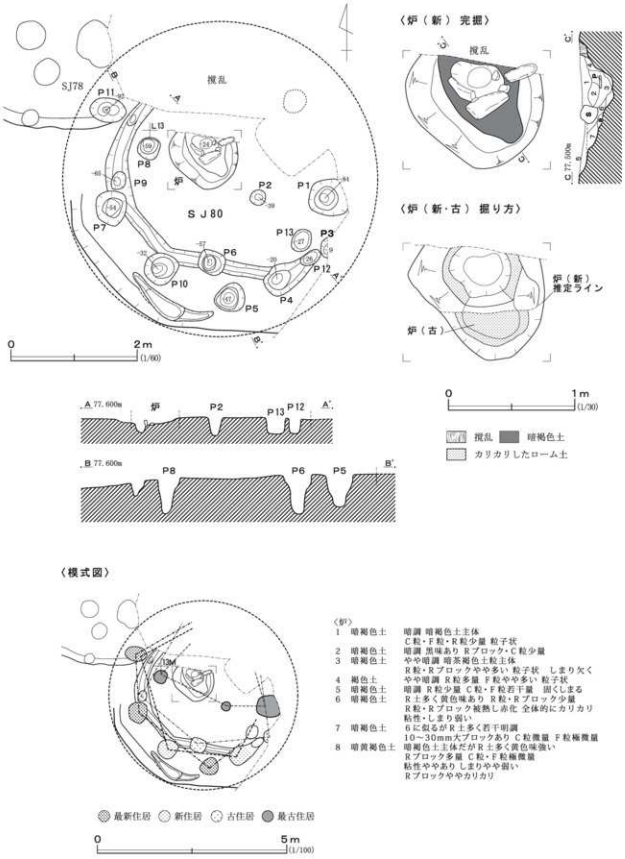
それぞれに帰属する柱穴は、

最古段階　Ｐ８、２、１
古段階　　Ｐ10、６、３
新段階　　Ｐ12、11、４
最新段階　Ｐ12、７、５

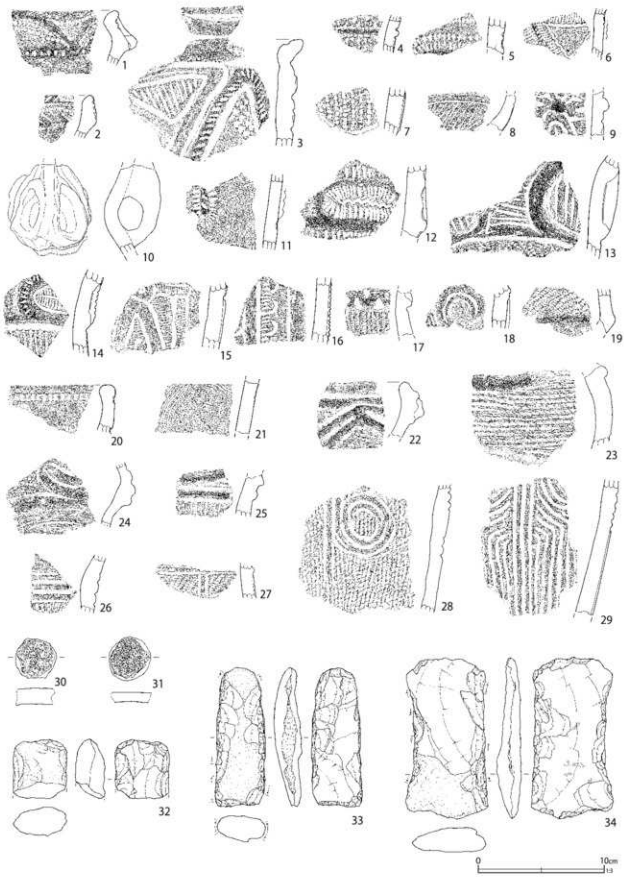
となり、各段階で３基ずつ確認された。

炉は、中央部北西寄りにあり、石囲炉である。炉の北側は削平を受けて、炉石がロの字状の配置からずれている。炉の覆土は炭化物を含む暗褐色土が顕著に確認された。掘り方の調査中に、南側に別の被熱面が認められた。炉は南側から少し北側に造り替えられたものと考えられる。

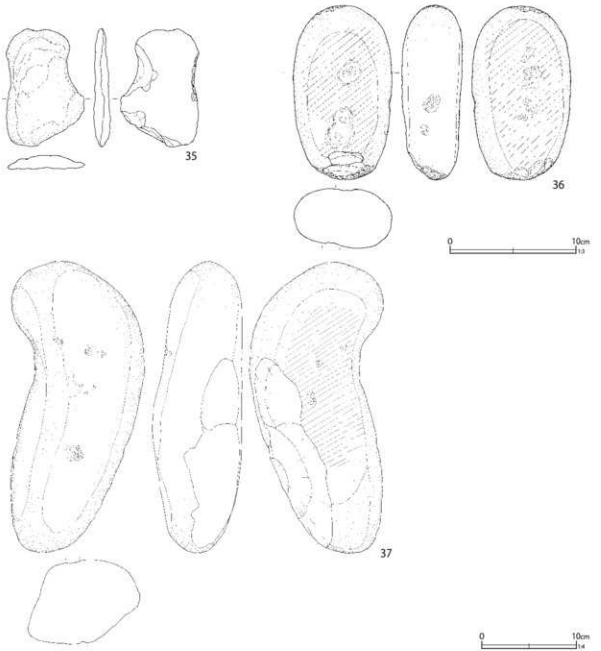
住居跡の覆土は暗褐色土主体で、床直上や壁直近では粗めのローム粒子を含んだ土に変化した。



第563図　第80号住居跡



第564図　第80号住居跡出土遺物（1）



第565図　第80号住居跡出土遺物（2）

第220表　第80号住居跡柱穴計測表（第563図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(　)
P 1	57.4	84.0	P 2	25.0	39.0	P 3	32.2	9.0	P 4	38.1	20.0	P 5	48.6	47.0
P 6	42.0	57.0	P 7	52.8	54.0	P 8	36.0	59.0	P 9	38.8	22.0	P10	29.7	65.0
P11	52.8	32.0	P12	58.1	92.0	P13	35.1	26.0	P14	36.9	27.0			

床面には硬化した部分は検出されていない。

遺物は第564図1から第565図37の土器類、石器類が出土した。遺物の大半が覆土出土で、一部炉内（第564図16、25）からも出土した。

土器は1～29である。1は胎土に金雲母を含む。口縁部は「く」字状に内屈し、口唇は外反す

第221表　第80号住居跡出土石器観察表（第564・565図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
564 － 32	打製石斧	Ⅴ②イ	ホルンフェルス	4.7	4.3	2.3	61.0	
33	打製石斧	Ⅱ②①イ	砂岩	11.0	4.0	2.2	111.0	
34	打製石斧	Ⅲ②①イ	砂岩	12.7	6.5	1.9	173.0	
565 － 35	打製石斧	Ⅲ①①イ	シルト岩	9.3	7.2	1.3	79.0	
36	磨石	Ⅱ1-2-3①イ	閃緑岩	13.7	7.8	4.7	771.0	
37	石皿	Ⅲ②①イ	安山岩	30.9	19.1	9.5	5300.0	

る。屈曲部は下端がツバ状にせり出し、上端には刻みが施される。口縁部区画隆帯には半截竹管による連続押し引き文が２条沿う。

２は口唇直下に２条の角押文が横走し、角押文の上下には斜めの短沈線が施される。３は口唇部が外反し、口唇端部に沈線が巡る。口縁部は隆帯で区画され、内部に三角形区画を施す。隆帯脇は沈線が沿う。区画内は半截竹管による集合沈線や集合の三角押し文が充填される。

４は隆帯が横走し両脇は押し引き文が沿う。５は隆帯で渦巻文を描くと思われ、隆帯に沿って幅広の角押文、その脇に三角押文が施される。

６は狭い刻みを持つ隆帯で区画文を描き、隆帯に沿ってキャタピラ文と波状沈線文を描く。７は沈線で区画を描き、区画内を縦位の角押文で充填する。

８は棒状の工具で横走する沈線を浅く描き、その下に斜位の集合沈線を浅く施文する。９は円形の貼付文を中心に山形の沈線文が対に描かれる。

10は口縁部の眼鏡状突起。11は抽象文の一部。12は幅広の隆帯で横楕円区画を描き、隆帯の両脇に幅広のキャタピラ文を描く。区画内は鋸歯状の沈線が描かれる。

13は横位の楕円区画文が太い隆帯で描かれ、区画の接点は隆帯がせり上がり耳たぶ状の突起となる。区画内外は集合沈線が施される。区画文の下位はＬＲ縄文が施文される。

14は、隆帯で横位の楕円区画を描く。隆帯には沈線が沿い、区画内は爪形文が施文される。胴部は三角押文が縦位に集合して施される。

15は沈線で三角や縦の区画を描き、区画内は連続の爪形文を施す。

16は半截竹管による縦位の隆帯に沿ってキャタピラ文が描かれ、その外側に半截竹管の刺突による連続弧状文が施文される。

17は横位の隆帯に上下から交互の刺突を加え、隆帯下はＲの撚糸文を縦位に施す。

18は背割隆帯で渦巻文を描き、余白に縦位の集合沈線が描かれる。

19は横位の隆帯の上部にＲＬ縄文が施される。20は口縁に沿って先端に刻みを加えた工具により押し引き文を施す。21は櫛歯状工具による波状の沈線文を縦位に施す。

22 ～ 28は加曽利Ｅ式のキャリパー形深鉢形土器で、22 ～ 25は口縁部破片、26 ～ 28は頸部から胴部の破片である。

27は地文に縦位のＲＬ縄文を施文して、沈線懸垂文を施文するものである。その他は地文にＬの撚糸文を施す。

28はＲＬ縄文地文上に、半截竹管の内面施文の平行沈線で円や縦位の文様を施す。29は半截竹管の内面施文で、懸垂文を中心とした左右対称のモチーフを描く。

土製品は30、31の土製円盤が出土した。器面無文部の土器片を使用している。

石器は第564図32 ～第565図37が出土した。32 ～ 35は打製石斧、36は磨石・凹石、37は石皿・凹石である。

（2）集石土壙

芦苅場遺跡の第２・３・４次調査において、集石土壙と呼ばれる焼礫等の詰まった土壙が、合計88基検出された。内訳はⅡ区が45基、Ⅲ区が42基、Ⅳ区が１基である。集石土壙はチャート系を主体とし、砂岩系、頁岩系などの礫が含まれ、ほとんどが焼けており、破砕して小礫になったものから、原形を留める礫まで出土している。出土礫については10ｇ以下を除いて、全点について形状と重量について計測し、データ化している。

礫については全礫、半割礫、その他に分類して表示したが、実際には全礫、半割礫、４分の１、大（４分の１以下）、中（８分の１以下）、小（10ｇ以下）の６種類に分類してデータ化し、小については個数ではカウントせず、合算して総重量（ｇ）でデータ化している。

ここでは、出土礫の総個数、総重量とともに、チャート系礫の占める割合を示し、礫の形状と重量の関係についてもグラフ化して示した。

ａ）Ⅱ区

第１号集石土壙（第566図、第569図１、２、第586図１）

Ｔ－９・10区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.50m、短径1.32m、深さ0.33mである。断面形はやや緩やかな擂鉢状を呈し、底部は小さな平坦面を有する。礫は全体に含まれており、壙底には炭化物を多く含む層が堆積しており、礫を焼いたためか、調理のためにかは判断されないが、火を焚いていることは明らかである。含まれる礫は、小礫が多い。

集石の礫は、礫総個数1,319点、礫総重量119.1kgであり、チャート系礫の占める比率は92％である（第586図１）。

時期は、勝坂式と加曽利ＥⅢ式の土器片が出土しており、どちらかの時期と思われるが、遺構の形状等から勝坂式新段階期の可能性が高い。

遺物は第569図１、２が出土している。１は胴部破片で、刻み隆帯で胴部を区画し、胴部の地文に０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する。

第２号集石土壙（第566図、第569図３、第586図２）

Ｔ－９区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.90m、短径0.75m、深さ0.27mである。断面形は皿状を呈し、壙底に小ピットを有する。

覆土に多くの礫は含まれず、火を焚いた痕跡はない。

集石の礫は、礫総個数218点、礫総重量10.1kgであり、チャート系礫の占める比率は89％である（第586図２）。

時期は勝坂式終末～ＥⅠ式期である。

遺物は第569図３が出土した。３は勝坂式終末期の多喜窪タイプの底部破片である。櫛形区画内に上下差し切りの沈線文を施文する。

第３号集石土壙（第566図、第569図４～６、第586図３）

Ｔ－10区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.37m、短径1.16m、深さ0.15mである。壙底は緩やかな皿状を呈する。覆土に火を焚いた痕跡は認められなかった。遺構の東半分に礫が集中しており、コンパクトにまとまっている。

集石の礫は、礫総個数131点、礫総重量14.0kgであり、チャート系礫の占める比率は89％である（第586図３）。

時期は、加曽利ＥⅠ式後半期である。

遺物は第569図４～６が出土した。４は口縁部文様帯を有する加曽利ＥⅠ式のキャリパー形土器で、口縁部に低平隆帯で横「Ｓ」字状文を描くものと思われる。頸部には縦走する撚糸文Ｒを縦位施文し、単節ＲＬ縄文を縦走縄文風に施文する。５、６は４と統一個体と思われ、頸部を３本の並行沈線で区画し、平行沈線の波状文を施文する。加曽利ＥⅠ式後半期に比定されよう。

第４号集石土壙（第567図、第569図７～11、第586図４）

Ｓ－10区に位置する。第７・８号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形は楕円形で、規模は長径1.33m、短径1.00m、深さ0.20mである。断面形は緩い皿状を呈し、壙底は平坦である。大きな礫を中心に、小さな礫が集まっており、壙中で火を焚いた痕跡は認められなかった。

集石の礫は、礫総個数105点、礫総重量6.8kgであり、チャート系礫の占める比率は77％である（第586図４）。

時期は勝坂式終末～ＥⅠ式期である。

遺物は第569図７～11が出土した。７、８は深鉢の胴部破片で、７はモチーフを描く低平隆帯の両縁に押圧状の刻みを施している。８は刻み隆帯区画の中に沈線文の三叉文等を施文する。９は有孔鍔付土器である。10、11は無文の口縁部が内湾する破片で、10は深鉢の、11は浅鉢の口縁である。

第５号集石土壙（第567図、第569図12～14、第586図５）

Ｑ－９・10区に位置する。平面形は不整円形で、規模は長径1.34m、短径1.25m、深さ0.31mである。断面形は緩い擂鉢状を呈し、底面は丸味を帯びる。礫は中央部を中心にして良く集中しており、壙中に火を焚いた痕跡は認められない。

集石の礫は、礫総個数576点、礫総重量58.9kgであり、チャート系礫の占める比率は88％である（第586図５）。

時期は勝坂式終末～ＥⅠ式期と思われる。

遺物は第569図12～14が出土した。12は並行沈線を垂下して胴部を分割しているものと思われ、さらに並行沈線で細区画しているようである。13は小さく張り出す底部破片で、撚糸文Ｒを施文している。14は浅鉢の胴部破片と思われる。以上、勝坂式終末に比定される土器群であろう。ただし、13は撚糸文Ｒを施文しており、この段階ではＬを主体とすることから、Ｒの撚糸文は珍しいと言えよう。

第６号集石土壙（第567図、第586図６）

Ｒ－10区に位置する。平面形は円形で、規模は長径0.74m、短径0.66m、深さ0.15mである。断面形は皿状を呈し、壙底はやや窪んでいる。覆土に礫を疎らに含んでおり、表層で炭化物が混じっているが、壙中で火を焚いた痕跡は確認でなかった。

集石の礫は、礫総個数77点、礫総重量3.5kgであり、チャート系礫の占める比率は97％である（第586図６）。

出土遺物は無く、時期は不明である。

第７号集石土壙（第570図、第569図15～23、第586図７）

Ｑ－10区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.76m、短径1.58m、深さ0.27mである。断面形は皿状を呈し、壙底は緩く波打っている。礫は上層に集中するが、大きめの全礫を中心として、ややまとまりに欠ける。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

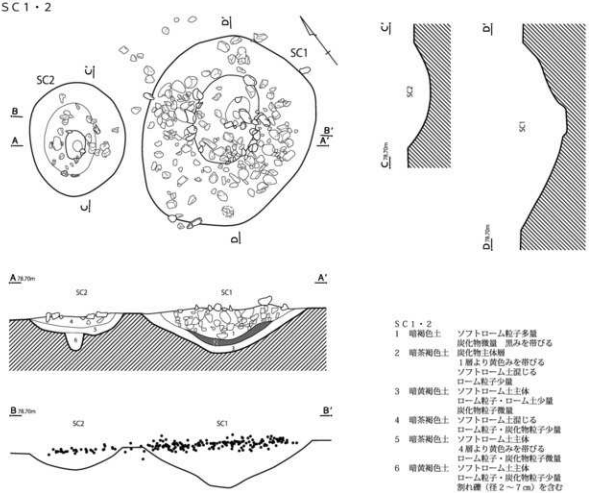
集石の礫は、礫総個数72点、礫総重量21.1kgであり、チャート系礫の占める比率は79％である（第586図７）。

時期は加曽利ＥⅢ式期であろう。

遺物は第569図15～23が出土した。15は爪形文を施文する勝坂式である。16～18は磨消懸垂文を有する加曽利ＥⅢ式キャリパー形土器の胴部である。いずれも地文は単節ＲＬ縄文の縦位充填施文である。19、20は胴部に矢羽状沈線を施文する曽利Ⅳ式土器と思われる。21は条線のみ施文する胴部破片で、22は沈線懸垂文と曲線文を施文する。以上、加曽利ＥⅢ式に比定されよう。

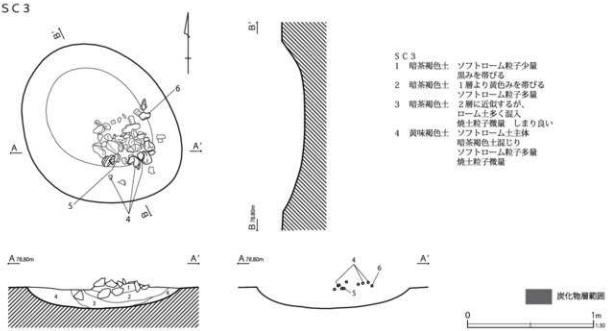
23は打製石斧である。短冊形を呈し、刃部は片刃である。

SC1・2



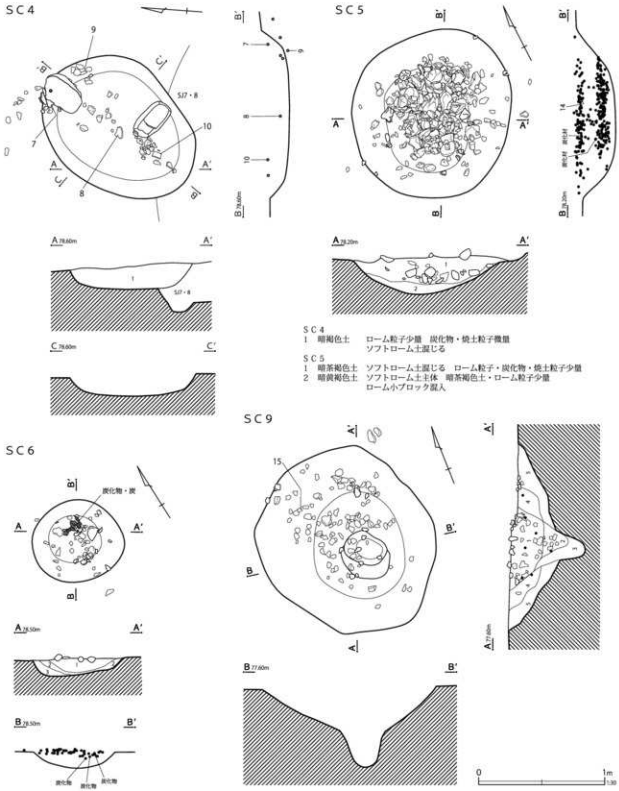
SC1・2
1　暗褐色土　ソフトローム粒子多量
　　炭化物微量　黒みを帯びる
2　暗茶褐色土　炭化物主体層
　　1層より黄色みを帯びる
　　ソフトローム土混じる
　　ローム粒子少量
3　暗黄褐色土　ソフトローム土主体
　　ローム粒子・ローム土少量
　　炭化物粒子微量
4　暗茶褐色土　ソフトローム土混じる
　　ローム粒子・炭化物粒子少量
5　暗茶褐色土　ソフトローム土主体
　　4層より黄色みを帯びる
　　ローム粒子・炭化物粒子微量
6　暗黄褐色土　ソフトローム土主体
　　ローム粒子・炭化物粒子少量
　　割れ礫（径2～7㎝）を含む

SC3



SC3
1　暗茶褐色土　ソフトローム粒子少量
　　黒みを帯びる
2　暗茶褐色土　1層より黄色みを帯びる
　　ソフトローム粒子多量
3　暗茶褐色土　2層に近似するが、
　　ローム土多く混入
　　焼土粒子微量　しまり良い
4　黄味褐色土　ソフトローム土主体
　　暗茶褐色土混じり
　　ソフトローム粒子多量
　　焼土粒子微量

第566図　Ⅱ区集石土壙（1）



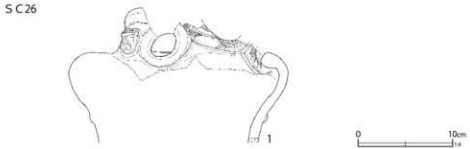
SC4
1　暗褐色土　ローム粒子少量　炭化物・焼土粒子微量
　　ソフトローム土混じる

SC5
1　暗茶褐色土　ソフトローム土混じる　ローム粒子・炭化物・焼土粒子少量
2　暗黄褐色土　ソフトローム土主体　暗茶褐色土・ローム粒子少量
　　ローム小ブロック混入

SC6
1　暗褐色土　ローム粒子・炭化物・焼土粒子・
　　ソフトローム土少量　黒みを帯びる
2　暗茶褐色土　ソフトローム土多量
　　ローム粒子少量　炭化物粒子微量
3　暗黄褐色土　ローム土主体に２層土を混入
　　炭化物粒子微量

SC9
1　暗褐色土　ローム粒子少量　ソフトローム微量　黒み強め
2　暗褐色土　１層に近似するが、ソフトローム土の混入多い　しまり悪い
3　暗茶褐色土　ソフトローム主体で、１・２層土を混入　しまり悪い
4　暗茶褐色土　ソフトローム土少量　均質
5　暗茶褐色土　ソフトローム土多く黄色みを帯びる
　　ローム粒子多量　小ブロック状に炭化物粒子を含む

第567図　Ⅱ区集石土壙（２）



第568図　Ⅱ区集石土壙出土遺物（1）

第８号集石土壙（第570図、第572図１～14、第586図８）

Ｐ－10区に位置する。平面形は不整形で、規模は長径1.85m、短径1.10m、深さ0.20mである。断面形は皿状を呈し、壙底は２段掘り状の段差を有する。礫は中央部付近にまとまっているが、段状に張り出した部分にも分布する。また、遺構の範囲を超えて礫が散在しており、礫群が撹乱を受けて礫が散乱している可能性もある。壙中で火を焚いた痕跡は認められなかった。

集石の礫は、礫総個数205点、礫総重量17.6kgであり、チャート系礫の占める比率は76％である（第586図８）。各重さの中で、一定の割合で全礫が含まれている。

時期は勝坂式中段階期から新段階にかけての時期の可能性が高い。

遺物は第572図１～14が出土した。１は２列の結節押引文を施文し、２は刺突文状の爪形文を施文する阿玉台Ⅱ式土器である。３、４はキャタピラ文や爪形文を施文する藤内式土器、５～10は平行沈線で区画文を施し、爪形文を伴う三叉文や蛇行爪形文、蓮華状文等を施文する藤内式の新しい段階から井戸尻式にかけての土器群である。11は撚糸文Ｌを、12は０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する。13は加曽利ＥⅠ式のキャリパー形深鉢の口縁部破片と思われる。

14は打製石斧である。分銅形を呈し、刃部は両刃である。

第222表　Ⅱ区集石土壙出土復元土器観察表（第568図）

番号	器高（cm）	口径（cm）	最大径（cm）	底径（cm）	備考
568-1	［14.2］	(19.2)	－	－	20%

第９号集石土壙（第567図、第572図15～18、第587図１）

Ｓ－10区に位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長径1.47m、短径1.44m、深さ0.60mである。断面形は漏斗形を呈し、壙底は小さなピット状を呈している。礫は中央部を中心に壙底まで詰まっており、壙中で火を焚いた痕跡は認められなかった。

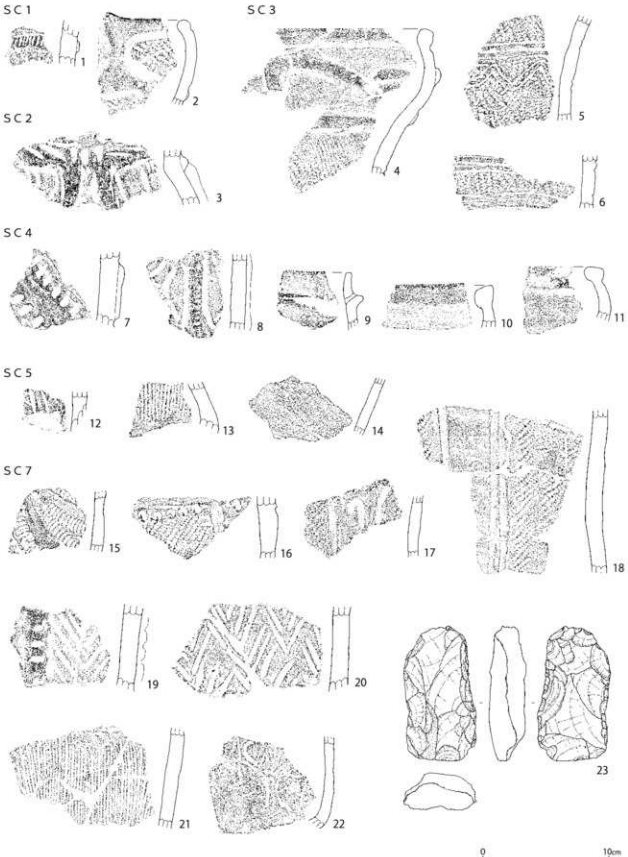
集石の礫は、礫総個数727点、礫総重量37.5kgであり、チャート系礫の占める比率は90％である（第587図１）。全重量階層において、全礫が含まれており、重量の軽いクラスでも全礫が比較的多く含まれている。

時期は勝坂式中段階の藤内式期と推定される。

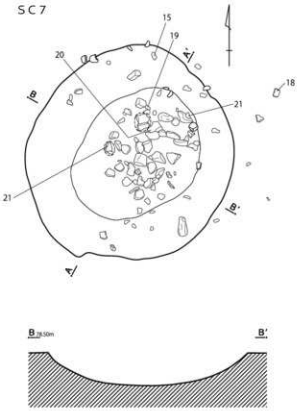
遺物は第572図15～18が出土した。細片ではあるが、15は爪形文、18は結節押引文を施文する阿玉台Ⅱ式と思われる。16、17は平行沈線で施文する藤内式に比定されよう。

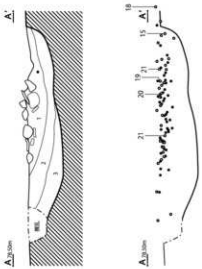
第10号集石土壙（第571図、第572図19～22、第587図２）

Ｒ・Ｓ－11区に位置する。第16号集石土壙が隣接する。平面形はほぼ円形で、規模は長径1.06m、短径0.98m、深さ0.15mである。断面形は弧状を呈し、床面は丸く窪む。礫は中央部よりや

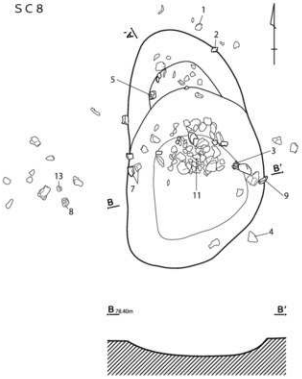


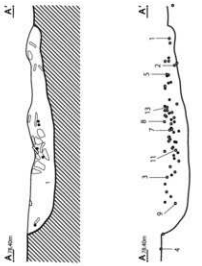
第569図　Ⅱ区集石土壙出土遺物（2）





SC7
1　暗褐色土　黒みを帯びる　ソフトローム土混じる
　　ローム粒子少量
2　暗茶褐色土　ソフトローム多量　ローム粒子・炭化物少量
3　暗茶褐色土　ローム粒子多量　2層より黒色みを帯びる
　　ソフトローム土の混入も多い
　　炭化物はほとんど含まれない





SC8
1　暗茶褐色土　ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
　　しまり悪く粘性強い

0　1m
1:30

第570図　Ⅱ区集石土壙（3）